
俺と彼女と妹と。

柴わんこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と彼女と妹と。

【Zコード】

Z7679K

【作者名】

柴わんこ

【あらすじ】

どこのでもいるような高校生こと平沢有一は恋に悩んでいた

しかし、そんなことどうでもよかつた、いつの間にか彼女が出来たのだ

しかもその相手は校内でも人気のある美人で、有一の好きな相手でもあつて2人は恋仲になりましたエンドにはならない！むしろこの2人はどんなエンドを迎えるのか？！そして妹はそれを許すのか？！妹の気持ちは兄に届くのか？！まさかまさかの妹エンドへ突入してしまうのか！？？

とこ「うわけで有」と彼女と妹が繰り出すラブコメディの始まりッ！
170000PVに25000コニーク！ 夢なのか？！いいや…
夢じやない！！

うわ嬉しいーーー！ これからもよろしくお願ひします！

現在お気に入り件数【70件】を確認しました！

1話（前書き）

あらすじ……もしかしたら脱線する恐れがあります

PS・中学生の頃から始めたこの作品ですが、やはり、明らかに文章の雰囲気が最近のと違います。なので、お暇とあらば、最新話まで読んでみてください。一話一話が短いので恐らく最新話にたどり着くまでそう時間はかかるないでしょう。では僕の作品をどうぞ楽しんでいってください（2010/12/27）

いつてきまーす、と元氣よく飛び出て行ったのは

有川 美咲 14歳中3 女子

「それじゃ

その後を追うように飛び出て行ったのは

有川 善人 15歳高1 男子

「美咲ー！」

「おっはよー」

と、声をかけたのは平沢じょー 14歳中3女子

「おはよー、ねね昨日のテレビ見た？」

よくあるありがちな会話が繰り広げられていた。

「ええー昨日は見てないよ？面白いのやつてた？」

「まあねーつて、なんかあつたの？」

と、美咲が質問する、これもありがちな会話である。

「えへへーお兄ちゃんの寝顔をケータイで撮つてたんだあ

……珍しい会話だつた。

「ああ、なるほど……」

「じょいはすー」お兄ちゃん好きだからなあー。このプロロコンぬ。

「ねえねえ美咲も見る？ 結構いい絵が撮れたんだよ？」

「あたしはバス」

「ふーん……お兄ちゃん可愛いなー」

チャイムが鳴り、昼食の休みが始まった。そして当然のようじに美咲はじょーの近くへ。

「じょー、毎日いるある？」

今日は給食ではないので自由に場所を移動しても良い日だった。

「う~んどうしようか」

「うひー」 もまだ何処で食べるのかを決めていなかつたようだ。

「じゃあ図書室にでも行つて弁当食べようか?」

「ひー」 ひーには決まって2人は図書室に行つて食べるのが毎回のお決まり事となつてゐる。

「うんいいよー」

すんなり話が進み、場所が確定したようだ。

「やつぱりこじだよねー」 2人は図書室へと移動する。

はあーとため息をつきながら席に着く、しばらく何を話そうかと思つていた時

「ねえ美咲?」 こじだいが話を切り出し美咲は、ん?と耳だけを傾けた。

するとこじだいは「 美咲つてもしかして衛くんのことが好きなの?」と問い合わせ始めた。

対して美咲は思わず口の中のブチトマトを発射しそうになつた…

が! 美咲は何とか頑張つてそれを防いだ

「いついやいやそんなこと無いってマジでありえないっつーの」
必死に反論する美咲、でもその顔は赤く、それを見てこじだいはおやおやあー? と確信し、そこからさりにそつなんじょ? と追い討ちをかけた。

実際、美咲からすると素直に好きといつて言葉が口から出せないだ

けの

話なのだがどうやら【だけ】ではすまない話らしい。

「ええーぜつたい衛くんのことが好きだと思つんだけなあ」
すでに分かつてしまつたこよいにとつては今の美咲は格好の獲物
だ。否定すると分つて好きなんじょ？好きなんじょ～？とこ
よいは質問を続けた……。

その日の夜美咲は自分の部屋で図書室での話を思い出していた。

「衛くんかあー」

ハアーと深くため息をつく。

「衛くんつて彼女とかいないのかな？……いそうだなあ」
どうやら恋の悩み事らしい。

「明日、少しでもお話できないかな～」

どうやって衛に近づけば良いか分らないんだよね～せめて席が隣
になれば良いのに……

「でも…頑張るしかないよね！」

そう心に決めた美咲はガバッと勢いよく布団を掛けた……

その日の朝 こよいの大好きなお兄ちゃんこと、有一の高校にて…

「なあ有一」

と声をかけるのは美咲の兄、善人だった。この一入、兄妹揃つて
クラスメートだつたりする。

「なに？ 善人、なんかあつたのか？」

「ああそれがな久しぶりに口げんかしたんだよ」

口げんかねえ…俺は一生やらないような気がするわ……あいつとケンカは危なすぎる。次の日記憶喪失になる危険性があるからな…」。

「誰と？ やつぱりお前のことだから妹とか？」

「正解…」褒美として「ハピエンをお見舞いしてあげます」

「えつ…？ なんで…！」 痛ツ…」

何で正解したのに罰が送られにやならんのだ、それに少しば手加減しりよ…

「痛つたいな、何すんだよ… … … つてか何でけんかが起こったんだ？」

すると自分は悪くありませんよーという口調で善人は話しひ出した。「俺さ、ノックしないで部屋に入つたんだ、するとさーこきなりさーお兄ちゃんのバカーつてやー」

「 それはお前が悪い、あとちやんと人の部屋にはいるときくらいノックはしり」

これが普通の妹…うちの妹とは大違ひだ、だつてさ

その日の夜、うちの妹ことよこは兄有一を待つていた。

そろそろお兄ちゃん帰つてくれるかな？

「ただいまー」

お兄ちゃんが帰つてきた！私はこの時を待つていたあ… … ダッ

シユ！

「おつかえりーお兄ちゃん…！」

ダッシュしたこよいはそのまま勢いよく有一に飛びついた。

「うわッ！ こよー！ いきなり飛びつくなー！」

有りは慌てて「よこ」を体で受け止めた、ドサッといづ音を立て勢

「さつ
一葉」

「だつて遅いんだもん帰つてくるのが」
笑顔で二叶はそう言つた。

第三回 亂世の政治家

「だからって飛びつな！ それとほつぺたスリスリするな、ほつ
ははくつくすぐつたい、離れてくれこよいッダメだくすぐつたい」

絶対離れないもーん」

「よこからあるどじり」でもあるようだ。一般家庭、なのだ。

「つたぐ、くすぐつたいんだよスリスリされると
腕に抱きついてくるこよいを無視しつつ、居間へと移動した。居
間へ入つた瞬間、こよいは有二の腕からすり抜けて台所から2つの
お皿を運んできた。

「えへへー今日はお兄ちゃんの大好きなハンバーグでーす」「やつた。俺こよいの作るハンバーグ好きなんだよなー」

「えつ！ ホントー？」

【ありがとうございます】

「おお、もう一回いいの？」

本居宣長著　新古今圖書集成　卷之三

そんなこんなで有一はハンバーグを食べ終わつた。2人にはどういつたわけか親が居ない。家事はほとんどこよいがやつてゐる。ちなみに有一も手伝えることは手伝つてゐる。

つていた……。

「よいは有一のことが好きだ、でもそれは叶はずがない恋、こ
よいはそれを自覚している。それでもこよいは自分に正直に恋愛を
しているのだ たとえそれが叶わないと知りながらも……。

1話（後書き）

初めまして柴わんこと申す者です
よかつたら感想を聞かせてください、実は動力が感想だつたりして
気に入つていただけたらお気に入りに追加してもらつと嬉しいです
…

ごめんなさいまだ本編ですらありませんね（汗）
楽しく見ていただけるなら結構です、声に出して笑うのならなおさら結構です

俺は今日こそ咲月さんに声をかけようと思つ！

と、やる気満々のは有一である。彼は昼休み、友達の善人を連れて咲月を待つていた。

その連れの善人は案の定フラれるであろう有一を全力で笑つてやるつもりだった……のだがそんな一人に予想外な出来事が待つていた。

「よしつ！ 今が絶好のチャンス！ 咲月さんの周りには誰もいな
いッ！」

有一はガツツポーズし、善人に小声で行つて来ると叫つと有一は咲月の元へと走り出した。

「おう、ビシッと言つて来い」

と、善人は脳内で逝つて来いと変換し、その意味を込めグッジヨブ！ と勢いよく親指を有一に突きたてそのまま会話が聞こえる範囲へと移動を開始した。

有一の胸はドキドキ高鳴つていた。

やべえ…今ごろになつて緊張してきた。

それでも有一はその足を止めない、言つだけ言おうと思つてているからだ。

結果がどうであれそんなのは有一には関係なかつた。

有一は咲月に近づき声を掛けようとした、その瞬間。

『姫川さんつ！ これ受け取つてください！』

『姫川さん俺と…付き合つうつおうああああ…』

『ハツ、お前らに告白する資格はない！ なぜなら俺が先に来たからだ！』

と、まあ数名の男子が咲月の下へ群がついていた。

『うつせえ！ んなの関係ねえよ！』

『いいやあるねー！ だつて割り込みはいけないことじやんかよ』

『ハア！？ そんな理由で俺は殴られたのかよ……って姫川さんが俺に近づいてくるぞ！』

『バー！ これは俺のところへ来ているんだッ！』

『うつせえヴァーカ！…』

いつの間にかケンカが始まっていた、それを見た有一は巻き込まれたくないと思いそのまま右をして善人のところへ戻ろうとしたが、彼は呼び止められた。

「ねえねえそこの～もしかして…有一君？」

と、有一は言われた。しかも咲月に言われたのだ。

当たり前のようにはドキッとした。跳ね上がる心拍数、止まらないドキドキ。

それはまるで一瞬心臓が止まつたかのよう。いや 心臓が止まつた。

どうやら本当に氣絶してしまったらしい、咲月は申し訳なれりうに有一の顔を覗き込む。

有一は口を開いたまま白目をむいていた……カオスな光景であった。

それを見ると咲月は、つわあ～なんかあまり見たくなかったな～。とだけ言つと有一の口を閉じ、目を瞑らせ、そして、よつこいしょ～。との掛け声とともに有一を抱き何故か自宅へと歩き始めた……ちなみにけんかしている奴らは皆気づいていないようだ。

しかし、それを見たものがいた…… そう付添い人の善人だ、善人はこの光景を見るや否や目を何度もこすつてはもう一度、こすつてはもう一度を繰り返していた。

そんな目の前の光景に啞然としている彼の視点で見てみよう。

やつべえ超ウケルんですけどあはは！ あはは！ 有一のやつ気
絶してんじやねえのかあ？ うつわー姫川さん思いつきり見てるー
ははは……ウケルははは。でもさっきのあれはなに？ 今何が起き
た？ 姫川さんが有一をおんぶしていつたように見えたけど……お
願いだ夢なら醒めろッ！

！（問題発言）
俺は……俺はッ！
俺は全かであーこの不幸を笑ってやるんだ！

なあ夢なら醒めてくれよ……あいつまで幸せになつたら俺は……。

そんな善人を見て、一人の生徒が話しかけた。

「お~い善人~起きろ~目が死んでるぞ? えっと.....」
なんて言つんだっけ?」

「俺なんてただの……くそつ……」

「ああ、そうだったあれば、ようやく思い出した」
すると彼は、善人にもう一度声を掛けた。

「お~い、善人？……ゴホン。『返事が無い！』ただのしかヴァ

アアアアツツーー!』

何かを言いかけた彼は善人の目覚めのパンチを喰らってしまった。善人は彼を殴った後、ふらふらと千鳥足で歩き、そしてあつ……

とか言いながら倒れた。

もう立つのさえ面倒になってしまったのだろうか……善人はそのままほふく前進で教室へと帰つていった。

起き上がつた時の彼の制服は……言つまでもないだらつ。もし彼の悲惨な制服を見たのなら「モップ掛けお疲れ」と言つてやつてほしいものだ。

その頃、有二を拉致つて行つた咲月はどうと?

「なんか知らないけど有二君ゲットおーへつ……へへッ」

と、彼女を知る者が見たら恐らく耳を疑うであろうセリフを咳きながら彼女は有二を背負い自宅へ無事、帰宅した……。

いや、詳しく言つと咲月自身は無事だつた。

と、言つのも、いつもは頭すれすれでセーフの看板が背中にあぶつた有二の頭に直撃したのだった。

ともあれ、自室へ行き、咲月は有二をベッドへ降ろした……と同時になんかドキドキしてくるのを彼女は感じた。

「やっぱり恥ずかしいよね~でも見てるときはもっと恥ずかしいんだろうな~」

やっぱり……寝てるときにされちゃつてかわいそうかも……。

「でつでも? やるなら? 今しかないんじや……でもなんだか恥ずかしいな~

だよね……だつてこんな事するの初めてだもん……。

有二には少し申し訳ないな~と思いつつ、咲月は有二にそれを近づ

けていった。

咲月のと有一のが近づいていく……咲月側からすると自然に有一の顔が近くなつてくるのだから咲月の頬はますます赤くなつた。もう心臓の音なんてこの部屋隅々に聞こえそうなくらいだった。

でも今がチャンスなのだ、今自分が彼に対して何をしたって当の彼にはそれがわからない。

そう、バレなければいいバレなければ……。今がこれ以上とない絶好のチャンス……彼女はばバになきや良いバになきや良いんだ、どうか起きないで……どうか起きないでと祈りつつようやくその行動に出了

2話（後書き）

感想募集中です。気に入つていただけたらお気に入りにでも追加してください

3話（前書き）

次から本編のスタートです
楽しく読んでもらえれば嬉しいです

『カシャー!』とケータイ音が部屋に響き渡った……。

咲月は写真を撮り終えると緊張した~とか言いながらベッドに^{有二}ダ
イブした。

いきなり大胆な行動に移つた咲月には勝機があつた。

咲月がいつもどつづり有二の近くにいた時だつた。 そう、いつもど
おり。

その日、咲月は例の如く、大勢の男子に交際を迫られていた。そ
んな時、有二はその男子共を搔き分け、咲月の手を引き、助けてく
れたという逃走劇があつたのだ。そして、その時から自分を助けて
くれた有二が気になつていて。 それから彼女はいつの間にかいつも
気づかれないよう有二の近くにいた。

たま~に善人が『美少女の気配がする!』とか言つてバレそうにな
なつたこともあつた。

でもストーキングに慣れてきたらそんなことも無くなつていつた。

そんな事をしている日が続いたある日、実は有二に告白する者が
現れた。

咲月はあまりの急展開に心底不安になつた、有二君が取られたら
どうしよう取られたらどうしよう……

そんな気持ちを抱えながらいつもどつづり有二の声が聞こえる範囲
内に隠れて耳を澄ませていた。

お願い、上手く行かないで、ただそう願いながら。

「あつ！あの！呼び出しちゃつて『めんね、あのさつ突然なんだけど平沢君つて彼女とかいるの……？』

「こいつ……！やつぱり告白する氣だ！と敵意をむき出したて、心中で失敗しるーのやつー……と、叫びつつ咲月はその話を聞いていた。

「いやいや俺には彼女なんて居ないよ？」

笑いながら有一はそう答えた。それを聞いた2人は同時に良かつたと安心した。

しかし咲月はまだ完全に安心することは出来ない、今から始まるのは紛れもなく、告白だからだ。

「じゃ、じゃあさ平沢君、私と……その、えっと……付き合つてくれないかな？」

後半声が裏返りながらも勇気を振り絞つて女子生徒はそう言った。そう、勇気を出して告白をした。

やつぱり告白か！ そう思った咲月はいつの間にか手を組み、聞こえない程度の声で断れ断れ断れ断れと呴き始めた……。

そしてその問いに対し、有一は笑いながら答えた。

「『めん…俺付き合つわけには行かないんだ、だつて、俺には好きな人が居るんだ』

咲月は良かつたと心底安心した。でも今度はその【好きな人】が気になつて仕方が無くなつた。

そんな心配をよそに咲月の気持ちを代弁するかのようにその女子生徒は質問し始めた。

「一体、平沢君の好きな人つて誰？答えてよ……お願い」

「彼女は今精神的につきてる。少し声が震えているのだ……。

「『めん、教えるわけにはいかない』

有一はハッキリとそう言った。

「なんで？！ いいじゃない！ 私には教えたって！」

そう言われた女子生徒はムキになっていた。フラれたのが悔しかったんだろう。もう感情が抑えられなくなっている。

それでも有一は教えなかつた……なぜなら有一なりの考えがあつたからだ。

「ここでもし、あなたに教えたならあなたはその子に危害を加えるかもしれない。多分そんな事しないだろうけどもしそんなことをしたら俺は困るしもちろんその子も困る。そして一番困るのは……【あんた】だ」

急に有一の雰囲気が変わつた。いつもは明るい有一がものすごい真剣になつていた。

いつもの有一君から何か変わつた…？ 咲月はそう感じていた。普段明るく楽しげに過ごす彼の感じは色にしてオレンジ色、しかし、今ここにいる彼の感じは色にして黒か青。

有一は言葉を続けた。

「……だから俺は答えない。それが彼女のためだから」

そう言って彼は去つていった。

しかし、去るのは良いがその途中に咲月が隠れている。自然と咲月との距離が縮まっていく。もしここで見つかつたらなんとなくやばい気ムードがする。やつ思った咲月は口に手を当てて息を殺した……。

徐々に近づいてくる足音。咲月は心臓がバクバクしていた……。

そしてちょうど咲月が隠れている所を通り過ぎた後、有一はつぶ

やいた……いや、つぶやいてしまった。

「俺が好きなのは咲月さんだつーの……」

「……！」

それを聞いてしまった咲月は当然の『とく驚いた。そして有一の姿が見えなくなつた後有一君の好きな人つてあたしだつたんだ……うわあー照れるなあー。と誰にも聞こえない声で咲月は喜び大きくガツツポーズをした。同時に女子生徒に対して『ざまあみろ！』と思いつきり悪なセリフを心で嬉しそうに叫んだのはここだけの話としておこう。

そしてそんな彼女は例の女子生徒を気にしつつ、教室へと戻つて行つた。楽しげにスキップを踏みながら。

そう、ここで聞いた言葉こそ【勝機】と言つやつだつた。告白しても有一君はあたしの事が好きなんだから大丈夫でしょ。そう思つていた。

日も暮れ、薄暗い部屋に一人はいた。もうすぐ夕飯時と思つた咲月はすぐそこで寝ている（氣絶している）有一のためにとりあえずオムライスでも作つてやろうと思つていた。それ以前にやってみたことがあった。

とにかく、怪我もなく、無事を作り終えた咲月は作りたてのそれを片手に有一を起こしに部屋へ急いだ。

「おーい夜だぞ、起きてー」

珍しい起こし方だなと思いつつ声を掛け続ける。

するとあと五分……と有一がつぶやいた、それが面白かったのか咲月は笑わないようにと口を手で塞いでいた。

笑いがおさまると今度はほっぺたを突きに掛けた。

つんつん、と突いては起きるか？ 起きるか？ とハラハラしながら有一の目を見る。

しかし効き目がないと分るともうたぐせん遊んだのでもういいかげんに、起こしてあげようか。

そう思い、有一の耳元で、「起きて……」と、やわやかにみた、すると有一の体がピクウウと震え、よつやく有一は目を醒ました。

「ん？！ あれ？ 僕……あれ？ 何で咲月さんが？ やして……は……？」

まあなんとも分りやすいリアクションなんだわ！」と笑いつつ咲月は事情を説明した。

いろいろと説明され、しばらく沈黙が続くと、有一はそつだつたんだと一言呟いた。

そしてそつなんだよーと咲月は言い返した。特に話すことだがくなつた咲月はさつきの作りたてのオムライスを有一の前に差し出した。

「えっと……俺に？」

「うん、そうだよー」

「で……これって……もしかして……？ まさか？」

「うん、文字どうりそのままか……だよ？ でさ答えは？」
答えが分つているとはいえ、少し恥ずかしかつた。

しかし、予想通りの答えが返ってきて咲月は安心した……。

「もちろんYES！」

「そう有二は答えたのだ。

その答えを聞き咲月は有二に抱きついた。

「やつた～！ 成功した成功したよーーー！」

「あ、あはは～まさか咲月さんが告白してくるなんて思わなかつたよ……夢じゃないよね？」「これ」

普通の男子なら凄くドキドキするようなシチュエーションだが、このよいのせいいか、それともおかげなのか、有二はある意味、耐性が付いていたため咲月の予想と裏腹に至つて抱きつかれても普通通りに接する事が出来た。

充分に。そこからさらに、余計な喜びを分かち合つた後、有二は咲月のオムライスを食べ始めた。

「あー、これおいしいよ！」

「そう？！ やつた褒められちゃつた

……ちなみにそのオムライスにはケチャップで【付き合つてくれる？】と頑張って書かれていたんだとか。

3話（後書き）

明日から学校です… 1週間に1話ペースであげると思います
それを判つてもらいたいです、お気に入りに追加してもらえたと嬉しいです

感想も書いていただけたらうれしいです（批判だけは避けたいけど…
レビューとか書いてくれる人がいらっしゃつたら感謝します
ではこの辺で失礼します

4話（前書き）

本編スタートです

姫川咲月、彼女は周りの男子から注目を浴びている女子だ、それゆえに彼女の席の隣に決まつた男子は座つているだけで顔が赤くなることがある。『一万円でその席を代わってくれ!』なんてこともある。

大抵の男子は彼女のことが好きであり、それゆえ、とある女子が頑張つて男子に告白しても『俺、好きな人が居るんだ、だから…ごめん』と言われフランクしてしまうことが多い。結果的に、姫川咲月のせいで告白が失敗した女子は校内のおそよ半分に近いんだとか……。

そして今その咲月は有一に告白し、OKを貰つた。

他の男子がコレを知つたらどうなるのだろうか……。

オムライスを食べ、喜びを分かち合ひ、しばらくお話をしたところで有一は帰ろうとした。

が、咲月に止められた。泊まつていきなよ。そう言われたが、それでも悪いからと帰ろうとしたら今度はまさかの手刀が飛んでき、有一はこの日2度目の気絶を経験することになった。

それからの事、咲月は写真撮つたりツーショット撮つたりと【なんでもあり】の、この状況を楽しんだ……それより有一は大丈夫なのだろうか。

やりたい放題していると咲月はあることに気づく。

「それにしても有一君つて呼ぶのもあれだしな?…あつそうだ有ちゃんでいいんじゃない?…そうだよ有りちゃんが良いよー。うんうんそうしようつーそうしようつー

そう呼ぼうと決めた咲月は有ちゃん有りちゃんと嬉しそうに笑くと

有一の隣で眠りについた……。

が、実際は恥ずかしくて恥ずかしくてなかなか眠れずにいたんだとか……。

別の場所で、その事件は起つていた。

有一が帰らない（帰れない）と言つことは当然、あの人気が心配していたのだつた。

「お兄ちゃん…帰つてこないな…」

テーブルの上にはお茶碗が2つ、そして台所には美味しそうなすき焼きの鍋が置いてあつた。

こよいはまだ夕食を終えていない。ずっと……ずっと有一の帰りを待つていた。

ケータイで連絡を取ろうとしたが……全く返事が返つてこない。元々2人で暮らしてゐるこの空間に一人ぼっち……こよいは不安で不安でしうがなかつた。

お兄ちゃんにもしもの事があつたらどうしようか……。一人になるのは寂しい。

平沢こよい、そして有一。この2人の親は実はお金の問題で育児を放棄し家を出て行つてしまつた。

まだ2人が幼い時だつたため有一もこよいも親の顔は知らないでいる。と、言つよりどんな顔だか分からぬ方がしつくり来るかもしれない。

それから2人は母方の親に預けられ育つた。

それから10数年経つたある日、有一は高校へ行つたら1人生活をすると言ひ出した。

それは自分がこの家庭において迷惑な存在なのだと判断した上の意見だった。

それに自分が出て行けば「よいも少しは俺がいなくなつた分、裕福な生活が出来ると有一は思つていたのだ。
でもそれは違つた…「よいにとつての幸せは有一と居ることであり、それを聞いたこよいは「よいも行く!」と有一に言つた…。
いや、叫んだそうだ。

その意見を有一は反対した。1人だつたらあの仕送りで何とかなる。でも2人だとどうだう。
そう考えての反対だった。

そんな有一に「こよいは」飯は?洗濯は家事とかちゃんとできるの?と核を突いた質問し、その質問に言葉を詰まらせる兄に、ほぼ強引、いや、10割がた強引についていくことに成功した。

そうと決まれば「よいは2人生活の準備を始めた。

勉強を放り出してまで料理修行に励んだ。もちろん有一のために

始めは分量を間違えたりやけどをしたり指を切つたりと散々だったのだがそれでも「よいは」くじけなかつた…ただ有一の【ありがとう】が聞きたいがために…。

そして今がある、問題になっていたお金については何とか解決した。

「よいが手料理を作ってくれるおかげで安上がりで済んだのだ。わざわざ値引きシールの貼つてある弁当を買わなくても済んだ。そういう日々を送り、そして今に至るというわけだ。

こよいは遠くなる意識を必死にこらえていた。

「まだ……帰つてこない……」

あれからどれくらい時間が経つただろう。ふと時計に目をやると短い針が12を指していた。

涙が流れてきた……すぐに拭き取った。

でないと有一が帰つてきたときに笑顔で迎えることが出来ないからだ……それでも涙は止まらなかつた……。

「遅いなあ、お兄ちゃん……」

溢れる涙を拭い、泣き声を抑えながら「こよいは夜中遅くまで待つ続けた。

その部屋にはずっと1人孤独な少女の泣き声が響いていた……。

4話（後書き）

今日は入学式だけだったので早く終わりました、なので書きました
感想待つてます、レビューしてくださる方がいらっしゃったら嬉しいです
お気に入りに入れてくださる方がいらっしゃってもなおさら嬉しいです
ではこの辺で失礼します

感想お待ちしております。

有一は目が覚めた。と同時に「わあっ！」と大声を出した。何故そんな声をあげてしまったのかと言ひど、有一のすぐ傍で咲月が寝ていたからだった。

思わず有一は口を塞ぐが遅かった。咲月はその声で起きてしまった。

「ふあ～あ、あれ～？ 有ちゃん起きたんだあ～」

「……有ちゃん？ それって俺のこと？」

急に有ちゃんと呼び名が変わっていることに少々有一は困惑った。

「そうだよ～有一だから有けやん、おかしくないでしょ？」

「そりやそうだけど……」

もしかしてこれが寝ボケでいるってやつか？

なんか結構危ないオーラが出てるんですけど……」 いや、大人なカンジが……ちらリズムが。

半開きの田んこで、ニヤッと笑う口元、何かたくらんするとしか有一には思えなかつた。

その予感は的中した……。

「さて問題で～す、今田は一体何曜日じょ～う…か？」

嬉しそうなトーンで問題を出してきた。

「今日は…土曜日だつけ？」

昨日が金曜だから今日は土曜で間違いないはず……。

「正解！なので～今日は学校はお休みで～す、といつわけでテートだ～！」

えつ？ テート？ ……俺にとつて始めての…「テート…それが…咲月さんとか～。

いやいや待て待て、もっと冷静になれ何か忘れているぞ俺…何かを忘れているんだけど…わからない。

「とりあえず有」は何となく、ケータイを開いた。そして田を疑つた…！

「ええええーーー着信履歴が36件もーーー？」

「一体何があつたんだと下に下に履歴を確認する有」、確認するにつれどんどん顔が引きつっていった。

「全部こよいかだ……！まさか！俺が昨日帰らなかつたから心配していたのか……ーーー？」

「こよこの事だ。きっとやうに違ひない…そう感じた有」は頭をフルに回転させ始めた。

「こよこの様子を見ておきたい。でもデータに出かかるんだからどうにか一旦家に帰る口実を……。

「ん？待てよ？そういうえば俺は今制服のままじゃないか……！そっかそっかこれはいけるぞよしつ！」

「ね、ねえ咲月さん、データって何処へ行くの？」

「うーんそーだねー……あつカラオケにしようカラオケ」

と言つわけでとりあえず一人はカラオケ店に行くことが決まった。それから有」はさつき思いついたことをそのまま咲月に話した。

「でや、咲月さん

「何？有ちゃん」

「俺さ、制服のままじゃん、だから私服に着替えたいんだけどいいかな？」

「うーん…まあいいか、私服の有ちゃん気になるし」

「じゃそういうわけでいったん家へ戻るね。なるべく急ぐからそれで待つてね？」

「うん待ってる、あたしずつと待ってる…あなたが戻つてこなくてもあたし待ってるから」

「…まだ寝ボケてるの?それに何?その戦地へ行く恋人を送り出すよつのセリフは」

「う~ん、ここはスルーして欲しかったな~」

「あつそなんだ、ここスルーなんだ」

俺なら突っ込んで欲しいけどな~そう思いつつ有一はドアノブに手を掛け、部屋を出て行つた。

「有ちゃん早く戻つてきてね~」

「ばいばい、と咲月は有一の背中に手を振つた。それからじやああたしも私服に着替えようかな?そう思い立ち上がつたその時

「…ごめん!玄関つて何処にあるの!~?」

有一はすぐに戻つてきた。

「おお、お帰り旦那さん」

少しだけからかい気味に咲月はそう言つた。

「ただいま奥さん…つて何やつてんだ俺…」

有一はちゃんと答えてあげた。

「今良かつたよ~」

「ありがと。つてか玄関ど~」

咲月に教えられた通りに行くとちやんと外に出ることが出来た。

案外咲月の家の中は広かった。

そこからはもう道が分るから問題なく真っ先に家に帰ることができるた。

全速力で我が家へと走った有一、そーっと家のドアを開ける…中に入り

こよいを探す……すると案外すぐに見つけることができた。その後周りを見渡して有一はため息をついた。

そもそもお茶わんが片付けられてない所を見て有一はこよいがまだ食べてないことが分つてしまつたのだから。

一つため息をつき、有一はこよいをそつと抱きかかえ、ベッドへと運んでやつた。

運んだら丁寧に布団を掛け、有一はこめんな…こめんな…と謝りながら頭をさすつた。

心なしかこよいが笑つたように見えた。そして有一はせつせつと着替えて置き手紙を書いて

咲月の家へと走つていつた。

ゼエ…ハア…やばい。きつつい石に往復を全速力はきついぞ…ハア…ハア

全力で坂を上がり、右へ左へ曲がる有一、そしてまた右へ曲がるつとしたその時

「おつと……！」

有一はあちら側から来た女の子とぶつかりそうになりこのままじゅ

ぶつかると予想した上でその子を受け止めに入ったのだった。

「「じめん! 大丈夫っ? !」

有一はとっさに無事か確認する。

有一は受け止める」とにつけてはす「ぐ得意なのだ…誰かさんのせいで…」。

「あつ、はい大丈夫です」

彼女は本当に有一のおかげで何ひとつ怪我もなかつた。

「良かつた、じゃ俺急いでるから」

「あ! 待つて待つて!」

急に大声を出しその子は有一を引きとめた。

「ん? どうした?」

「あのー名前を聞いても良いですか?」

少しの間を置いてその子は名前を尋ねた。

名前? …まあ助けてくれた人の名前を聞くのはおかしくはないよな

「ああー俺の名前は平沢有一、じゃといつわけで」

さつさと咲月さんのところへ戻りたい有一はすぐに名前を告げ、回
れ右をして歩き始めた。

「呼び止めちゃってすいませんでした」

「いやいや良いって」

そう言って有一はまた走り出した。

よつやく有一は咲月の家へ戻つて來た……。

「咲月さん、帰つて來たよー」

その声が山彦のように繰り返される…返事が無いからだ。

あれ？聞こえてないのかな…上がっても良いのかな？

たしかこの上の所が咲月さんの部屋だったよな…そう思い4歩5歩後ずさりをし、有一は道路まで出た。

上を見上げ、カーテンが閉まっている窓に向けてもう一回呼ぼうかと思つてゐる時だつた。

「おつかれー有ちゃん！」

咲月が有一へ向けて走つてきた。ドアが開いていることもありその勢いは止まることなく

有一のところまで走つてくる。これは多分、よしつー俺の胸に飛び込んでこここつーつてシーンだ。

テレビで見たことがあるぞ。そつとなればこちらが取る行動はもう分かつてゐる。

【受け止めればいい】やつ、じよいみたく受け止めてやればいいんだ。

有一は両手を前に突き出し咲月を受け止めた。

「咲月さんつて軽いんだね」

まず最初に俺はそう思つた。

「えー？…もうー有ちゃんつたらー」

何が有ちゃんつたらーなのかが分からぬ。

「じゃあそろ行こうか

その日、2人は夕方まで歌いつくしたんだとか……。

「有」と咲月がカラオケ店で熱唱している頃。こよいは田が覚めた。

「あれ？ ベッドだ……あつ！」

こよいは有の置き手紙に気づき、その文章に田を通す。

「まあ、いつか、お兄ちゃんが無事だったことが分かつただけでも……」

良かつた。心の底からこよいはそう思つた。

ちなみに手紙には6時半頃に帰ると書かれていた。

それを見るところにはもう一度ベッドへ入つた。まだ眠いからだ。

「起こしてよね？ お兄ちゃん……」

そう願つてこよいはもう一度眠りに入った。

5話（後書き）

わざ見たらPV2222で驚きました、そんな事ないで良いです
すいませんでした
感想などお待ちしております、お気に入りに追加して貰うと嬉しいです
これからも頑張りますのでどうかこれからもよろしくお願いします

6話（前書き）

「ほんの辺から多分、物語が動き出すんじゃないかと思こます
それにしてもう5回で3000PVです皆ありがとうございました」といわれています
では本編をどうぞ

「おーい…」よ、夜だぞ起きてくれー」

歌い疲れた有一は家に帰りこよにを起しそうとしていた。

しばらくするとこよいがあれ？ いつの間に帰ったの？ と言しながらベッドから出てきた。それを見て有一はこよにに背を向け居間へと戻ろうとした。

しかし背を向けた瞬間、背中に衝撃が来た…！

……「どうやったよこが飛び乗ってきたらしく、仕方なくそのまま居間へと移動し
テーブルについた。もう降りるだらうと思つていていたのだがこよにはなかなか降りてくれない。

「こよい？ もう降りても良いんじやないか？」

「ダメーこれは昨日の分も合わせてるんだから

いやいや昨日も今日も背中に乗るつもりだったのか？

しかしこのままだと夕食が来ない……ってかこよいはいつから食べてないんだ？

とか考へていてるとぐーーとこよいの音が背中から聞こえた。

「お、お、お兄ちゃんがお腹空いてるようだから特別こよにそつてあげる」

と何故か焦りながらこよいが言った。

恥ずかしかったのだろうか？ ラッキンテレが混じつている。

……素直にお腹が減つたと言えばいいのにな。それにしてもボケたのかよく分からぬ。

「まあいいか

そして「よこは両手にお鍋を持ってきた。

「いただきまーすと言つてすき焼きに手を伸ばす有」。するとちよつと待つたーと受け皿とお玉をお両手に持つたこよいがそれを制した。

こよいは有一の分をそよにはじめた。

……その時から有一は何故かこよいが怒らないことを疑問に思つていた。

こよいは見た感じいつもどうづ……。おかしい……昨日どうしたの?とか聞いてきてもおかしくないのに……でもこれはこれで良いのか?むしろ怒られないで済むからな~……ってかその理由が咲月さんのところでお泊りしてたつて事になると……こよいは何をやらかすか分からぬ。

……余分、話を付けに行くんだろうな~「よこの事だし。

」そつ考えていたら突然ケータイが鳴つた。相手は咲月さんだった。

「もしもし?」

俺は少しこよいの視線を気にしつつ電話に出た。

「あつそりなんだ、えつ?じゃ今は一人暮らしなんだ~」「こよいは何を話しているか分からぬ、もちろん誰と話しているかも分からぬ。

ちなみに電話の内容は咲月の【知つて欲しい事】という内容だった。

「えつ……～じゃあ咲円さんって…」

不意に出た咲円といひ言葉にこよにがピクッと反応した、そしてこよこは推測する……。

咲円……多分女の子の名前だよね、咲円って言ひ男つていないよねつまり？お兄ちゃんは今女の子と電話してゐて言ひの？…それにしてもお兄ちゃん嬉しそう。

…どうから見ても怪しげ、こよこの勘が正しければこれは友達って言ひヘルじゃないよね……ああ～もつひー…

そんな有二を見てこよこは今まで我慢してきたその我慢が出来なくなつた。

「あ～、うん分かったじゃあね」

そう言つて有二はケータイを切つた。

するとこよにが近寄つてきた。それに対し有二はちよつと警戒した。

「何？こよに？」

…お兄ちゃん、探りいれてるね。

「お兄ちゃん？今の誰？どんな関係？もしかして彼女？そんな訳ないよねー

だつてお兄ちゃんにはこよにがいるもんねー？」

「え？」

おこおこ……いきなりなんなんだこの光景。どうかで見たぞ…ああそうだ昼ドラマで見たんだ。

奥さんがいるのにもかかわらず男が浮氣をしてそれがバレる寸前の光景だ…って

おかしいぞ？なんでこよこが俺に突つかる？それに「こよにがい

るもんねー？」「つー。

「これじゃ俺がその浮氣男の立場じゃねえか。俺は何にも悪いことしてないよな？」

「「」よい？言葉の意味が分からない。でも「」よいが不機嫌なのはなんとなく分かつた。

でも何で不機嫌なのが分からない。教えてくれるか？」「

「やーだ、教えない」

「教えてくれよ」

「やだ、絶対教えない」

「絶対に？」

「うん、どうしても」

「いきなりどうしたんだよ」「」よい…

「やつぱ教えてくれないのか？」

「絶対教えない」

「ひやの上に来て良いくからや」

「」よいと何も言わずに「」よいは四つん這いで「」ひやへ来た。俺のあぐらをしている所へすつぽつと入つて来た。入るや否や「」よいと「」よいよこは言つた。

「お兄ちゃんだつて」言つて「」ひやせり…

「ん？ 気づいてるつて…？」

すると少しの間を置いて「」よいは話しうつした。

「お兄ちゃんは「」よいの事好き？」

「うん好きだよ」

「「」よいもね、お兄ちゃんの事好きなんだよ？」

「はは、嬉しいな」

「でもね……」「

「よこの表情が一変した。

「でも?」「

「よこは下を向きながら小さな声で言った。

「お兄ちゃんの思っている『好き』とは違つんだよ?」

「え?」「

「俺の思つてた好きとは違つて……?」

するとよこは急にじつを向いたかと思つたら俺の肩に手をついて、俺をそのまま押し倒した。

「よし……?」

「……お兄ちゃんは何も分かつてない!今までこのよいがどんなことをしてもお兄ちゃんはまったく気づいてくれなかつた!……これがお兄ちゃんの事【好き】だって気づいてくれなかつた!」

「…………」

「……よこはすつとお兄ちゃんのお嫁さんになりたかった!……だってよこはお兄ちゃんの事が大好きなんだから!ずっと傍に居たいんだから!……でも……兄妹なんだよ……よこはお兄ちゃんのお嫁さんにはれない……」

するとよこは声をあげて泣きはじめた。

俺は何も言わずにあんとこいつの気持ちを込み、よこを抱きしめてやつた。

じぱりとよこは泣き疲れてそのまま寝てしまつた。

俺はよこしょと体を起しきよこを俺の部屋のあるベッドへ寝かせ付けた。

どうせよこの部屋に運んでも俺の部屋へ来るんだ。ならいつそのことじつめへ連れて来ておこづ。

ベッドを背もたれに座り、俺は考えた。
今までこよいが何をしてくれたかを振り返つた。気づいていたはずだった……。

「……昔は俺もこよいみたいな時期があつたんだぞ?」

2人が引き取られてそれから保育所に入園して何年か経つた時だつた。

『さあみんなーお昼寝の時間だよー』

との号令で園児達は自由に布団を敷き、そこに寝る事になつてゐる。「一は善人と一緒に寝るつもりだつた。2人は布団を合わせて寝そべつた。

「なあゆづじー」

「なに?よしひとくん」

「ゆづじってだれがすきなの?」

「ぼくがすきなのはこよいだけだよ」

「ええーふたりは【きょうだい】だからけつこんできないんだよー?どうせんがいつてたもん」

「できるよ、このまえながれぼしにおねがいしたもーん」

「でもふたりは【きょうだい】じやん」

「つるさいなーもつそのはなしはおしまー」

「おつけ」

俺はそのときのことを懐かしく想い返した。

「懐かしいなー」ことあつたんだよなーそういうの後は

有一と善人がお話をしていた頃。

『金のこぶ=ん』 1987年かわきたゆ=』

「えつ？」

俺はいろんな意味でドキッとした。

「あー！おにしゃんたあ

備を見、上などいよいよ足をへたへたと鳴らし備邊の布団へとやってきた。

卷之三

「だぜここがなぜここだ？」

こよしはそれだけを言ひと備の傍に潜り込んだ

「そりがせぬが、あいにしはねむる」

JRの田から毎日のよつこひよこは俺の隣で昼寝をするよつこなつた。

…その日だ、俺とこよいはばあちゃんのと所へ帰つてきて
こよいは歩きに疲れて寝ちゃつたんだけどその時に俺が聞いたんだ。

「まあちゃん、【きょうだい】ってけいじんできなーいの？」
「あー、やうだよー。確かまあちゃんの記憶が正しければ【こどー】

はセーフだつた氣がするねえ

「【こと】って何?」

「生きてつりやそのうち分かれる」

「…………」

それから何年か経つて、俺はこよいと結婚できなこと自覚した。
それからこよいのことを【妹】として見て来たんだ。でもこよいは
俺の事を【男】として見てくる。

俺、昔はこよいのことが【好き】だつたんだよ。

それにもし俺がこよいの事が嫌いなら抱きつかせたりなどしないつ
て。

やつぱりよこが好きだつたんだよ。

でも今はやつぱり咲月さんが好き。……『めんな』よこ。

「はあーあ、【兄妹】ねえ……」

誰が言い出したのか分からぬが『恋愛に年の差なんて関係ない。』
といつゝ言葉がある。

確かに年の差がどれだけあつても恋し合つてやえいれば良いつ
意味だと俺は思つてゐる。

年の差は良いのに兄妹はダメなのか……もし俺達が兄妹じやなか
つたらもしかして

なんか考えるにつれ寂しくなつてきた。

ちゅうとトイレに行こうとして立ち上がると、何かに引っ張りれる

ような感触が背中についた。

首を後ろにせり見てみるとそこが右手で俺のシャツをぎゅっと握

っていた。

俺はトイレに行くのを諦めそのまま座り込んだ。

これから俺はここにじっとしてやればいいんだ?

しばらく考えた……でも時間が過ぎるだけで何の解決策も見つからなかつた。

過ぎるのは時間だけ……迫るのは我慢だけ。

「ごめんやっぱ限界!」

とつあえず俺はこよこの手を放して急いでトイレへ駆け込んだ……。

6話（後書き）

高校入ったとたんに就職というワードを聞かされました
と同時に小説家になりたいな…とか思っている今日この頃
どなたかスカウトしてくださる人は居ないのかな??
良ければ感想書いてください。お気に入りへ入れてくださるとあり
がたいです
ではこの辺で

7話（前書き）

そろそろネタが尽きる頃です。最悪の場合来週で強引に終わってたりして……（笑）

クンクン、スゥーハーースゥー…ハアー
こよいは今、有一のベッドで寝ていた。そして有一のにおいが付いた布団をおつていた。

「やつぱお兄ちゃんのにおいだ」

布団を抱きしめて、ゴロゴロと動き回るこよい。
しかし調子に乗ったせいで、コロンとベッドから転げ落ちてしまった。
が、布団のおかげでダメージはなかった。

「落ちちゃった」

そつ言につつ布団を元の場所へ戻すこよい。

パンを焼いてかじりつけ、こよいは辺りをきょろきょろし始めた。
「あれ？お兄ちゃんは？」
分かりやすく思いつくところを総当りしていくこよい。
しかし探してみても何処にも居なかつた、ケータイを開いてみると
一件のメールが届いていた。

「お土産買つてくれるから許してくれ…？」
有一のメールを読み、こよいはソファーにめがけて思いつきりケータイを投げつけた。
「昨日あれだけの事があったのに何も分かっていないのかな…？！」
こよいの怒りはプチ爆発し、近くにあつたフォークでパンをぶすぶすと刺し始めた。

「何でお土産？！そんな夜遅くに帰つて来た田那さんじゃないんだ
しさあ……ん？田那さん……？……田那さん！」

そう叫ぶとこよいはテーブルをバンッと叩いた。

その衝撃で牛乳が零れ慌てこよいは拭くものを探し始めた……。

掃除が終わつた後、こよいはまた当然の如く有一の部屋に入り仰向
けになつていた。

「田那さん……ハアー……こよいにとつてはずつと先の話だよね……」
こよいは結婚できないことを自覚していた。有一以外に好きな人な
んでききないと思つてゐるからだ。

でも諦めきれなかつた。

こよいが小学4年生のころ慣れない手つきでパソコンに向かい
兄妹 結婚 とこうキーワードでよく検索していた。

こよいは現実を逃避せずにいられなかつた。

それからといふもの、こよいは結婚は出来ないが傍にいることは出
来るとき考え他の女に取られまいとがんばつて自分をアピールして來
た。

それゆえ、昨日聞いた咲月といつ名前がどうにも気になつてゐた。

有一は咲月の家に居た。

「咲月さん、いつから俺の事好きだつたの？」

今日はあまり話が発展していなかつた。なので有二が頑張つて話題を探していた。

「うーん、えっとね…あたしが男子に囲まれてる時に有ちゃんが手を引っ張つてくれたことあつたよね?」

「うん。…つてもしかしてそれからツ?…」

驚きのあまり有二は立ち上がつた。

「うん。それから~」

有二としてはすゞく意外だつた。まさかあれが決め手になるとは…

「だから、いつも周りには男子が居るだろ?だからそこから助け出
すんだ」

「ふうん、で?」

「いや、そこは『で?』つて言われても俺には答えることが出来ん
ぞ」

善人と有二は作戦会議をしていた。

善人は男子の中に飛び込み、ボロボロになる有二を見たいがためにこの案を出した。

有二は善人がそんな事考へてるとは知らずに聞いていた。

そして事件は昇降口で起つた。

「ありやりやーまたラブレターか~」

咲月の靴箱を開けるとありえない量の手紙が入つていた。

そしてそれをカバンの中に入れているとようやく靴が見つかった。

…ちなみに有二はそこにラブレターを入れようとして大量のラブレターを床にばら撒いた経験がある。その時善人は腹を抱えて大笑

いしていたんだとか……。

咲月が靴を見つけ、ようやく帰れると思つていたその時 - - -

『咲月さん、今日こそ答えを!』

『俺の気持ち…受け取つてください…』

『絶対に幸せにします!だから付き合つてください…』

とこんな風に咲月の周りにたくさんの男子が集まつてきていた。
…中には掃除用具のロッカーに隠れていた生徒も居た……。

「おいつ…！有二！行け！」

善人奴らを見ると次の瞬間に有二の背中を思いつきりバンッ！と叩いた。

「お、おひ、行つて来る！」

そして有二は咲月めがけて走り出した。

男子共は意外と搔き分けやすかつた。

皆頭を下げているものだから横からグッと押せばすぐにバランスが崩れる。

順調に男子共を搔き分けて行く有二。

そして難なく咲月のところまでたどり着いた。

しかし前に見てると、ドキドキせずにはいられなかつた。

しかし今はそんな場合ぢやない。連れ出せたらそつからは二人きりだ。そう考えた有二は

「咲月さんっ！『メン！』

とそれだけ言つと咲月の手を取り、近くに居た奴をなるべく【カツ

【良く】蹴つ飛ばし

ドミノの如く倒れた男子共を後に咲月と一緒に何処かへと逃げ出した。

「成功ー！やればできたなあ

「成功つて？」

「ああいやいや何でもないよ？ただ単に、困っている咲月さんを少なからず助け出せたなつて」

「ふふつそ�だねー助かったよ、ありがとー有ー君」

「いやいやとんでもない、これぐらい当たり前ですよ～

有ー君と呼ばれ有ーは急にテレ始めた。

咲月はその時の有ーの顔を見て胸がドキドキし始めたのだった……。

あれ？有ー君ってめっちゃいい人……あんな奴らとは全然違う……。
あれ？もしかして好きになっちゃったかも……。いや、まさか……
ねえ？

その瞬間から咲月は初めての恋を迎えた訳だった。

「有ちゃんかっこよかつたなー」

「ええー？そ、う、いやあ照れるなー」

「照れんなつて、全くうー」

口を尖らせいかにもからかい口調で咲月は有ーをおちよかつてみる。
効果は抜群だつたようだ。

それから2人はしばらく思い出話をした。

それから買い物へ行くからついて来て」と咲月が言いだし
いいよーと有一は軽く答えて2人は立ち上がった。

いつも行き慣れたスーパーも好きな人と来るとなんだかいつもとは
違う感じがする。

咲月が前を歩き、その後ろからカートを押しながら有一がついて行く。

やっぱり、周りから見るとカツブルに見えたりするのかな?
とかなんとか考えていると前方に見慣れた人が商品とにらめっこを
していた。

やべえ……ばれないよ!こ……とゆっくり歩いたのだが気づかれてしま
った。

「ー」の感じ……お兄ちゃん　　?!

お前は何者だよ……。

7話（後書き）

お久しぶりです！

感想待つてます、応援してくださる方がいらっしゃるととても嬉しいです

まだお気に入りに入れてない方は是非お気に入りに追加してください
ではこの辺で

感想待つてます。

俺は咲月さんの買い物に付き合っていた。
そして今、何故か妹を見つけてしまった

「やつばお兄ちゃん！？」

גְּדוּלָה...

やべえなこね気ますいなあ……昨日こよにかアレだけ言つてゐるのに俺は何一つも言わなかつた。

そして今、他の女子とデートしているときた、これがバレたら非常にまずい……。

にすればいいんだ。

卷之三

「有ちゃん！あつたあつた！これ安いよー！」

込んだ

• • • • • • • • • • • • • • • • • •

うわあタイミング悪うつうつーやばこつてやばこつてこよこの視線
が咲月さんを捕らえて外さない・・・ー！

- • • • • • • • • • • • • • • • •

咲田さんも気づいたみたい、JRの駅員さんへか……。

いきなり『彼女です』って紹介したら多分今夜、俺の命は峠を迎える

てしまつだらつ
どりする俺? 考えろ俺。

「お兄ちやん、この人は?」

やつぱりかそう来ると思つていた。

「この人は俺のクラスメイトの

「隣の席で最近仲良くなつた姫川咲月、あなたは?」

お! ナイス咲月さん!

「えつ? 私? …… 平沢こよい、コレの妹です」

コレってなんだコレとは

「えつ! ジゃあ有ちやんの妹かあ! やつかそつか~

「有ちやん?」

「 でな、今ちよつじよつぱつたつ会つて買つて物に付を合つてんだ」

「そりなんだー …… そりこつ」とかあ

そりなんだよ、そりこつことなんだよー! 嘘だけど……。

「そりこつわけでまだ買つて物終わつてないからお兄ちやん借りてくれー」

咲月さんの氣の利いた言葉でなんとかややこしくことはならなかつた。

「有ちやん、何で誤魔化したの?」

「ああ、うん、帰つてから話すよ

ちゃんと言つておかないとなー

「帰つてから…… つてことはまた有ちやんをテイクアウトできるの

! ?

「違つ違つ、つて俺は商品か」

「ナイス突っ込みー、ちなみに有ちゃんは商品ではなく旦那さんで

すねー

おしゃれ...

いいんだけどなー

とまあ買い物は無事（？）終わり、咲月さんは会計を済ませると俺

「はいこれ持つてー」

「まつ」

む、意外に重いかも……。

あいかどね

「お詫びする」と「お詫び」が混在するが、これは「お詫び」の意味が複数あるからだ。

「あつらつだ、うつ病で」

そう言つと咲月さんは何処かへと走り去つていつた……。

なのドア」に設置してあるベンチに坐つた。その瞬間

コイツ……何故ここに居る。

お、有、一、じ、や、ん、と、し、た、の、？、そ、の、袋、？、

「」

「おい善人、そこを空けてくれないか？何も横たわらなくてもさーおいおい、見た目以上に重いんだぞー俺をいたわってくれよー。」

「だつて普通に座つたらお前休憩する気じゃん？」

「こいつ単に俺の邪魔をしにきやがつたな。」

「まあいいけどさー」

「とか言つちやつてさーホントは座りたいんだろ？」

それが分かるのならそこをどいてくれ。

「…………」

「そういや、休憩するつてことは誰か待つてんの？あつ妹か」

「ああ？ここで待つてとあの人に言われたんだ」

「あの人？」

「ほらあそこ」

俺が指差すところを見て善人は「えつー？」とか言いながらその体を起こした。

「ごめんねー待たせちゃつたー」

「ん？ そんなに待つてないから大丈夫だよ」

「そう？ なら良かつたー結構な荷物を持つている人を長いこと待たせちゃつたら大変だもんねー」

「お、おい有ー」

「じゃいこつかー」

善人の存在が空氣と化した。

「そうだねー帰ろ帰ろー」

善人を無視するのが楽しくなってきた。

「ちょっとストップ！」

ほんわかムードで帰らうとした矢先。善人がそれに水を刺した。

「あ？なんだよ俺は早く帰りたいんだよ」

「ちょっとイラツときた。

「お？ってことは早くあたしと一人つきりになりたいって事かな？」

すかさず咲月さんが意味ありげな言葉を放つ。

「一人つきり！！？」

善人のリアクションはいちいち大げさだった。

「ああもう、つるさいなーじゃまた明日な」

俺は善人を無視して咲月さんに「いこ」とだけ言つてその場を後にした。

咲月さんは片手にソフトクリームを持っていた。

「ソフトクリーム買つてきたんだ」

「うん、いる？」

「ああいや俺はいいよ」

新品なら良いけど… それ咲月さんが口つけてるやつだよね… いやいや俺にはそんなことができないよ。

「えー？ 有ちゃんも食べてみなよー」

「いやいいって」

咲月さんは俺の口元にソフトクリームを近づける。当然俺は首を引つめた。恥ずかしいからだ。

「食べてみてよー」

そつ言うと咲月さんは強引に俺の口にソフトクリームを当てる。

両手が買い物袋で塞がっている俺は抵抗も出来なかつた。

「んぐ…押し付けるな押し付けるな」

「食べないのがいけないんだよーだ」

その攻撃（？）により俺の口の周りは白くなっていた。

「サンタさんみたい」

「誰のせいだよ」

「ん~とね、有りちゃんが食べないから有りちゃんのせい」

「あつ、そう来たか…」

予想では『誰だろうね~？』と予想していくんだけどなあ、意外だ
よホント。

咲月さんの家に着くや否や、ふにゃーーと音ご、カーペットの上で
大の字になる。

「あーさつきのかわいいーもつー回やつーーー」

「やだよー今日はもうしなーーー」

「えー？かわいいのにーーー」

「……照れるからあんまりそういうの」と言つちやダメだつづーの

2人つきりの時の有ーは結構デレる。少なくともやわらかくなる。

それから有ーは咲月に一応「よー」の事を説明した……。

「ーーーで、なんか俺の事が恋愛対象になつていてるみたい」

「ふーん、珍しい子だねー大体の子はお兄ちゃんには敵意を持つて
るよ?」

「ははつそなんだ」

善人に聞いたことがある。『俺昨日妹に殴られた』と。

まあそんな事俺の知つたことじやない。

「よこへメールを送りたいわつげなくケータイを開いたその時

「どうりー

「おふう！……来るならそつまくれば良いのに」

咲月さんが襲い掛かつてきた。まあ言つてみれば背中に乗つただけだ。

「え～？ そんなのつまらないよ～？ で、これは？」

「メール、こよいにつけとねー」

「ちょっと…って？」

これ説明するの初めてだな。

「えつとね、何かあつて機嫌が悪いときはメチャクチャ辛い物を作るんだ」

「ふ～ん」

「で、今日何が良い？ ってメールがきてたからそれに対して『麻婆豆腐』とこう返答を今していた所」

そのリクエストした料理は相当辛くなる。今回の麻婆豆腐もヤバい事になるだろ？ 機嫌が悪ければ悪いほど辛くなる。

ちなみに何でも辛くなる。中でもびっくりしたのが真っ赤に染まつた卵焼きだ。一体何を入れたんだ？！と言つたら、愛情！とふやけた答えが返つてきただとこがあつた。

もちろん辛かつた。説明しなくても分かるだろ？ ヤバさとか。多分今日はそこまでではないと思つけど注意が必要だと思つ。

その時、俺たちを育てたおじいさんとおばあさんせその巻き添えを喰らう

思いつきり咳き込んでいた。そのまま天へ昇りそうな勢いだつた…

なんな光景を見て俺は箸を置いたことがある。

ちなみにその時は友達とケンカしたという理由で機嫌が悪かつたら
しい。

そんな理由で天に昇つたとしたらやり切れないのでやつた。 とりあえず命あるだけ良かつたとしよう。

「じゃあ俺帰るねー」
という訳で俺は自宅へと戻った。

途中のコンビニで飲むヨーグルトと牛乳を買っておいた。TVで見ただけだが辛いものを対処するのには良いらしい。

68

自宅に着いた。少し緊張が走る。でも普通通りにすれば良いだらう。そう考へ、俺はドアを開ける。

「た
だ
い

「おつかれいいいいい——」

まあ先は姫の父、クリが待っていた。

「リクエスト通り、麻婆豆腐作つたよ！」

「おうそ」が
じゃあ食べよ」かな」

俺は辛いだろうなーと予測し、テーブルに着いた。

皿の左に水が置いてあつたがそれを無視し、さつき買つてきたばつ

かりの飲むヨーグルトを置く。

「いただれもか」

卷之三

鳥を整えおむ

「何で辛いって思ったの？」

「ああいや……ただの固定概念だよ、せーちゃん」

おかしい。この場合「よしに腹を立ててない」といひ方になると
「コレはコレでいいんだけど… それにしても美味しい。

「よい？ おかわりある？」

まあ腹立てていらないんだつたらそれに越したことはないだろつ。
それにしても明日から学校じゃん… 日曜の夕方つてなんか寂しくな
るんだよな～。

「はいお待ち」

おいたとな

「えつ？！無祖

れたのはスバル！

「知らねえよ」ハハハ時もある

兄として

こうして無事、夕食を終えることが出来た。
せっかく買ったこいつらも役には立たなかつたな～まあいい、いつ

か飲むだろう

それまで冷蔵庫へ放り投げておこう。

冷蔵庫をあけ、放り投げるとは思っていたが、実際こやるとマズイの
でちゃんと整理した上で入れておいておいた。

居間へ行くところよいがいた。

「ん？ お兄ちゃんんだ」

「…ああ お兄ちゃんんだ」

ツツ「ミが難しいぞ…」よい。そもそも一人暮らししながら俺が
来ることは明白なはずだろ？

首を仰け反りながらこよいが問題発言をした。

「あそこの、この間お兄ちゃん帰つてきてなこときに色々やうせ
てもりいました」

「色々つて？」

「部屋に行けばわかるよー」

にやけ顔でそう言われ言われたままに部屋へと入った。

そこに「[写つこ]んだ光景は……。

「あれ？」よいのベッドがある

あるえ？ 部屋間違えたかな？

一度出る、部屋の扉には『有』の部屋 とかかれたプレートがぶら
下がっていた。

「やつぱりここか」

もう一度入つてみる。

「……せりぱり」よこのベッドがある――――――――――――

えつとなんだ――あれか――『今夜は隣で寝させて……』つて何を考
えてるんだ俺は――――――――――――――――――――――――

「ひとまず元の場所へ、つて重ツ――――――――――――

兄の部屋に自分のベッドを移動させるなんて何を考えてるんだ?!

「……ね?色々させてもらつたんだよ……」

「こよに――――――――――――――――――――――――――――

……そうか、これが――――――――――――――――――――――――
だな!――――――――――――――――――――――――――――――――

だから今日また辛くも何とも無かつたんだな――――――――――

「こよに、お前は――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――――

「えつとね何て言つんだつけ――――――――――――――――

……え?

今回ちよつと長かったかな？（2話分ありますよ）
でも一週間に一回だとこれくらいでいいのかも
感想待つてます。お気に入りに入れてくださるとありがとうございます。
ではこの辺で

感想待つてます

「よこは夜這いと添い寝を同じ意味として捉えていたりしか。よつてあの問題発言を訂正すると「えつとね何て言つとんだつけ……添い寝?」となる訳だ。

まあこんな事教える奴も居ないから間違えたままつてのはあり得る話だった。

なんとなく似てるもんな、最終的に。

しかし「よこは」で寝る気だ。ビリジョウか
ああ~いや、ビリせ抗つても無駄だ。だつたら被害を最小限に抑えるのが良策だら?「
「じゃあ隣はダメだけどせめて同じ部屋だつたら良いだ」
「えへへーそんなこと言われてもこよこは行くんだけどねー」「
「少しば兄の言つことを聞け……」
被害を抑えるとかいふ話じゃなくなつた…
「話は聞くけど提案までは聞かないよー」「
「要するに自分のやりたいようにやるんだな?」
そつ言つとこよこは縦に首を振つた。

もう何言つても聞かないんだな…兄としての権力が發揮できないとは…

「分かった、もうこいつち来るなり寝るなり好きでんりつ」「
「ホント!?」

「お~、なんか暴行を受けて氣絶せられたるよりかはいいからな
咲円さんのときを思い出しながらそう言つた。

「じゃあもうこれいらないね
するといよには何かを取り出した。

「 ちょ！それ、バット！？」

「……見れば分かるじゃんー」

「いや…見ればってかそれで殴る気だったのか！？」

「よこは縦に首を振った…最悪の場合…死ぬぞ俺…！」

「抵抗したらねー、でもお兄ちゃんは好きにしろって叫んだからもう必要ないよ」

そう言うとよこはバットをベッドの下に押し込んだ…お兄ちゃんはあなたの未来が不安でなりません。

その頃、咲月はといづと…

「はあー今日は楽しかったなー」

ベッドの上で仰向けに大の字になつて今日の事を振り返つていた。

「あれが有ちゃんの妹か…全然似てないよねーまあ男と女だから仕方ないんだけどー」

それにもあの子は有ちゃんが好きなのか、じゃああたしは今、こよにちゃんの恋敵つて訳なのかな？

はあー妹ねえ……そいいえばあの子元気でやつているかな？…まあ気にしててもしょうがないよねー

「あつ そうだ」

咲月は思い出したようにケータイを取り出した。

そして誰かへのメールを製作し始めた。

おひじりによいせじぱりへ話した、じよー的今日田の女『咲月』が
気になつてこたようだ。

「じやおやすみ」

「おやすみー、後でそつち行くね

「・・・・・・・・・・・・

宣言したぞ、おー……まあ氣にしてても仕方ない……寝かつ。

数十分後ホントにじよいは来た。

あつたけえーとか言いながら入つてきた。

何故それが分かるか？俺がまだ寝ていなかれ。

さつきは寝たと言つたが実は寝ていない。……寝られるわけねえだろ
！氣になるんだから。

それからじよいはすうすうと音を立てて寝た。
別に何をするわけでもなく寝た。意外だつた。

「何もしてこない……？」

へえー何かしてくると困つたけど別に何か悪さをするわけじゃない
んだなー。

……じやあ別にじよいで寝て……いや、こんな調子だとじよいはこつこ
なつても成長できなこいぞ……だから本当は止めた方が……あーもう一…
うすりやいいんだ……これを許しても良いのか？

これを許したとしてじよいは幸せな道を歩くことができるのか？

いやいや待てよ、おー。そもそもじよいの幸せってなんなんだ？

そんなことを考えてこると睡魔が襲つてきた。俺はしばりへもしな
い内に眠つについた。

9話（後書き）

感想待つてます、お気に入りに入れてやってください
同時進行中の『恋する少年と2人の居候。』もよろしくお願いします。

10話（前書き）

今回、初回に出てきたあの子が登場します。さて誰でしょう?
最初はボクも『誰だつけ?』状態でした。
暇つぶしにでもなれば幸いです。それでは第10話どうぞ

が居る。『ああこんなのがいたねえ』とでも言われてしまふうな女子

ふわあー！生田なんてできない！」

こよいは『大丈夫大丈夫！』って言うたけど本當かなあ？

「それで、これがなぜシミシミケなんですか」と

「ああーもうこんな時間に

そう言うと美咲は布団へと急いだ。そして彼女はものの3分で睡眠に落ちた。

朝が来た。 そうラジオ体操で言う『素晴らしい朝』だ。

ジリジリジリジリジリジリジリッバンッ！バンッ！！

「うるさいーあと五分寝させろー」

いぬれい田覚まし時計に対して美咲はもう一撃制裁を下した。

眞あつて語じて正直に愚惑である

自分は何も悪い事していないのにその身を痛めつけられるのだから。

そこから3分後。

「おい美咲、起きないと遅刻するぜー？」

ウザイお兄ちゃんこと善人のお出ましである。

「あれ?返事が無い...」コレってチャンスなんじや...でも自分の妹に手を出すって」

ベッドから跳ね起き、バネを利用した見事などび蹴りが善人の腹に直撃した。

「み、見事な蹴りだ… あ… やばい… 吐き氣が…」

善人の顔が見る見るうちに青くなつていぐ。

美咲もヤバイと感じたのだろう袋の変わりになるようなものを探し始めた。

そしてそれを手に取つた。

「 ここで吐くなあ ああああ…！」

袋を探すより氣絶させた方が良いとでも思つたのだろうか
すぐ傍にあつた革のカバンを両手に持ち全力でフルスイングした。
ゴンッ！ そんな音が部屋中に響き渡つた… やり過ぎたか？ と思つま
どに…

「ああー川だ…… でも俺泳げ… ない」

そう言いながら善人は文字通り氣絶した。

「ああメンドイなー また運ぶのか」

そう言つと美咲は善人を引きずつて階段を下りていった。

行つて来ます。

それだけを言つと美咲は中学校へ走り出した。

とある角を曲がると「よ」の姿が田に映つた。

「よーーー！ おはよーって無視すんなーーー！」

こよいは氣づかなかつたのかそのまま美咲の田から消えてしまつた。
急いで美咲は「よ」を追つかけ角を曲がりつとする。

『痛つ！』

角を曲がった次の瞬間に一人はぶつかってしまった。

「よいかすかに声が聞こえたな」という事で戻つたところ
そこへ急いで駆けつけてきた美咲とぶつかった。といつ事になる。

「いつたあ～」

「よいは痛む頭を手で押さえ美咲におはよいつと告げる。
美咲もそれを聞いておはようと返した。

「「」めん、こよい痛くなかった？大丈夫？」

美咲はこよいが大丈夫かを確認する。

「え？痛いし大丈夫じゃないけど……？」

「え？！ホント！やばつーじび、じうしょい…」

「よいの「大丈夫じゃない」発言に美咲は慌て始める。

「でも大丈夫、こんなのがれに比べたら全然平気だから」

「ホントに？…ってかれって何？」

「じゃ、行こうか遅れたらマズイし」

「う、うん…ってかれって何なの？」

「……そういえば数学の宿題やつた？」

「よいは話を逸らし始めた。

「あああれね、ちゃんとやつたよ？って話を逸らすな、あれって何
？教えてよ」

「写させてくれる！？」

「じゃあれっていうのを教えてくれるかな？」

「…………」

「よいが少し黙り込んだ…しかししばらくもしない内に

「…-衛くんとは今どんな感じ？」

と美咲に返した。

「うーんそりゃだねー……つてこらへらまた話が脱線しますよ?」「氣のせい氣のせい、つてもう学校着いたよ?」

学校。そこは美咲にとつて『ダルイ』の塊でありそれはあまりよろしくない物だ。

この世には義務教育どころのがあり小学校、中学校と強制的に通わなければならぬ。

しかし彼女にはここに来る目的がある。たがき まもる高垣衛、彼に会つためだ。

美咲はこよに見守られながら恋をしている。

なのでこよいが美咲の恋を応援しているといつことになる。

ちなみに兄、有二から『よーー頼むー俺に恋愛の秘訣とか教えてくれ!』

と言われても彼女は『やだ。』の一言で済ませつと前々から決めていふ。

…まあ有二としてほむつ聞かなくとも良いくことなのだが…

現在、こよいと美咲は歴史の授業を受けていた。

歴史だるー…ま、ノートだけは取るけどセー

「というわけで織田信長は明智光秀に殺られちゃつたんですね」
何だつけ?本能寺に敵あり!だつけ?あれ?敵は本能寺にあり!だつたつけ?あれ?どつち?

「さてここでは皆さんに質問です」

皆が先生に注目した。…ついでにあたしも。

「ジャジャーン…」

そこいらん…！

「明智光秀が信長公を倒す前に言つたあの有名なセリフは何…？」

「あーでた。…どつちなんだろ？」

ビシッ！…皆が一斉に手を上げた。こよいま手を上げていた。

上げていなければ…あたしだけ。

「はー、じゃあこよこちやん~」

「デレんなこの口り教師が…お前のデスクトップす」ことと皆知つて

るんだぜ…？

…まあそんな」とびづでもいいけど

「えつと…『信君は本能寺にあり…』」

「……………」

…違ひんじやないかな?」よ

「…正解！」

『ええええ！…』

一斉に教室がどよめいた。

「はー、一般的に有名なのは『敵は…本能寺にあつ…！…！…！…！…！…』

「…つるせーよ先生…！…！」

皆がそれぞれにそう言つた。

「「ホン。ある一説によると明智をさばく信君」と呼んでいたそつだ

皆が『嘘だ、こいつ嘘ついた』と言わんばかりの視線を先生に向かっていた。

とまあ歴史が終わり、給食アーンド昼休みに突入！

本命は昼休み！衛君に声を掛けるとこりから始まり…最終的に…
き、キキ…ってこんな事あたしに言わせんじゃないわよ！
悟りなさい！…う、悟れば良いじゃない！『言つまでもない』みた
いな？！

美咲が壊れてきたので物語の視点をグッと戻すことにしよう。by
ナレーション

美咲は急いで給食を食べ、すぐに衛のところへ歩み寄った。

「衛君！あのさ…」

しかしそれよりも先に行動する女子がいた。

「衛君、コッち来てー」
「うん、分かつたすぐ行く」
「あれ…？」
その瞬間、美咲の作戦は崩れ去ってしまった。
そして衛はその女子に呼ばれ席を立ち、美咲の横を通り去っていった。

こよには全てを見ていた。

「あつちやー邪魔が入つたかー残念」
そしてこよいは美咲に近寄つた。

「美咲…残念だつたね」

美咲は分かりやすく拗ねていた。

「え？ 残念？ 何が？ 別にあんなのいつでもできるしー」

肩が笑つている美咲、それを見てこよいはまた拗ねてるなーと少し笑つた。

「ちょっと何笑つてんのこよいー？」

「いやあー残念だつたねーって」

美咲はまた頑張ろうと決意した。 そ�だライバルがいたつて構わないさ。

居る人数ほど衛に魅力があるんだ。 そうに違いない。
そう美咲は決意したのだった。 多分…

ちなみにさつき衛を呼んでいた彼女の名前は水橋詩織
みずはし しおり

彼女もまた美咲と同様、恋の真つ最中であつた。

10話（後書き）

感想を・・・…お願いです感想ください！
読者の一言が聞いてみたいです。

1-1話（前書き）

暇つぶしなれば幸いです、ではどうも

「いてえ…頭痛いんですけど」
頭をさすりながらそう言った。

「知らねえよ、そんなこと俺に言うな」
現在、有二は善人と登校している最中だった
「だからさー頭痛いんだけど」

ちなみに何故頭が痛いかというと今朝、善人は妹の美咲により頭を
カバンで殴られたからだ。何故そんなことになつたかは前回を見れば明白である。

ふと善人に目をやると善人はジッと何かを見つめていた。

善人の目にはカツプルでイチャイチャしている奴らが写っていた。
「ああーああーあいつら…人前で堂々とイチャイチャしやがつて…
なあ？有二」

もしかしてうらやましいのか？コイツは…ってイチャイチャかー…
いいなあー…襲われてばかりだもんなー俺

「お前顔がにやけてるぞ気持ち悪い」
「おつお前に言われたくねえよ」

「うるせえ…にしても…俺の春はいつ到来するんだ？」

さあな、そんなこと知らねえよ俺は

「まあ気長に待つてろよ、あははつ」

笑いながらそう言つてやつた

「ふんつだ！少なくともお前より…は」

善人の声がどんどん小さくなつていた。

善人の視線の先、俺の背の方を見てから小さくなつていつたことに

気づいた。

「有りちゃん！！」

「おわづ！」

思いがけぬ襲撃に遭つた。ほら襲われてばかりだろ？

門子並徒共の『トメヒー』朝の御用の河川の筋道!!

という厳しい視線が俺へ向けて放たれているのを察知した。

三 俺は目を閉じた

目は見えなくても耳は機能している、真上から呴かれる嫉妬満載の善人の言葉にはただ笑うしかなかつた。

それからというものの咲月さんの積極的な行動は止まらなかつた。

おし平沢！お前姫川さん何なんた！

こそう聞かれて、送用ちゃんの阿つて

「…彼氏だけど」

スコットランドの政治

男子共ならまだしも女子も騒ぎ始めた。

中
ありえない！そんなのありえないわッ！』

妙川文庫 佐久間行

「おい！有ーー！お前本当の事言つてんのか？！」

「お前！ 答えないってどういうことだよ？ ……まさか…！ いや！ そ

んなはずは... -!」

だから聞こえないって…何言つてんの？

何かを言つた直後その男子生徒は膝から崩れ落ちた。

何言つたかが分からぬし俺にては、何せしてんたこい?』と
しか思えなかつた。

でも何らかのショックを受けたんだと俺は感じた。

「未だ騒がしい教室でふと、とある女子生徒は冷静にこう言った
「ありえないわよ、だつて平沢よ？あいつが姫川さんと付き合える
わけないじゃない」

その瞬間、面白いくらいに教室が静まり返った。

そしてしばらくした後…

「そつか！ 有二一お前面白い冗談言つようになつたのかー！ あははつ！」

膝から崩れたはずの男子生徒が生氣を取り戻し、同時に教室も今まで通りの活氣を取り戻した。

それから付け加えるかのようにある女子生徒は言った。

「それにさあ二人が手を繋いでたのを誰か見たの?それくらいの情報がないと2人が付き合つてるつて決め付けるのには早すぎると思うな、んまあ繋いでるわけないと思うけど」

そう言つた後『だ、だよなー』『やつこいつやつだった、俺、どうかしてたよあはは』

などともう教室の雰囲気はほぼ元通りとなつた。

「Jの騒ぎはこれで終わりではなかつた。

さつきの言葉を聞き、善人は『じゃ…あれってデートだつたんだ…』と呟いた。

ちなみに善人はこの間買い物に行つたときの事を思い出していた。

「おい…今お前…ナンティッタ？」

そんなことあるはずない、そう願う生徒が善人に問い合わせた。

善人は答えた

「ああ…この間俺が買い物に行つた時見ちまつたんだよ」

「何を…？」

皆が声を揃えてそう言つた…こいつら面白すぎるわ

俺はただ善人が言う言葉に耳を傾けていた…大丈夫、今度こそ聞き取れるはずだ。

善人は続けた。

「俺は買い物袋を両手に持つた有二を見つけたんだ、そんで有二がベンチに腰掛けるだろうと思つてあえて邪魔しに行つたんだ、まあただの悪戯だが」

「それで…？！」

「そしたら有二は『べつべつに座りたいわけじゃないんだからねつ！』と言つたんだ

「…言つてねえよ…」

「なー有二はいつからシンデレラ…いやそんなことはどうでもいい…続きを…！」

「そのあと…來たんだ、あの人…、そしてその人は有二と手をつなぎソフトクリーム片手に帰つていつたんだ」

「あの人って！？一体誰なんだ？！」

そう生徒が質問したところ書人は指を指した。

その指の先に居た人は

咲月さんだった。

咲月さんはあたし？と自分に指差し『一体何のことだろ？』と呟いた。

「…………」

少しの間沈黙が走った。

「姫川さんだッ！！！」

誰かがそう叫んだ、そして咲月さんの元に駆け寄り『有一とはどん
な関係なんですか？！』

と、ニュースの取材陣並みの質問を繰り出した。

「あの…えつと…え？？」

咲月さんはいきなりの展開に戸惑つてた。

何も答えられない咲月さんに次の質問が襲い掛かった。

『平沢有一は姫川さんの彼氏なんですか！？』

その質問への咲月さんの回答は意外なものだった。

「え？違つよ？」

「あれ？」

：今度は俺が戸惑つた。

「有ちゃんはあたしの彼氏なんかじゃありません

咲月さんの答えを聞いた皆は『良かつたー』『びっくりしたねー』
等と、中には拍手までする奴もいた。

「え？ ホント何ですか！？ 平沢有一は姫川さんの彼氏じゃないですか！？」

その生徒はもう一度確認を取った…

咲月さんはもう一度答えた

「……………だってあたしは有ちゃんのお嫁さん、だから有ちゃんは彼氏じゃなくて旦那さんだよ？」

1-1話（後書き）

感想待つてます！一言でも充分です！
感想もらえると元気が出ます。

1-2話（前書き）

皆さんの感想が聞きたいです

だってあたしは有ちゃんのお嫁さん、だから有ちゃんは彼氏
じゃなくて咲月さんだよ？

あの咲月さんの爆弾発言は彼らの頭の中で勝手に削除された。

「咲月さん？」
「なに有ちゃん」

そういう訳で俺は咲月さんに聞いておかないといけないことができ
た。

「……なんで俺咲月さんの旦那さん？」

俺は覚えがない……いつそんな関係に？わかるやつがいたら教えてくれ

「有ちゃんシリアルだねー」

咲月さんはいつも通りに答えた。

「……いいから、あれは冗談なの？それとも本気？」

俺は真剣に問い合わせた。

すると咲月さんは顔色一 つも変えず、ひつひつと笑った。

「本気だよ」

所変わつてこゝはこゝの通う中学校

彼女たちは今昼休みでフイーバーしている最中だつた

「おい！外野にバス回せ！逃げ遅れたやつにボールをぶつけろ！」

こよいと美咲はドッジボールに参加していた。
ちなみに今2人は必死にボールから逃げている。

「こよいつ！後ろ！」

そう美咲が叫んだ

「え？……あ、当たつちゃつた……」

「…………」

こよいがやられた、でもボールはこつちのものになつた、これはチ
ヤンスでもありピンチに
近づいた事になる。

「こよいのかたきいいいい！……」

と言いつつ美咲の放つたボールはこよいを当てた生徒ではなく思い
つきり

水橋詩織、彼女に向けて放られていた。

「あぶな…！」

彼女はしゃがんでそれを回避した。

「ちつ…」

「ちょ、美咲！今舌打ちしたでしょ？…」

「別に…それよりほら後ろー」

その時詩織に向けてボールが飛んできた
でもそれは詩織には当たらなかつた

「大丈夫？詩織ちゃん」

「衛君…」

「な！？なにいいーーーーー！」

衛はそのボールをキャッチして詩織を守つた、衛はそのボールを素
早く外野に回した。

「ありがと衛君」

「つづん、気にしないで」

「…なんじや、あのピンク色の空間…！」

「美咲ーボール來てる來てるー！」

え？…そう思つたときにはもう遅かつた

「…結局今日は話しさえかけられなかつた」

「まあまあ明日があるじゃないか少年」

「あたしは女よー」

本日の恋の進展はなかつたようだ

2人はいつもの帰り道を歩いて帰つていた

『わんわん！』『カーカー』『バサバサバサ』
いつもと変わらない音が聞こえてくる

「わんわん！」

「ねえこよー？」

「わん？」

「衛君つてさ……ほらその……詩織のことが……好きなのかな？」
美咲はそれを今日ずっと疑問に思つていた。

「うーん、」よいの勘では多分愛しているといつ所まで行つてない
と思つ

「そう？」

「だつて好きだつたらその人を直視できないはず」

「ああ……照れ臭くて？」

「……」めん、慣れちゃえば関係ないね

「いや、謝ることないよ」

2人は同時にあーとため息をついた

美咲は衛を想い、」よいは有二を想つた。

「叶うパーセント低いなー」

「…………」

「だつて全然「じつ」を見てくれてないんだもん」

「…………」

「「じ」となんじやあたしこは彼氏できなこやあはなつ」

「…………」

美咲は気づいた。

「あつ……あの……えと、「じつ」「めで」「よこ」

「……いや、気にしなくてもいいんだよ、ずっと前から分かつてたし」

「こやーでもさ、ほりー」

「だからこことんだつてばー…………」

そのときの「じよこ」の頭の中では現実を知ったときの記憶が映つっていた。

感想ください〜〜
応援メッセージ待っています（わくわく）
お気に入りに入れてくれたらうれしいです
ではでは、この辺で

1-3話（前書き）

どなたでも感想書けるようになります。では暇つぶしへもなれば幸いです。どうぞ。

「ああ～あ暇だ…暇でしょうがねえ」
何をするわけでもなく善人は町をぶらぶらと歩いていた。

「今日は何かいいことねえかな～」
ぶらぶらとゆつくりゆつくり歩く彼は期待などしていない。しかし
どこか期待に胸を膨らませている。
だからこそ女の子のそばに来たときゆつくりと自身の存在をアピー
ルしているのだ。

「どこかに俺をナンパするような人はいないかねえ」
また俺うわごと咳いてるわ……そう思っていた時だった……。

「…………痛！あっ、ごめんなさい！…」

背中に何かがぶつかったような衝撃が来た。声がするといふことは
人なんだろうか、そしてこのかわいらしい声はやっぱり女性なんだ
ろうか。

そして彼は直感した

【なんかキターー！】

「せつときは「めんなさい」です
「ん？ 気にしなくていいんだぜ～？」

お詫びにおじらせくださいという事で2人は近くの喫茶店へ入つ
た。

心配性なのが、善人はそう思った。

「それにしても『めんなさい』で済ませても良かつたのに」
女の子から声を掛けられることだけでも嬉しいこの男。
彼はさつきのことを振り返るかのようにそう彼女に告げた。

「いえ、それでは私の気が済まないのですよ
『ふうん真面目な子だねえ』」

多分中学生くらいの子だろうか、じーっと見つめている善人はそう
思つた。

「あの、こんな事言つのもなんですけどメールアドレス交換しませんか?」
急に彼女はメアドを交換しようと言つた。……どこか彼女は恥ずか
しそうだった。

その言葉にものすごい違和感を覚える善人、しかしメアド交換しよ
うと言われこの際どうでもいいやとも思った彼なのだつた。

「…え? あ…メアド、はいはい、いいですよーバッチコーケ
もしかしたら俺彼女できるんじゃね? 彼はそうとも思った。

そして二人はお互いのメールアドレスを交換した。

「ほお白川綾乃ちゃんねー」

「そうなのです私は綾乃って言います

「ねえねえ綾乃ちゃん。本当はわざとぶつかったんじゃないの?」
話がうますぎる。何か裏があつたりして…さつきからそう思い始め
ていた善人はそう尋ねる。

「ただ単におこるだけなら自己紹介なんてしなくてもいいはずだよね……そこからメアド交換つて……」

それは綾乃にとって凶星だった。そして綾乃は本当のことと言った。それはつまり善人が思っている通りのことだった。

「あはは～実は……わざとぶつかったのです」

そう、善人の考えは当たっていた。すると同時にうれしさが込み上げて来た。

「うーん……それってまさか～」

嬉しさで思わずほんの少しほほが緩む。

「そのままかなのです～」

善人はどうやらナンパされたようだった。

「そつかーナンパかーでもさあ、やる人を間違つてねえか～？」

彼女を笑わせようと冗談交じりに何故俺をナンパしたのかを聞き出そうと彼は思つていた。

すると綾乃是善人の顔をじいっと見つめた。その見つめる視線に恥ずかしくなり善人はもう飲み干してしまったジュースをすすつた。

「間違えたかもです」

真顔で綾乃是そう答えた、彼女の目は真剣そのものだった。

「え、マジ？」

「うそなのです」

その言葉も真剣なものだった。

「あははっ『面白いな綾乃ちゃん』

冷や汗がどつと出てきたのを肌で感じる、彼女ある意味面白い人かもしぬれない、善人はそう感じた。

「あ、私のことはどうぞ『綾』って呼んでくださいなのです」

しばらく2人はお互いに改めて自己紹介をした。

「へ、へえー高校3年生だつたんですね……」

「敬語にしないでくださいなのです」

ムスッとしてストローを咥える綾乃、敬語は使わないでほしいと言うのに彼が遠慮がちなことに少し意地になつて説得をしようと試みる。

「でも俺2歳年下ですよ」

「同じ高校ではないから先輩後輩ではないのです。だから敬語は使わないで欲しいな」

綾乃は同じ高校の生徒ではない。しかし彼女は同じ高校にいたとしても敬語を使わないでと言つていたであろう。敬語は人と人の間に壁を作る言葉であり、それを彼女は嫌つてゐるのだった。

「でも年下だし……敬語使つたほうが」

「今度敬語使つたら殺しちゃうかもですよ？」

綾乃は両手を組み肘をテーブルについて組んだ手に鼻先を当て小首

を傾げるその状態で、更に笑顔でそう言つた。そのセリフは爽快感さえ感じられた、何故殺すと言つ言葉が使われているのに関わらず爽やかなんだろうか……。

「え？……おつけー分かつた……」

笑顔の裏の恐怖という物に顔が思わず引きつる。

とりあえず善人に對して敬語を禁止したところで……会話が途切れた。

しばらく何を話していいか分からなくなり時間が過ぎていった。要するにネタ切れだつた。

このままだとまずいと思った善人が話を切り出した。

「……じ、じゃあ場所移動しない？」

それを聞いた綾乃是良し良しと言わんばかりににこつと微笑んだ。善人がタメ口でそう言つてくれたのだから。

「おつけーなのですよ~」

とりあえず外へ出て行つた即席カッフルの2人。
これから2人はどこへ行くのやら。

「こよいー少し離れてくれ」

今日はこよいとお買い物。近所のいつもお世話になつてゐるスーパー

ーの食品売り場に連れて来させられたのだった。

「なんで?」

「……歩き回るんだよ、ちょっとだけ離れてよ

「こよい、離れたくないよ……」

お前の頭で展開するその恋愛ドラマは恐じらいの間見ていたもつだ
るが、俺も傍で見ていたからな、覚えてるわ……。

ちなみに俺はカートを押す役。そしてそんな俺にこよーいが密着して
く。歩き回る。とても歩き回る……。

「あはは～、『メンねお兄ちやん

「……でも離れるつもつは無いんだよな?」

「もうりん〜!」

笑顔で返された。それも即答だ、その返事を聞き俺は一つため息を
吐いた……。

「で? そろそろタイムセールの時間だと

タイムセールだけあって続々と集まる中年のおばちゃんたち、さつ
氣なく入り口を連れとふざべその技(?)で苦笑いをする。

「せうなんですかよお兄様～これに勝てば家計がグッと楽になるんで
すよ

「そうなんですかー」

俺は棒読みで返事をした、生きていく為だ、おばさんと囲まれるく

らこなれこことなー、そんなことを考えていた。

でもさあーなんか悲しいんだけどーーー咲月さんの後に見るおばさん
は何かつらー！

スタイルの良い咲月さんのボンキュッポンとは違い、脂肪とベルト
でボンキュッポンなおばあまたち。

あの中に入り込んでこくんだと思つと思わず、うひ……と手で口
を押さえてしまう。

吐き気を抑える俺、ほほ放心状態にありますゆえ、妹様よどうかち
よっかいを出れないでくれ……。

その後もぞりぞりと集まるおばあま達。

俺の視界が中年おばあさんで満たされやうになつた時、俺はこよこで
それを中和した。

「こよこ、悪いけど俺だけを見つめてこてくれ
「え？」

この状況下でこよこはせめてもの救いだ。おばあさんで染まつてたま
るか……！

と思いつつ妹で中和し始めるシステムと噂された始めた俺。

「な……何？お兄ちゃん……なんか……恥ずかしいよ……」

うわあ……その上田遣い……すいぐ良こ……つておいおい何考えてるんだ
俺。

でも中和効果は抜群だ、俺の顔に生気が戻つてこくのが自分でも分
かる。

「頼むから、こつものこよこに戻つてくれここに来てまで俺をから

かうのか」

「リアクション低い～こよいはボケても楽しくない～」
「こよいが少し拗ねた。」

「俺はボケられても笑えない」

俺も拗ねた。

そういううちに時間が迫ってきた。

ちなみに俺達が狙うのは牛肉

俺は出せもー

しかし、魔境込まること出来ぬひで出来ぬひで……。

しばらくもしないうちに周りがざわざわし始めた。そして一度入つてみたい関係者以外立ち入り禁止の扉から男の店員さんが一つの力ートを押して出てきた。

その店員さんはおばさんパワーにより暴行を受け床に転がった。どこのアクションアニメだよー！俺は思わずそうツッコミを入れた。

そして彼はほかの店員さんによつて救助された。

ちなみにカートの中の俺たちが狙う商品は勢い良く何故か広範囲にぶちまけられた。おかげでこの戦争の最前線に立たなくて済みそうだ。

それにして…『愁傷様でした。

「…よい…」

「分かつて…」

俺たちはすぐさまにその何故か広範囲にぶちまけられたお買い得商品をゲットしようと

おばさんの中へと突っ込んで行った。

「今夜はこのよいのハンバーグじゃおらああああああああああ…！」

「よいしゃー獲つ クソツー放せよー！」

ようやくパックが獲れたと思つたら一人のおばさんと取り合いになつた。

ちなみにあひらひらでも商品の取り合いになつてゐる。それゆえこの騒ぎがなかなか収まらない。

本氣で奪い返そつと思つてゐたとき。悲劇と言わんばかりの出来事が俺を襲つた……。

「これは俺が最初に獲つたんだよ…！…！」

「奪えばそんなの関係ないわよ…！」

そこから綱引きの「」とく引っ張られ引っ張つてと長期戦に持ち込まれた。

「放してくださいよー！」

「一歩先! 私」は家庭があるのか!?

「それは一いつちも同じーー！」

しばらく引っ張つては引っ張られという状態が続き、次に俺が引っ張つこうとした次の瞬間…俺の手が悲鳴を上げた。

「 もうおまえの仕事は終ったみたいだね。」

俺は痛みのあまり大声で叫んだ。

1-3話（後書き）

ちょっとといいでですか？…一話一話が長くてだるくなりませんか？
だるく感じられる方がいらしたらそう言つて下さいお願ひします。
別に大丈夫だよ～と言う方も大丈夫ですよと教えてください。お願
いします

面白かったでしょうか？評価などをつけてくださいとうれしいです。
感想お待ちしております。ではこの辺で…

PS・10/23日以前より大分文字数が増えました。（修正によ
り）

1-4話（前編）

感想ください。おねがいします。

「いってよーいってよー……いってよー……痛いって言つてんだよこの野郎ツツ……！」

俺は1人のおばさんと商品の取り合いになつた。

引っ張つては引っ張られ、引っ張つては引っ張られを繰り返していた。

事件は俺が引っ張りうとした時に起きた。

俺が引っ張る瞬間、おばさんはそれを引っ張り返さずに逆に押した。もちろん極端にバランスが崩れ商品から手が離れ俺は床に尻餅をついた。

それだけなら良かつた。

すぐに立ち上がりうとし俺は床に手をつき立ち上がりうとした。

次の瞬間、俺たちが求めている商品で争つていた他のおばさんが俺の手を靴で踏んだ。

踏ん張るがゆえに力が入つていたそして……よりにもよつてその靴はヒールだつた。

まず最初にその手を退かそうと思った。凄く痛い

しかしながら抜けない…動かそうとすると激痛も走り一気に顔が青ざめていった。

そこへ追い討ちを掛けるが、とくヒールのかかと部分が更に患部へ食い込んで来る。恐らく踏ん張つたのだ。

そして俺はその痛みのあまり叫んだ……。この際声が枯れたつて良い、だから誰か気づいてくれ頼むから助けてくれ……。

この大騒ぎの中あいつはこの異変に誰よりも先に気づいていた。

「お兄ちゃんから離れて…………」

あいつの必死に叫ぶ声はここには届かなかつた。

「ああああああああああ…………」

力を振り絞り俺はもう一度叫んだ。気付いてくれ…………クソッ…………

!!

『そこのあんた！足！足！！！早くお退き！』

ようやく気づいてくれた人が居た……。責めたままだつたが少しだけ生気が戻ったような気がする。

「え？何だつて？」

俺の手を踏むこのおばさんはまだ気付いていなかつた。

「お兄ちゃんから離れろッッ…………」

「いよい…………？」

こよこの声がした。それはとても殺氣立つており、いつもより声のトーンが低い、周りに居たおばさんは思わず腰が砕けてしまつていだ。言ひなれば殺戮状態、その普段のとは似ても似つかない殺氣立つたその瞳、いや、眼球は俺の手を踏むおばさんを捉えており、こちらから見ても『殺ス…………』という感情が痛いほど伝わつてくる、正直自分のことよこのおばさんの心配をした程だ。

それからこよには俺の周りを囲む人を搔き分け俺の手を踏んでいた

おばさんを思いつきり力いっぱい蹴った。パンツッ！と肉が叩きつけられる音がする、こよいがなりふり構わずそれこそなぎ払うかのように回し蹴りをしたのだった。見事にヒットしたその蹴りを放つや更に追い討ちを掛けようと右腕を斜め後ろへ引き始める、その表情から見て殺そうとしていることが分かる、どうみたって『お手をどうぞおばさま』なんて顔をしていない、止めないとマズイことになる。それを目撃したみんながそう思つていただろう、でもあれに巻き込まれたくないんだろう、止めに入るものは誰一人としていなかつた。

「痛！ちょっとアンタ何して」

2メートルか3メートル程だが確かに蹴つ飛ばされたおばさんが後ろを振り向きそう言い放つた。

そのおばさんが全てを言つ前に怒りでそのセリフを遮断するかのようになづぶ。

「……いつのセリフだおらあ……よくもお兄ちゃんを……！」
！あんた……いつ死ぬ？」

その言葉にはもはや殺氣以外の何物でもなかつた、鋭利的なそのセリフはまさにナイフのようだつた。

「こよー！待てってこよー！ 痛ッ！」

立ち上がりうとすると案の定手に痛みが走る。

「……ツ 大丈夫！？」

俺に悲鳴を聞いたこよいは我に返つたかのよつに俺の方へ振り向き顔を覗き込む、さつきまでの表情とはまったく違つてもう今にも泣きそうなくらいの表情をしていた。

「頼むから警察沙汰になるようなことはしないでくれ……頼むから

俺がそつぱつといふことを、「めぐ」とだけ言つた。

その頃、この事件を奥ぎつけたお姉がざわざわし始めていた。

「あれ？なんか騒がしい…ハツ！…しまつた～今日はタイムセールの日だつた～」

頭を抱えて悔しがりながら彼女は騒がしい方へと近寄つてみた。

「一体どうしたのかな～？何があつたのかな…？ただ事じやなさそ

う

みんなの様子がおかしいことに気付いた彼女はただの興味でその事件があつたと思われる場所を覗き込んでみた。そして彼女は驚愕した……！座り込み、少女を睨み付けるおばさんとそのおばさんを殴りかかるとしている少女、そしてその少女の足元には見知った顔が。

「 有ちゃん…！？」

彼女はすぐさま買い物袋を床に置き怪我をしたと見られる手をもう片方の手で覆つて痛みをこらえる彼の下へ駆け寄つた……。

ところでの2人、いつたいどこへ行くのだろうか。

行くあてなどあるのか？」これではただの散歩である。

「はあ～やつぱりぶらぶらしてるのは暇ですね～」
ふいに綾乃はあはは～と苦笑しながらそう善人に言つた。

「そう…だね」

…まだ善人はタメ口を使う事に気が引けているようだ。

「そういうえば善人はどの辺に住んでるのですか？」
思い出したかのように綾乃は質問をした。

「ここの先真っ直ぐのところ…」

多少緊張しながらそう善人はそう答えた。…いい加減タメ口に慣れ
ないのだろうか？

「私の家ここいら辺ですよ～…お家どこですか？」

「あはは～もう通り過ぎたぜー」

「え！？どこどこ～～～～～ですかー！」

「教えてませーん」

「教えてくださいなのです～！」

「やーだ」

どうやら善人のいたずらスイッチがONになつたようだ。

「ああ～教えてくださいーもしかしてあれですか？」

「不正解。残念」

「じゃあ…あれ！」

「おおー…すげえ！」

「じゃああれが

「不正解です！」

「ガクッ…年上相手に結構やりますね…」

善人はいじめるときは自分が満足するまでいじめる習性があつたりなかつたりする。

「あはは～絶対教えなーい」

「…善人のいじわる…私をいじめないで欲しいのですよ…？」

「その上目遣い…かわいいです」

「わわつ！？かつからかうのは良くないのですよ？！」

「からかってなんかないよ？」

「善人のいじわる」

これが善人の初恋の始まりだった。

14話（後書き）

応援よろしくお願ひします！
感想はどんどん送っちゃってください。
ではこの辺で

とある事件のおかげで俺の手は骨折した。字は書けないし箸も使えない。俺はものすごく困っている。

「有ちゃんはいこれノート」

咲月さんが俺にノートを差し出す。

「あ～ありがとーいつもごめん」

感謝を述べつつそれを受け取った。

「全く～良いんだよこれくらい」

俺は怪我をしてから咲月さんに代わりのノートを取つて貰つていて。字が満足に書けない俺にとつてはとてもありがたいことだった。

唯一困つているのがこの状況を楽しむ人がいるということだ。
「有ちゃん一緒に食べよー」

「うん、いいよー」

今日もあれが始まるんだろうなーと思いつつカバンからこよいお手製のお弁当を取り出した。

「おーこよこちゃん今口もがんばってるねー」

「そうだね、じゃ早速 てあれ！？スプーンがない！？」

あるはずのものが無い…こよいが入れ忘れるはずも無く、俺はすぐ驚いた。

「ふつ ふつ ふ」

咲月さんがなにやらわざとらしく笑つた。

「まさか…咲月さん…！？」

半信半疑どころではない。完全に咲月さんが犯人だ。……と思つ。

うん。多分。

「ピンポーン！正解したのではーあーん 」

そういうながら咲月さんは一口サイズのハンバーグを乗せたスプーンを差し出してきた。

「…………、まつ、ほら周り見て咲月さ 」

「くくくー周りなんて気にしなくていいんだぜー旦那さん」
ほら、この状況を楽しんでる。咲月さんはこの状況を楽しんでる…
ん？【お前も楽しんでるだろ】だつて？…う、うるせえ。

「はーあーん」

「…………」

“う”しても周りが気になる。

「はい次ー」

でも咲月さんはお構いなし。

「…………」

言つまでも無くクラスの男性陣の視線を痛いほど感じながら昼食を終えた。

「なあ有ー」

善人が声を掛けてきた。

「なんだ？」

「殺していい？」

「やめとけ」

「…………」

ううでもいことだった。

放課後となり下駄箱へ行き咲円をさし靴を取り出してくれた。

「ありがと」

そう言って靴に足を入れた。

「どういたしまして～お礼に頭をなでてくださいな

「はいはい」

咲円さんの頭をなでるとえへへーと照れたような声が出てきた。
それから手を離すと俺の手からシャンプーのこい番りがうつりと
漂ってきた。

「じゃ、帰るうか

「そうだね」

家に帰ると今度はあいつがいる。テープでグルグルな手を見てひとつため息をついた…

1-5話（後書き）

明日も投稿するんで短いとか言わないでください。感想どんどん送ってくださいこの作品に対する評価もお待ちしております。

そして応援よろしくお願いしますとこいとこいの呂で。

家に帰るとあいつがいる。もううんこの状況を楽しむ一人だ。

「ただいまー」

俺は玄関のドアを開けた。一瞬飛び掛ってきたらどうしようかと思つたけどそんなことは無かつた。

「お兄ちゃんお帰りー 今日はシチューだよー うれしいことに自重してくれたらしい。

「今日もシチューか」

的確に突っ込みを入れカバンをソファーに置いた。

「ギクッ…ふ、一日田はおいしいっていうじゃん?」

「それはカレー」

続けざまにくるボケもちゃんと突っ込んだ。

こーじ最近、こよーいは箸を使わせようとしてない。

弁当もハンバーグやから揚げ。野菜でいうと「ロッテ」とかスープーントフオーラーで何とかなるものしか入つてない。とても気が利く妹だとつぶづぶ思つたりする。

「今日ねー 美咲ちゃんがねー」

こよーいが世間話を持ち込んできた。

「美咲ちゃんつて確かに善人の妹ちゃんだつたっけ?
確かそのはずだよな。

「うん、でねその美咲がね今日ね『お兄ちゃんに彼女ができたみたい』つて言つてた

え? :

「は? ! あいつが! ?」

「うん、なんかそう言つてたよ~」

そつかーとつとつあにつとも春が来たんだなーもうこいつのじと
がら年中冬眠しとけばいいの。たのいばい。

俺がその話につけて色々口々に思つてこる」とを口に出せば頭の中、脳内で並べていつてこる、よこしゅと、よここが器にシチューを入れてやつてきた。

「あれ? こむー… 器がそちうに一つあるのはなぜ?」

質問してこるが俺はこよこがやわらかとしている事が薄々分かっている。自分これはあーんつて来る。

「もーわかつてるくせこい」の「ー」

片手に器を持ちもつ片手でスプーンを持ち、つてほらあー両たつてるじやん…

「シチューへりご自分で食べられるひが」

差し出されたスプーンを見て後ずさる。

「やう? ジヤあはいあーん

俺の隣に移動してもう一度あーんとスプーンを差し出す。首を引っ込む。そこにこよこが迫る。まるで俺がシチュー片手の女子に押し倒されたみたいになつてこる。

「はー口空けてー空けらーんちくしょー
うー。とこよいがほっぺを膨らまし迫つてぐる。くねーじひつ顔
かわいいんだよな
反則だその顔。

「あ・け・でー」

まだやるつむりかこよー… あーやめらーそんな田で見つめぬんじ

やねえ

お前はいいかもしないが俺が恥ずかしいんだ。頼むから分かつてくれよ…

「なあ～お願いだから俺の言つことをきいてくれないか?」

「却下」

即答かよ。しかも笑顔で言つた笑顔で。

「ほらあーん」

もうダメ…くそー…いつかわいいな~妹離れできねえかも…

「……ん」

結局シチューは有一が美味しく食べましたと。やがてひかりよこのあーん…

16話（後書き）

今後どうなるんだろ…」の作品。

感想や評価待つてます。感想や評価待つてます。大事なことなので2回言いました

お気に入りに入れていただければうれしいです。

ではこの辺で

「早く治らないかなあ？ホントに」

俺の手が傷を負っている事はもう分かっていると思つ。だから俺は「よい」と咲月さんに好き放題やられています。

抵抗しうつとするといつも手が出る。そしてその度に痛みが走つて…

いつも通りの登校。俺は咲月さんと必ずと誓つていにまび一緒に登校をするようになった。

ほり今日もあそここの角から…

「有ぢやーん…つひいつけねーこんなことしたらケガに響くよね」
ほら来た。しかも有ぢやーんつて言いながら両手を広げていたとなると恐るべく座我さえしていなければ抱きしめられただろう、少し状況分析をしてみればこの手の傷についてのイライラが増してきたような気がする。それから俺は少し嫌味っぽく、

「あははーまだ治らないんだよねーこれ

と、開いて閉じる行為もままならない手を見ながらソラついた。

「早く治ればここにねー」

全くですよ。「よこといにあなたといい、俺は好き放題されてます

からねー

「やうだねー全く

とつあえず今日は何も起きませんよつ…

咲円は今日もあーんしてやわらかと思いながら有りに声を掛けていた。

ふつふつふ、有ちゃんが恥ずかしいことは分かってるんだよー。
でもわーあたしだってあーんつてしたいんだよねーそしてされたい
んだよねーでも「あーんつてして」なんて言えないよねえ……でも
まあ今は怪我しているから仕方ないとして、でもそれが治つたら頑
張つて……へへ、照れちゃうかも、ってか言えるわけないよー。

頭の中で楽しいことを考えていると、そのムードを壊すかのような
何かがいるかもしないとこ「う」とにあたしは、

「ちよつと待つて」

「ん? 何?」

と、有ちゃんを呼びとめた。あたしはどうも誰かに見られているよ
うな気がした。この感覚は嫌でも忘れない、誰かにジッと見られて
いる感覚、多分後ろの方から見てる。

そうなると当然の「」とく後ろが気になつて後ろを振り向いてみた、
けれども結局何もそれらしきものは見えなかつた。

そうなつてくるとこの不思議な行動をなんでもないと思わせないと
かえつて有ちゃんに心配を掛けるかもしれない、そう思つたあたし
は靴を履きなおすかのようにコンコンと鳴らして前を向いた。

「おっケーいやいや今ねー靴に足がちゃんと入つてなかつたから直
したんだー。じゃいー」

「ふーん。ちゃんと履いて来ればいいのに」

良かつた有ちゃん氣づいてないみたいだね。それにしても…何だつ
たんだる。勘違いならそれが良いんだけど。

「つー、今あたしのこと軽くバカにしただろ～？」の「うるさい」
「やつやめろ頭を撫でるな撫でるなつて」

でも、絶対誰かがいたって……絶対。

弁当弁当ー今田も有ちゃんにあーんつしてやるんやー

といつわけであたしは有ちゃんが教室にいない間に有ちゃんの弁当からあらかじめスプーンを取つておきましたー。
あれさえなければあーんしかなくなるでしょ？食べる方法。ふふ、あたしついていたずらっ子だね。

有ちゃんがイスに座つて弁当の中身はなんだうな、と言わんばかりの表情を浮かべながらその弁当箱を開けた。

「弁当オーブン！ついとも通りスプーンが無い！？」
有ちゃんはすぐあたしを見た。まさか……犯人は咲月さん…？って感じ。
この反応がかわいいんだよな～早くあたしだけのものになればいいのにー。

あたしの仕業だと気づいてそなだからこには少し意地悪そうに、「あつはつはー見たまえ田那さん、スプーンはここだよー」と、わざと弁当箱を渡してもらおうかー。そんな感じにあたしは頂戴の手を差し伸べた。

すると有ちゃんはポツリと、

「もうスプーンは懐に持つておこなかな…？」

なんてことを言つたもんだからあたしは少しムキになつて、

「えー！ そんなことしたらダメだよー！」

と、説教してやつた、全く有ちゃんつて子せ……まあそんなことしてもあたしがスプーンを持つてきて有ちゃんのスプーンを奪えぱいいだけの話なんだけどねー。

「ほり最後だよーあーん」

最後の一口も終わった。

「……ん」

どうやらまだ恥ずかしい様子です。かわいいなー有ちゃん。

「はい昼食終わりー」

「つたぐ。恥ずかしい事この上ねえよ」

「またまたーそんな事言つてーうれしいんじやないのー？」

「別に……うれしくなんか

うわーやっぱこの子独り占めしたい、有りやん最高ー！

17話（後書き）

感想お待ちしております。この作品に対する評価もお待ちしております。

応援のコメントがほしいです（おねだりおねだり）

お気に入りに入れてくれると嬉しいです

1-8話（前書き）

評価、感想お待ちしております。皆様の一言が励みになることをお忘れなく。

お互いのメアドを交換し、タメ口を使わないようにお喋りを続け、それから善人がようやくタメ口になつてきました。ふいに、突然綾乃がこんなことを言つた。

「善人ー付き合つてくれないですか？」

つまり、善人は告白をされた。

「うん？ ああいいぜー」

この展開が予想できた善人は驚くことなく返事を返した。もしかしたら……とか思つていたが、まさかその勘が当たつたとはな。

「おお意外と即決なのですね」

綾乃は返事を聞き、ニコッと微笑みながらそう言つた。

「だつて綾ちゃんかわいいし。逃したらなんかもつたひない気がするしね」

今度は善人が微笑みながらそう言つた。

「おおー嬉しいです。そんなこと言つてくれるなんて」

そう言いながら綾乃は善人の腕に抱きついてみた。

白川綾乃。彼女には親2人に姉が1人と弟が1人。

そしてここからじや数少ない女子高校に通つてゐる3年生。

男子禁制の女子校だから出会いが無い。なのでよく彼女は町へと出かける。

男性との交際は善人が始めて。勇気出して声を掛けたかいがあつたみたいだ。

「そういやさー綾ちゃんの『～』ですよ』とか『～です』って口癖? 行宛も無く歩き続けてみてないと、義人はそれが気になつたので口癖について質問した。

「ああー、これは意識して使つているのですよ?だから口癖ではないのです」

「どうやら口癖ではなかつたようだ。」

「へえーそうなんだ」

「そうなのです。結構昔から使つてるんですよ?」

「ちなみに善人でその質問をした人数は確か…13人目だね」

「13人か、ちなみにそれが素の綾ちゃん?」

と質問してみた。

「うん。これがわたしの素だね。つてもうこんな時間。今日はここでおさらばです」

時間を見てみると午後6時半だった。

「ああうん。分かった。じゃあまたいつか」

名残惜しさを感じながら善人はそう言った。

「うん。じゃあまたいつかね今日はありがとね善人」

バイバイと綾乃是手を振る。善人もじゃあなど手を振つた。

そして綾乃是帰宅した。

「ただいま」

玄関のドアを開けると弟が見えた。弟こと巧は

「綾姉お帰り…どうした?なんかいいことあつた?」

と聞いてみた。

「なんでもないよ~?」

そう答えたが本当はなんでもあつたりする。

「あり？綾乃帰つてたんだ。どうよ？彼氏は見つかつたかい？」
綾乃の姉こと紗希が声を聞き綾乃に今日の成果を聞いてきた。

「なんと。がんばってゲットしたよ」

「え？！姉ちゃんに彼氏…？…何の間違いだこれは」

とビックリしていた。

「こら、巧。お姉ちゃんにだつて彼氏はできるんですよー」
そう言いながら綾乃は弟の頭にチヨップをお見舞いした。

「綾乃やるじやんー」

自分の事のように喜び始める紗希。

「結構よさそうな人だつたよ」

善人のことを思い出しながらそう付け加える。

「はあ…やっぱ彼氏で来ちゃつたんだね綾姉…失望したよ」
そう言いながら巧は肩を落とした。

「そつかあじやああたしも頑張らないといけないねえ？」
その言葉を聞き綾乃はえー？と一言。

「そういうえば大学に良い人はいないの？狙つてる人とか」

「あれ？俺のことは無視？…まあいいや、風呂入つてこよつひとつ」
巧は相手にされないと感じて風呂場へ行つた。

「ええ？ダメダメみんな誰かと付き合つてたりするんだもん」

「でもお姉ちゃんスタイル良いんだからすぐ彼氏は見つかるつて
綾乃から見て紗希は完璧だと思っている。

「そうかなー？」

そういうといやみのように綾乃が

「胸は大きいしウエストは細いし料理はできるし。あと胸大きいし
さ完璧じやん」

と言つた。すると姉はわざとらしく両腕で胸を寄せあげた。

綾乃の言つ通り、紗希の胸は大きく、それは綾乃の目標だつたりする。

「ん~？胸が大きいのがうりやましいのか？2回言つたよ2回
ほれほれ」とそれを見せ付ける紗希、そして気にしている事がばれ
たくない綾乃は

「え？…あいやいやあのつあれだよ【大事な事なので】つてやつ
だよ」

と誤魔化した。…誤魔化せてないのは置いとして。

「ふーん、まあ別にいいんだけどねー…そつか綾乃は胸にコンプレ
ックスを…」

紗希は自分の胸を見てみる。確かに大きいけど…そんなにうりやま
しいのかな？と思つた。

そんな時、なにやら巧が着替え忘れたーと戻つてきた。

「ねえ巧、どうよ？」

両腕で胸を寄せ上げ弟に見せ付ける姉。

「お願いだからやめてくれー！」

目と鼻を押さえる弟。それ見て姉はさらにからかつてみる。

「とかいいつつ？見たりするんだよね巧ー」

あははーと手を叩いて笑い始める姉。そして隣ではーとため息を
つく妹だった。

感想や応援のメッセージ待っています、是非送ってください喜びます
ではこの辺で失礼します。

19話（前書き）

評価、感想大歓迎です。

咲月さんと一緒に下校。2人で手を繋ぎまだ明るい町を歩いた。
「はあ～有ちゃんの家に遊びに行きたいんだけど妹ちゃんが面倒なんだよね？」

勝手に思い込んで失礼なんだけど…俺の部屋に行きたいだけだったりして？

「ああ～。まあこよいが何をするか分からないからなー」「でもこよいの奴女の子を連れ込んだら…下手すりやあの時のバットで襲い掛かりそうだ…」

「あでもさ有ちゃん。有ちゃんの部屋に何とか上がりこめば大丈夫なんじゃない？」

普通はそうだよね。

「それがさ…俺の部屋こよいで吐き飛ばされたんだ。こめん」

「え…？どゆこと何で…！」

もう笑うしかないよこれ。

「なんか…トイレから帰つたらベッドがあつて。それから吐き飛ばされていった」

「ちよつと待つて…じゃあ何？有りちゃんはその…こよこちちゃんと同じ部屋で寝てるの？」

うわー恥ずかしい質問来た…正直に言つたほうが良さそうだなー。

「…まあやうこい」とこなる

「ええええ…！…マジ？…兄妹とはいえお年頃の男女が一つの空間で一夜を過ごすって危なくない？！」

「その一夜つて言つてやめて、なんか危ないものを連想させそุดから

何があつてもそれだけは避けたい。全力でそつ思つ。

「…そつかごめん」

「でも俺だつて抵抗したんだけどねーあつちは武器持つてたバットですよバット。あんなの反則だつーの。

「それで逆らえなくなつたと」

「そゆ」と。じゃまた明日」

繫いだ手を離し、俺は咲月さんに手を振つた。咲月さんは笑顔でじやあね~と手を振り返してくれた。

それにもしても。一つの空間で男女が一緒に寝るということはそれだけで何かがあつてもおかしくは無いと思う。うん。でもまあ……うちの場合はいたずら程度に収まるから大丈夫だろ。

一人になつてから、カラスや飼い犬の声を耳に、電柱や電線。商店街のポスターを目にしながら帰つていた。

するといつもより一枚ポスターが多い事に気がついた。

「夏祭りか……」

嫌でも覚えてるぞ。去年はこよに振り回されっぱなしだつたっけ?しかも「これおいしそう!」の連発……んで俺がお金を取り出そうとしたら

「こよいちやん!」れサービスだよ!」とタダで様々な食べ物が手に入ったんだ。

……お面が欲しくて同じよづ「これおいし……」と言いかけたのには笑えたけどな。

今年は何とかして咲月さんと一緒に居たい。

浴衣姿の咲月さんと一緒に夜空高く打ちあがる花火を見たい。
できれば本当に邪魔が入らないで欲しい。一人つきりで居たい。

だからそれを叶えるべく、とりあえず俺は立ち止まりこう言った。

「いつまで隠れてるんだ？」

19話（後書き）

感想や応援のコメント大歓迎ですのでじiji送ってください。

昨日はドタバタしてて投稿する事が出来ませんでした。
感想、評価待っています。お願いします。

「出できなよ」

そう言つと彼女は電柱の影からそつと出でてきた。
制服を着ている。という事は学生さんだな……つて同じこと同じや
つじやないか？

もしかして同じ組の人だつたりするのか？それだとして……何のよ
うなんだ？

「ねえ、もしかして中学生？」

この制服には見覚えがある。じょいと同じだ、いつも朝それを見て
いるんだ俺は。

「あ、はいそうです中学3年です」

当たつた、しかも3年生ときた、もしかして
「もしかして平沢じょいを知つてたりする？」

「は、はい！こよいちゃんとは同じクラスメートですっ！」

出た。クラスメートか……でもそのクラスメートが俺に何のようだ？
……つてか何でストーキングされにやならないんだ？

「クラスメートか、うちのじょいがお世話になつてます」
といつあえず俺は田の前のじょいのクラスメートに挨拶をしておく。

「いえいえいんですよ」

ちゃんとこれを解決しよう。ずっとストーキングされてたら気が気
じゃない、とあ早速本題だ。

「……で？何でじょいじょいとしむの？」

「何で……と言われても、本当なら普通にひつひつと話していいんんですけど……」

ふと、頭に原因らしきものが浮かび上がってきた。

「あ、もしかして隣に女の人がいて出て来れずに隠れてたって訳?」「えへへ……そういうことです」

当たり……か。咲月さんが気になり話しかけられず電柱から機会をうかがっていた……。

「あ、あの

急に彼女がもじもじして身長の差もあってか上目遣いで何かを質問するかのように言葉を切り出してきた。

「え? 何?」

「もしかして……あたしのこと覚えてませんか?」

……ひつひつ一度出合つているようだ。

「……ちよつと待てよ、でも思ひ出せない」

思い出せ、思い出せ。この子は誰だ? 何処で会つた? 何者だ? こよいが家に連れてきたことなんて無い、友達すら連れてこないんだ、それはそれで心配だ、ってか一体この子誰だよ。

「……やっぱり覚えてないんですか?」

なんか俺が悪者みたいになってきた。

念のため状況を整理しよう。

朝俺はストーカーの存在に気づいた。でも咲月さんに心配をかけないようにその時は無視した。

で今一人になつて話を聞くのはチャンスだと思い「出てきなよ

と言つた。

それから少しほとぎ話をした。すると覚えてないんですか？発言。

要するに一度は会つた事があるってことになる。

……でも思い出せない。何で？歳？いやそれはないだろ……多分、
まだまだ15歳だ。

「ああ～」少しごくれば思い出せるかも

「ちよ、突進？！」

ふいに受け止めようと両手を前に出す

「あ～思い出した！」

「ストップ！ストップ！！」

俺今手をケガしてるんだよー！これ以上怪我を増やしたくないわー！

「おつとつと

「おつとつと

よろけながら彼女はぼぼ真横に飛び、徐々に徐々にそのスピードを
殺していった。

彼女が止まったのを見ると俺は何も言わずに手を見せた。すると彼女は慌てて

「ケガしてるんですか？！」「めんなさいー！」

と、必死に謝り始めた。

「あいや分かってくれたならいいんだけど

その必死さにこっちの気が引けてきた。悪い人じや……なさよ！だ
なこれ。

「本当にごめんなさい」

「いっていって」

ふと思つ……あれ? シリアスムーディーに行つたよ? ……せつこにせつこに
俺のことだ。

「で、誰? わかんないや俺
回答を求める俺。このモヤモヤを吹き飛ばしたい。」めん、歳みた
いだわ。

「えー? あの時あたしを抱きしめたんですよ? 覚えてないんですか
?」

「だ、抱きしめた? !」

何で! ? おお、俺、抱きしめた! ? 何やつてんだよ俺! ? ついにかいつ
の話しだよこれ!

「はい! 曲がり角でぶつかつになつたあたしを抱きしめてくれ
たんです!

ああーあのときの有「さんかつ」によかつたな! ?

いつだよ? ! その曲がり角は何処だよ? ! そしてそのピンクのふわ
ふわした空間なんだよ? !

「……俺の名前知つてるんだねーあははは……」

「だつてその時呼び止めてまで名前を聞きましたもん

呼び止めた? ……なんか閃いたぞ

確か……咲月さんの家に行くときだ。曲がり角を曲がりうとして曲
がつたすぐそここの子が走つてくるのが見えて……それで思わず
受け止めたんだ。

これか……【抱きしめた】つて。

俺はそれがわかるとため息をつき誤解を解こうと内容に訂正を入れる。

「えー？ 抱きしめましたよ、さあーつてー。」
してないって。んじゃ、え、嬉しそうだねや!!!」 いやといひす、え迷惑
なんだけど……。

「いやいや、抱きしめてない抱きしめてない」

「また一照れてるんですか?」

何でからかわてるんだよ俺。

「でも、でも抱きしめてくれたのは本当にあなたよ？」

まだ言つか。抱きしめてないのに。つてか抱きしめたつて部分は譲らないんだな。

「ああーもうそれはいいって。名前は?名前聞いてなかつた」
話をそらそと名前を尋ねた。抱きしめたつて言つたびにこの子昇天してんだもん。

「ああ、召乗るほどものじやないですよー」

「じゃ、『ストーカーさん』で」

そう言つと彼女は慌てて

「ちよ、それはナシ！ナシですよー。」
と、そう言った。

「じゃあ名前はは？」

もう一度尋ねると

「もう、仕方ないなー。あたしの名前は水橋詩織みずはしおりです」

彼女はそう答えてくれた。

本当に感想とか評価とかお願いします。

早く腕を上げていかないといけなくなりました。

本当なら安定した職に就いて養つていかないといけないんだけど、
でも夢を諦めたくはありません。なので評価、感想をどうかお願い
します。

2-1話（前書き）

感想や評価を願いします。

では面白〜(?) 本編は からです。

あのストーカーは何だつたんだろうつか。悪いやつではなかつたけど。そんなことを思いつつ血せんと足を運ばせる。

八百屋や魚屋のおっさんのが安つよーーーと声を張つて客を呼んでいる。そんな中を俺は歩いてこき、こつも通り商店街のポスターに田をやつた……すると夏祭りの他にも、もう一枚ポスターが増えているのに気がついた。

「そついや明日は七夕か」

どつやら七夕の祭りがあるよつだ。まあ祭りといつても広場に竹がいくつも並べられ勝手にお願い事を書いた紙をくくつ付けると書つ内容になつてゐる。これで祭りと言えるんだろつか。

七夕かあ、今年は何をお願いしようかな。

ふと俺は気が付いたかのように怪我をした手を見た。相変わらず治つていない、ヒール痛かったなあ。

だが、正直なところもう大丈夫だつたりする。でも念を入れて安静にはしてくる、医者に言われたんだ大丈夫だと思つてからもう一週間は安静にしまじょ、と。

とつあえず、ちゃんと治つてますよつこ、とかにしようかな。

そんなことを考えながら玄関に立つ。思わずこれから起つてある事を思つと思わすため息が出てしまつ。嫌な予感しかしないのだ。

嫌な予感しかしないが帰らないわけにもいかず、ドアノブに手を掛け、家へと入る。

「お兄ちゃんお帰りー。」飯にする？お風呂に入る？それとも……『わせな』でよもう~』
と、『よい』が出来てくれた。

「……」飯にある
とつあえずやつ答えておいた。

「あこあこやー」

やつぱり『よい』は台所へ行つた。

七夕をあマジで何お願いしようか……つーん。いつこうのが治りますようにって方が良いかもしない。

そうやつて考へて『よい』が戻つて來た。

「お待たせー」
「お疲れさん」

「今日はカレーですよーはーはーん」
平然と『あーん』をしてくる『よい』。

「自分で食べるつて」

『自然の』とく俺は断る。

「でもー？折角作つたし？昨日のあーんが楽しかつたし？つかまた

やりたいしー」

だそうです。身勝手すぎる。ヒトの事考えてはいるけどもそれ以上にヒトのことを考えてください。

「ヒトちは恥ずかしくて死にやつだつたんだけビ

ちよつと大げさだけどまあいいか。どうせ聞いちゃいない、筒抜けなんだよ。

「死んでないからいいじゃん?じゃ、あーん。ちなみに抵抗すればなにその齧し……。

「それ以上言つたな、分かつたよ。言つておけばビ治る間だけだからな」

「はいあーん」

……聞いてんのか?」
ヒト

恥ずかしい時間が終わつた。何故だらつ嫌なはずなのに、でも最近は……。

今日は7月6日で明日は7日。学校でも少しだけイベントがある日。美咲は『彼氏が出来ますように』とかお願いするんだろうねー。

そう思つてみると

「「」よいー明日は七夕だろ?」
と。お兄ちゃんがそう聞いてきた。

「それがどうかした?」?

多分『お願い事何?』って話かも。

「いや、何お願いするのかなーって」
当たつた。

「知りたい?でもね教えない」?

「何かそう言わると気になるな」

「人間の心理?そんな感じだよね」

「入るなと言わると入りたくなるってあれだよね。」

「まあな」

七夕。どうしようかなー何お願いしようかな?ちなみにお兄ちゃん
は何お願いするんだろう?

七夕祭り。咲月さん誘つて一緒に願い事書いたりつてのも悪くない
よな。

出来れば「よいも一緒になんだけ?……今年は無理そうだな。

そんなことを考えていると

「お兄ちゃん。大好き」

「よいがそう俺に言った。

「急にどうした?」

久々に聞いたからか少しドキッとした。

「ううん。何でも無いけどー?」

その意味ありげなその顔は何だよ。深くは追求しないナビヤー。

「……そつか、ならいいんだけど」

「じゅあ寝るぞ」

やつぱりとこよーがソファーから窓こどりからへ来て俺の肩に手を伸ばし

「へいおんぶー」

と言った。仕方なく、【仕方なく】おんぶしてやる」とした。

「はあ。いいけど背中で寝るなよっ..」

どうせ寝るんだろうな。まあさつやと寝るのよこいんだけど。それ以上何もしてこないって意味だからな。

「おつナー」

それからじゅあ寝る。寝室のドアを開けてベッドにこよーを降りた。

「……寝てるじゃん」

なんだか嬉しそうな、少しだけ微笑んでこよーみつな、そして目を開じすうすうと首を立てていた。

その顔を見るとこよーがとても可愛くて、とても大切で。そんな気持ちがゆっくつとこみ上げてきた。咲月さんも好きだけど、こよーのそれとはまた別なんだよな。

俺も布団に入つて寝る事にした。

入って、ぐるぐる回られるわけじゃない。寝て、そのまま起きるまでの間の感じ。隣に寝かせたところの頭をさすつ続けた。

可だらう。まことにこの事が……。暖かく感じるのは、

21話（後書き）

感想、置いて帰つても「うれると嬉しいです。

評価、してくださるとともにありがとうございます。元気が出ます。

お気に入り、追加していくと自信が出てきます。

22話（前書き）

お久しぶりです！

感想や評価をどうかお願いします。

感想なんですが、良いところと加えて批判してくださるとありがたいです。

用は非の打ち所がないよう作つていけばいいんですから。
協力お願いします。

「お兄ちあひやんはこ」れー。」

セツ言ひてこよにに長方形型の紙を渡された。

「んじやじよこは」れ持つて書いておきな

お返しに俺はこよににペンを渡した。

「あらがと」

ペンを受け取ると早速こよには紙にお願い事を書き始めた。

願い事か。何こじよづか。

「有ちゃんはなんて書くんだい?」

そう言つて咲月さんが現れた。私服なんかかっこいいクールだなー。

「ああ咲月さん。いや、まだ決めてないんだよね」

ホント何書こよか書かなかつたらそれはそれでもつたいたいと言つますか……

「あたしはもう決めてるけど教えなーい」

「妹にも同じ事言われたよ」

こよいは何を書くんだろうか……いや予想は付くんだけどね。一体何を書くんだろうねー。

「マジかあははつ案外こよにちゃんとは気が合にそつて、いやいややめた方が良いよ・マジで。

「やうかあ？」よこは敵対心を持つて接して来ると思つたが、そんなことを言つたのよこが、うづくやつてました。

「こんばんはーお兄ちゃんのお友達ですか？」

うづー來たよ、うちの妹來たよ、もう書いたのか。何書いたんだ？
「うん。やうだよー」よこちやんだよね
「あ、はい平沢こよいです。兄がいつもお世話をなつてあります
ん？『あんた誰……！？』って予想をしてたんだけど……考えすぎ
だつたか。

「おお、なんて礼儀正しい子。あたしの名前は姫川咲月、よろしく
ねこよこちやん」

名前を告げられ咲月さんもよこに名前を告げた。

「姫川さん。珍しい苗字ですね」

そういやそうだな、咲月さんの苗字つてなかなか聞かないよな。

「やうだねーあんまり聞かないよーってかあたしの事は『咲月さ
ん』……じゃ被るから……有りやんビうじよつか」

急に振ってきた！

「て俺に振るのかよ！？もう何だつていいじゃん『姫川さん』とか
俺みたいに『咲月さん』って事でよくない？」
被る。つて『咲月さん』って呼ぶのは俺だけか？

「えー？じゃとつあえず『姫川さん』でいいや

何か不満そうにそう言った。

「じゃあ姫川さん。改めてよろしくお願ひします」

「おへてひやんせり」

この二人。実は一度は面識があるんだよね。ほら、手を怪我したときには。

「じゃあ、ちよつと「みこちゃん」借りていくな～」

「ん? あいにば

何をするつもりなんだろう?まさか……女同士の激しいバト……んなわけあるかよ。

「」よいは別に良いよ？お話してみるのにいい機会だし
ああーやつぱ疑つてるよなー咲月さんが何者なのか。

なんかおなか減つてきたなー。

「こよいは別に大丈夫ですよ？」

ふーむ、遠慮してるねー。

「またまたーそんな」と言って、あたしの好意が受けられないのか

1
?

「いえいえそんなことじゃないですよ？……でもやつはいつかくれる
ならありがとうございます」

おおーいい子だ流石有りやんの妹ちゃん。

「よし来た、じゃあ適当に何かを買うから付いてきなー」

「あ、はい」

人も多いけど屋台も多いんだよねー。つく。

なにかしらあるね」

その他諸々

お金はあるけど何買うか迷うなーって、やっぱ敬語止められやうか

卷之二

「これだけあると困っちゃうよねーってかあんまりあたしに敬語は使わなくて良いよーいつも通りで良いよ?」よいちゃん

「いつも通りは流石に……」

「そっかーじゃあ……ジャンケンポン!」
ふつ……勝った。

「…………負けたってありますよ、姫川さん」

！？ いやいや落着にあたし

「へ? 可ですか?」

落ち着け、もちつけ、ぺつたんぺつたん…… とりあえず敬語を解除

しなくては

「こやいや何でもないよ? よし。職として敬語を禁する。」

「えー！？ 気が引けやん…… 気が引いちゃうよー！」

行こう！

かわいいー！やつぱーの子かわいいー！

「よいかやんの手を引いて焼きそばと書かれた看板を立てている屋台にあたし達は入った。

「すみませーん焼きそばーつ、割り箸ーつお願ひします」

「割り箸ーつね、いいよ400円になります」

「ちょうど400円で」

「はい400円お預かりしました。はいどうぞ」

「ありがとうございます」

「焼きそばゲット。」

「おーふんーおしゃべり箸どりーん」

「あつがとうござれこま.....あつがとう」

敬語が解除されるのにはちよこと時間がかかるかなー?

「やつ。敬語は禁止、まだまだ続けるよーーじゃいただきまーす」
焼きそばを食べよつとした瞬間こよこちやんが真剣なまなざしで質問をしてきた。

「姫川さん。一つ聞いてもいい?」

「ん?なんだい?」

「姫川さんって彼氏居る?」

.....あつちやーどう答えよつか。いやいや待てよ?.....これならイケる。

「彼氏?.....いなーけど。あつ西ふと思つたんでしょーー!?

「だつてこんなに優しくしてくれるしモテルさんみたいに整つた顔.....。絶対彼氏居るよね?」

「あはは~まつたくー彼氏は居なーっての、いや、いるけどさ。いなーよーちょっとおかしいね。

「じゃあお兄ちゃんは姫川さん」とつぶやく人？」

「うーんそうだね。『好きな人』って所かな」

「……ちょっと待つて『彼氏は…いない！？』『は…！？』

『は』を強調してきたね。気づいたかな？気づいたほうが話早くていいんだけどー。

「鋭いねえ。こよにちゃん」

「えつ！？明らかに姫川さんに対する好意を持つているお兄ちゃん。そしてそのお兄ちゃんの事が好きな姫川さん。一人は彼氏彼女じゃないとしたら一体…！？」

「まあまあその事は置いておひつじやないかこよにちゃん」

……わあ喰いついてくれよ？

「気になるー気になるーお兄ちゃん絶対言わないもんー」

よつしや釣れた！これでイケる。

「はあ……じやあ教えておくね。ちなみにこれのせいで有ちゃんにとつてなにか悪い事が起きたらその時は有ちゃん拉致しちゃうかもつて事を前提にだよ？」

「え、ええ……えええええ…！…んぐうううー」

「こよにちゃん声大きいつて…！？」

周りの視線が一斉にこよにちゃんへ集まつた。迷惑になると考えてこよにちゃんの口を手でふさいだ。

「「」めんなさい……で、でも婚約者？！」

「やつぱびつくりだよね。

「」よにちゃんが不安になるような事は一つもないから安心して～「あるよー婚約なんかしちゃつたらお兄ちゃんこよこのそばから消

えちやうもん！そんなんの嫌だよ……」

やつぱいの子にとって有ちゃんは大切な存在なんだねー。

「へ？……だから不安な事は一つもないって。誰が『一人暮らしをする』って言つたの？」

「え？どうこいつこと？」

説明してやんよこよこちゃん。

「じゃああたしが考へているみんながハッピーになる事を教えてあげよーーー！」

「みんなが……ハッピー？」

「そ！【あたしは有ちゃんと一人暮らしはしない】要するにこよいちゃんも一緒に暮らすよつて事。そしたらこよこちゃんは大好きなお兄ちゃんと一緒に暮られるでしょ？まああたしが有ちゃんを占領していない間だけねーあはは！」

最低条件としてこよこちゃんから有ちゃんを離さなければこよこちゃんはそれだけで不安な事はないんでしょ？つまり一緒に住んじやえばいいんだよ。

「は、はあ……姫川さんって何かすごい人だなあ」

「これならいいんじゃない？ってかあたし以外の女の人と結婚なんかしたらそれこわすつと会えなくなっちゃうよー？」

まあ独り占めは無理になるけどそこは妥協してもいいしかないよね。

「う……確かに」

「だからあたしとは仲良くなつね？ホントに有ちゃん独り占めこしようと思つたら出来ちゃうんだから」

「う、うん。仲良く」

よし、説得終了ーーー

「はあーーしゃべつたら喉が渴いた！ほら飲み物買いに行こー。」
「…………うふ」

七夕祭りに出向いていたのは有二たちだけではなかつた。数日前から、美咲は衛をこの祭りに誘つていたのだ。

「おーい衛！」^{まむる}ちち来いよ！」

数名の男子が衛を呼ぶ、中学の生徒たちだ。

「あーダメー！今日は前からあたしが予約してたんだからー。」
そこへ割り込むは美咲であつた。

「んだよ美咲！お前衛の事が好きなのか？」

男子生徒が美咲をからかい始める。

「はあ！？うつせーよバー力！」

「バカはお前だヴァーカ！！」

「バカはすつこんでろバー力！」

小学生のようなやり取りをしていくと衛は

「ちよ……俺の存在空氣化」

と呴き、それを聞いた美咲は衛の手を取つて

「さあ行こー衛君」

と衛をどこかへと連れ出した。

強引にも美咲は衛の腕にしがみつき引っ張りながら皆が書いたお願
い事を見ていく。

そして面白いものがあれば衛にも教えていった。

「！」「これは……」

衛が立ち止まつた。美咲も立ち止まり

「へ？ どれ？ 衛君」

と衛の見る短冊を探す。

「これ……書いた人思い当たる節があるんだけどまさか本人？」

「えつと？ 【お兄ちゃんと一緒に幸せになれますように！】……うん。

多分あの子だ」

「こよ」

「あーーーもう言わなくともいいよー衛君」

そう言つて美咲は衛の口をふさぐ。

「おつ合格祈願してる人もいる。あとは恋愛成就かー」

「あー【合格しますようにー】とか【彼女、彼氏が出来ますようにー】つて？」

「うん。 そうそう」

美咲はそれ以外の類のお願い事を見つけた。

「ふーん【有ちゃんの子供が出来ますように 子供かいね～】

そう言つて美咲は衛に視線をぶつける。

「何？ その視線。俺？」

「べつにー？ さあどんどん見てこい！」

「すうじいたくさん書かれてるよ」これ
若干呆れながら衛はそう言つた。

「どれどれ？【彼女が出来ますよ、受験に合格できますよ、リコンが治りますようにー父さんの浪費癖が治りますようにー母さんが家に帰りますようにー】なんか悲惨な事が…衛君。見なかつたことにしよう？」

「……賛成。なんか後半が悲惨だね」

まさかこれを書いた人が高校時代を共にすることになるとは美咲も思つてもいなかつただろう。

22話（後書き）

少し長いですね。2週間分って事で先週投稿しなかった事を許して
一。

では読み終わったあなたの評価や感想を送りつけてください。
どんどんこの作品を盛り上げていきましょう！

ではこの辺で

23話（前書き）

評価してください！感想ください！もしも1話から100まで読んだ所見さんは是非お気に入りに入れてください！

祭りに参加している人は他にもいる。ほらあそーに……

「善人ーちょっと疲れたかも」

そういうて今にも座り込んでしまったのは白川綾乃。

「あー疲れちゃった? ジャあ何か飲み物買って来てやるからねー」
で待つてろよ」

「お願いねー」

善人は飲み物を買おうと出向いた。そこで彼は妹を発見した。

「お、美咲ちゃん……え? !隣の彼はまさか、お前のげぼ」
「下僕ちゃんうわー！」

美咲が思いつきり蹴りを入れる。善人は直撃の寸前で腹筋に力を入れそれに耐えた。

「おうつーー相変わらずいい蹴りだ……つたぐ、男らしく成長して。
お兄ちゃんは弟が出来た気分だよ」
「うつさいわー! あつち行け!」
「へーへー買うもの買つたらさつと退散しますよーだ」
「せつせとどひつか行けバカお兄ちゃん」

これがいわゆるノリューケーション。目の前でそれを見た衛は

「……兄妹つてすーいね」

と呴いた。

「衛君は兄弟いなかつたんだつけ？まあ兄妹なんていない方が楽だと思つよ？」

「あははは、そりがな？」

「そりだよ！ いない方が良いよ」

善人が買い出しに出た頃。

「おーい、綾乃。ずっとそこ見てたよ～」

「げつお姉ちゃん！？」

どこから現れたのか分からぬが綾乃の後ろから紗希が現れた。

「げつ、とは何だよーそれにしても彼はイマイチね」

そう紗希が言うと綾乃はムツとして

「お姉ちゃんでもあんまり悪い事言つと許さないよー？」

と威嚇した。

「あははは「冗談だよ「冗談。……彼氏が居るのが憎たらしい」心の声がボソツと出てしまつたようだ。

「ん？ 何か言つた？」

「え？ 何も言つてないけど？ どした、何か聞こえてしまつたのか？ ちなみにあたしは何も聞こえなかつたよ？……もしや幽霊の声が聞こえたんじや……！」

「ないないそんな事」

「いやいや案外あるかもよ？ ってかお邪魔だよね、それじゃ

そういうながら紗希は立ち去つた。

「……なんで茂みに入ったの！？」

そう言われガサガサ音を立てて紗希は

「妹のデートを監視する義務があるー。」
と言い返した。

「ないよー。そんな義務ないから！」

「で、ですよね。それじゃもつ家に帰つてるね、お先ー」
綾乃の行動を見ててもキス一つもしない事につまらなさを感じ家に
帰つてテレビでも見よつと紗希は思つたのだった。

相変わらず周りはお祭り騒ぎだ。そんな風景を横目にしづらく歩いた紗希は急に足を止めた。

「咲月ちゃんー！？」

そう言って紗希は駆け寄つた。

「えつ？紗希さんー紗希さんじやないですかーお久しぶりです」
紗希が駆け寄つたのは咲月がいたからだつた。二人は小さい頃の親
友だ。

「やつぱ咲月ちゃんじやないー大きくなつてー」「
まるで母のような台詞。

「えへへ。あの頃から確か5センチは伸びましたよ」

「やつぱ少しは伸びるよねー、で？この子は？」

そう言って紗希はこよに視線を向ける。

「この子はこよーちゃん。あたしの旦那の妹ちゃん」

旦那と言つワードをわざつと受け流す。

「旦那つて咲月ちゃんの？」

「はいそうです」

しかし、冷静になつた紗希は事の重大さに気づいた。

「……ちょっと待つて。旦那？！結婚したのー？早くないー？」

「いえ、まだ籍は入れてないんですよまだ年齢が達していないし」

「あそつかまだ15歳だけ？咲月ちゃん」

咲月と有二共に15歳。結婚するとしても3年は必要になつてくる。

「うん。15歳」

「あ、あの咲月…姉ちゃん」

おとなしくしてたこよいが口を開いた。

「うん？なんだい？」

咲月はこよいを調教していた。いまこよいが咲月姉ちゃんと呼んだのもそれのせいだ。

「そろそろ家に帰らないといけないから帰るね」

「りょーかい！今度遊びに行くかもしれないからようしくねー」

「うん分かった。その時はこよいが手料理食べさせてあげるね」
こよいはもう既に咲月に懐いていた。咲月の雰囲気がなぜか心地良く感じたのだ。なぜかは分からぬが。

「おおー！それは楽しみ！」

「ばいばい咲月姉ちゃん」

そう言つて自宅へと急ぐこよいだつた。

「ばいばーい！」

「

「あの子いい子だね咲月ちゃん。ああいう妹が欲しかったなー」

「え？綾乃さん。でしたつけ？彼女じゃ不満があるんですか？」

「まあね、最近善人とか言つ彼氏を作りやがつて」

「そなんですか、つてことは紗希さん彼氏持ちじゃないんですか

？」

ズバリと言つた咲月。結構鋭い。

「そなによ咲月ちゃん。困つてんのよーヤバいのよー」

「大丈夫だと思うんですけどねー、たぶんアレですよ。紗希さんには

は既に彼氏が居ると思われてるんですよ。だから誰も紗希さんを狙わないんですよ」

そう咲月がフォローすると紗希は元気になつた。

「……そつかー！そつこいつ事だつたのかー！なんだなんだそつこいつとだつたのかー！」

「そつこいつじだつたんですよー！」

しばらく懐かしさを感じながら語り合つてていた二人だつたが時間も時間だつたためアドレスを交換して一人とも自宅へと急いだのだった。

そしてお祭り騒ぎも終わり少し寂しさを感じながらも皆は去つていつた。

「咲月さんもこよこもどこに行つたんだ？」

ただ一人、残されたものを除いて。

23話（後書き）

悪いことこのも書いてくださると成長に繋がります。今回は読者のリクエストに沿って紗希さんを出しました。

では「これを読んだら感想も書いてくれると嬉しいな。ついでに評価ポイント入れてくださると大喜びします。では来週もお楽しみに!」

感想や評価を送ってください。評価してもうれると嬉しいな

なんでも無い日のことだった。

「はい、お兄ちゃんはお留守番よろしくね」「よいには有一を置いてお買い物へ出かける。

「おう任せろ！ 行つて来いに行つて来い！」

「この束縛から解放される有一は少し嬉しげ。

「なんか機嫌良いねー？ 何か隠し事でもあるのかな？ どうなの？」

「なーんもなーいって」

「ふーん、まあ良いけどな、じゃ買い物行つて来るねいつも通り6時半には帰るから」

そう言つてよこは靴を鳴らす。

「つょーかい、じゃあ気を付けて」

「じゃ、じゃあ行つてらっしゃこのチュー」

いつも通りよこはふざけて求愛をする。いや、ふざけてはないかもしぬ本気だらう。

この時よこはまさかあんなことになるとは本人でも予想できなかつただろう。

「んなもんあるか、わざと行つて来いつて」

「よこはつづいてよこはほつぺたを膨らませ甘えるよつな声で返した。

「うー、たまにはこいじやんかよー」

「まあ そうふくれるなよ

「今日のところは見逃すとしよう、じゃあ行つてきまーす」
まさか有一に『一緒に行けばよかつた』と後悔するよつな日が来ようとは微塵も考えられなかつた。

その頃、白川家ではこんなことが

姉弟が集合する会の部屋で綾乃が紗希に服選びを手伝つてもらつて
いた。

「姉ちゃん今度のパーティーなに着て行けばいいかな? こいつち~、それと
もさつきのやつ?」

綾乃はいくつかの種類の服を鏡の前で着替えてはうーんと悩つてい
た。

「やつぱつセつきのが良いんじゃない?」

「じゃあセつきのにしようかな」

「服選びはいいけど……普通に弟が居るといひで着替えなんてす
るんじゃねーよ、まあ綾姉だから別に大丈夫だけど」

「でもあたしとなると事態は一変しちやうんでしょー?」

からかうかのように紗希は巧に聞いた。

「うん、なんかいろいろとヤバく変化するいろいろと」
そう返事した瞬間巧のほっぺたをつねる手が出現した。

「こら巧いいいい! って事は何? ! あたしに魅力がないと
!? サービスもサービスでなくなると? ! そう言いたいのかな!!
? 巧! ?」

たーてたーて、よーじよーじ、とその手を上下左右に動かす綾乃。

「やめろほっぺたつねるなこら、綾姉やめろつて」

下着の姉にほっぺたをつねられる巧。いたつて冷静であるが仮にこ
れが紗希だとする、恐らく巧はこんなに冷静を装えないであらう。
何故かつて? それは悟つてもらいたいところである。

「そりだよ綾乃、あんた今下着だよ。さつさと何かに着替えなつて綾乃の体を指差し紗希はそつとつた。

「う……そつする」

確かに今自分は下着以外何も身に着けていない。もしこれを恥らわないなら乙女として重症である。そう思った綾乃は即座に着替え始めた。

「つたく綾姉は……」

「まあまあ巧。綾乃だつて一応女なんだしさ少しは恥らつてあげなよ。確かに綾乃は魅力が少ないし、あたしみたいに胸が大きいわけじゃない。でも貧乳はステータスつて言つじやん?だからさ心遣いでいいから恥らつてあげてね?」

そう言つて紗希は巧を説得する。が、そこに

「さり気なくフォローになつてないフォローが聞こえるのは気のせい?！」

と綾乃がツツ「ミミを入れた。

「え? 何か言つた? 綾乃

白を切る紗希。

「いえ、なにも言つてませんが何か……！」
呆れて無かつたことにする綾乃。

「おおー綾姉からドス黒いオーラが！」
「出でないつて! んなもん出ないよ!」
「いやいや綾乃だし。出せるかも!」
「出るわけないでしようが!」

「つてかさつさと着替えてよ綾姉! なんかこつ……ああーもう! なんでもない!」

……とまあ今日も平和な白川家だつた。

所変わつてこよいはスーパーで買い物をしていた。

「さあてお兄ちゃん、今日の晩御飯は何にしようかなー? つて居な
いんだつた」

ある意味あの一件で食料品売り場が怖くなつた有一はしばらく買い物には付き合わないとの事。

いろんな野菜とにらめっこをするこよに声を掛ける人が居た。

「おや? こよいちやんじやないか~」

「咲月や……咲月姉ちゃんじやないか~」

それは咲月だつた。ちょうど買い物に出ていたようだ。

「ふふつ可愛いの一お主へわしの嫁にならんか~?」

何故かプロポーズをする咲月。なぜプロポーズをしたのかは……謎である。

「お兄ちゃんが居るならそれでも良いよ~」

快くプロポーズを受けるこよい。何故かは……やはり謎である。

「へへつもちらん有ちゃんも一緒だよ~」

「なら良いよ~、でさでさ咲月姉ちゃんは今日の晩御飯何にするの

?」

主婦なお話に路線が変更された。

「あたしはねちよつと今日は疲れちやつたからやつせとチャーハン作ろうつて考えてる」

この日咲月に何があつたのかはまたの機会と言つことだ。

「じゃあうちもチャーハンにしよつと」

「あらり、決めてなかつたのね?」

一人で楽しくお買い物、作るものを作るものだつたからあんまり長

くは話せなかつたようだ。

簡単に材料が集まつてしまつたのだった。

「じゃあまた会おうね」よいちゃん

「うん、絶対だよ？」

「ふふつ、りょーかい」

そう言つて二人は別れた。

この時咲月は一緒に帰つてあげればよかつたと後で思つ事となつた。

そして事態が急変した。こよいが帰宅しているところへ二人の男女が現れた。

これがきつかけだつた。こいつらが現れなかつたら良かつたんだと有二は後でこの二人を恨む事に。

「あなた、やつぱり」の子【こよい】よ
「ああ、分かつて、じゃあ行こうか」
そつ言づ一人はこよいのことを知つてゐるよつだつた。

「買い物袋重いなー」つづくときお兄ちゃんが居てくれたらいいのに

「」

「こよいが呟いた時だつた。

「すいませんちょっとといいですか？」

「え? 何ですか」

目の前には女人の人、その後ろに男の人立つてゐた。女は今にも泣きそつだつた。男は俯いたまま何も言わぬで立つてゐた。

「やつぱりこの子が……大きくなつて」

まるで自分を知つてゐるかのような台詞。思わずこよいは2歩3歩

と後ろに退いた。

「ちょっと何ですか？あなた達一体誰なんですか？」

「『ごめんなさい、紹介がまだでしたね。私たちはあなたの親で、あなた達を引き取りに来ました』

この女は自分たちは親だと言った。そして引き取るとも言った。それを聞いたこよいの表情は一変して真剣な表情へと変わった。そして最善策を考えた。自分たちを捨てた人のところへ行くなんて最悪だ。

じゃあどうする…… そうだ今のところ自分から名前を明かしていくないじやないか

相手に完璧な素性がばれていかないのなら

「人違いじゃないですか？」

「こよいはそう言った。

「え？」

女の人はまさに目が点といわんばかりの表情。後ろの男は相変わらず申し訳なさそうな表情をしていた。

「人違いですよ。それじゃ急いでるから失礼します」

そう言つてこよいは走り出した。まだ気は抜けない。こよいはわざとあらゆる道を使って帰宅した。後ろから追いかけられ追いつかれないためだ。

「人違い……？ え、そんなはずは」

財布から2枚の写真を取り出す。そこには保育所の時代のこよいと有一。そして中学時代のこよいと有一が写っていた。これは母方、要するにこの女の母から譲り受けた写真だった。

一体何？親？じまやうり何をしこたつて言ひのよへとつあえずお兄ちゃんに言わなきやあと咲月姉ちゃんにも言ひておひへ、こやれと言ひとお助けてくれるかも

そつ思いながらひじょこは玄関のドアを開け、やつれと閉めた。

24話（後書き）

シリアルス回つてこんな感じでしょうか？

とりあえず次回が気になれば僕は嬉しいです。

感想や評価、あと応援メッセージを募集します。よろしくお願いします。

25話（前書き）

今週からあとがきのやり方を変えてみよひと頃こます。

「 といつて、」

真剣な面持ちでいよいよいつ言った。

「 親か。 一体引き取つてどうするつもりだよ」

「 なんかすごい腹立たしい、ぶん殴りたい気分。

「 つか信じられないあたしはその二人が許せないかも」

咲月さんもいつもと変わってイラついていた。こんな顔するんだね

……。

「 咲月さん……俺も同じだよなんかいまからって感じ」

「 ねえお兄ちゃん。どうしよう……」

こよいが不安そうな顔で尋ねてくる。そこで一つの疑問が浮かび上がりってきた。

「 うーん、どう対処しようか。 つてか待てよあいつらがここに住んでるんだ？」

考えはしなかつたけど今となつては結構重要なこと。現在どこに住んでいるのか。

近場だとそれはそれで遭遇しやすく危険だ。遠くに住んでいふとなると、最悪の場合……。

そんな事を考えていふと咲月さんがその最悪の場合に気がついた。

「 ……！ 有ちゃんそれって！ つまり何？ あたしと会えなくなる可能性ってきたって意味！ ？ そんなの有り得ない」

普段こんな大きな声を張らないだけあって今の咲月さんはとても迫力があった。

「 で、でも意外と近くかもしれないし、遠くに住んでいふとか決ま

つた訳じゃない。んでもって俺は引き取らねる氣もさう無い。今まで通り仕送りだけ続けてもらいつ
俺たちを捨てておきながらどの面下げて来やがったんだよ、一回で
いいから愚いつきり殴つてやりたい。

「ひらつ

「じゃあ引き取られないよつ説得しなきゃだねお兄ちゃん」

「ああ。やうだな」

「でも有ちゃんどうするの?多分また出でてくると困つたび」

「そつなんだよなー」

「明日も来るかな?」

来るだろ?な。俺だつたらまた確認しに行く。多分来る、いや絶対
来る。

その考えを伝えようとしたら咲月さんも同じ考えだつたらしく代弁
してくれた。

「来るかもねーあと、こよにちゃんは『人違いです』って言つたん
でしょ?」

「うん、言つた」

「じゃあ遠くから見てる可能性が高いかも、相手側からすれば何か
しろの方法で顔を見てるとと思う。あたしだつたらそつだね、誰でも
良いからその人の友人の卒業アルバムでも貸してもうつかな
探偵だなあ、咲月さん。

「……やっぱ俺も付いていつたほうが良いよな?」

強行手段に出たら危ないだろ、相手は一人だし多分片手に買い物袋
だろ?

「いや、お兄ちゃんは来ないで、一人揃つて出でわしたら今度こそ
誤魔化せないよ」

「そつか……」

「じゃああたしが一緒についていくよ」

「おー、咲月さんが付いているなら出くわしても何とかなりそうだな。

「ホント?……でも」

「でも?……でも」

で、でも?断る気なのか?……あでも?これで咲月さんに迷惑かけたら申し訳ないか。

「でも?」

「これはあたしとお兄ちゃん。ましてや家族の問題なんだよね。だからあたしだけでがんばる。でもヤバかつたら咲月さんにも協力してもらいつ」

「そつか、がんばりなよ?で、協力つて?」

「うん。最悪の場合咲月さんが一人に向けて「つちの妹に用ですか?」つて言つてもういつ」

それを聞いた瞬間、頭の隅で浮き上がつていたいろんな考えが繋がりそしてひとつ結論に至つた。

「ちよつと待つたこよい、それはいいんだけどやつぱ眞正面から説得するほうがいいんじやないか?」

現実的に考えようぜ……。

「何で?最悪の場合一緒に過ごすんだよ?」よこはそんないと認めない。他に同屈するなら咲月姉ちゃんしか認めないからね?」

お、怒られた……。

「おおー!よこちやん可愛い事言ひじゃないー更に気に入った!」

咲月さん……!今はそんなこと言ひてる場合じゃないって!..

「咲月さん可愛がるのは後にしてとりあえず話しあさない?」

「うん分かった。で?どこからだつけ?」

「説得しようつて所」

咲円さんはうーん、と考え込みこんなことを言った。

「……うーん、あたしが考えるにはその一人はお金に余裕が出来たから引き取るなんて言つたんだと思うのよね、結局有りやんとこよいちやんの生活費つてその一人のお金なんでしょう？」

「ああ、あとおばさんのも使つて、おばさんの講座にそいつらのお金が振り込まれてそこから俺たちの口座に振り込まれ、って流れでお金が入つてくる事になつてる」

これが止まつたらもう俺たちは生きて行けなくなる。要するにこのパイプが切断されたら俺たちの命も絶たれることとなつてしまつ。

「ん？ おばさんって？」

「俺たちを育ててくれた人の事。咲円はおばあちゃんつて呼んでた。今はおばさんつて呼ぶことにしている」

おばさんこはとても感謝してる。引き取り手が無い俺たちを自分から、私が引き取りますと名を上げてくれたのだから。

「やつかー、でさでやれいからの頼求つてのは？」

「一緒に過ごす気は無い。そのままおばさんと仕送りを続ける」

あれ？ そういうやさつきの結論どんな考え方だつたつ？ パツと浮かんでパツと消えたぞ……。いよいよ怒られてるついでに考えを繋いだ鎖が解けてしまつた。

無かつたとのこと。

あれだけであきらめたとは思えない……口に力を置いているだけか？

「よいは買い物袋をテーブルに置き左手で右肩を押さえブンブンと肩を回す。

「ああー疲れた疲れた」

そう言ってこっちをチラチラ見てくる「よい。な、なんだよその視線は……。

「え？ 何その視線」

「べつにー？ なんでもなくは無いけどー？」

「そつか、何があるんだな。おおよそ見当は付いてるけど……」

「こじばらくずっとと考えていた、結論から言つと俺はあいつらにかくまつてもらつた方が良かつたんじゃないかと思つた。だからあの場に俺が居合わせてたら話のひとつやふたつが入つただろう。もしそうなつたら恐らくあいつらと一緒に過ごすことになつたに違ひない。だから俺は後悔した、こんなこと「よい」に言つたら怒られるに違ひないだらうけどもつと現実的に考えないといけないのがこの世の現実つてやつだ。それに実際、家計が苦しくなつてきている。

とりあえず「よい」が勝ち取つた特売品をフルに活用してなんとかやつていけているけど……本当はジュースとか買つてる場合じゃないんだよね。120円あれば秋刀魚一匹買えちゃうんだ。そしてジュースを5回も我慢すれば600円。600円あれば色々と買えてしまう。もちろん大きいものは買えないけど、でもそんなのいらないから論外だ。

そんなこんなで家計は結構苦しい。正直引き取つてもりつて養つて貰うほうが良かつたのかも。

俺ながらシリースに事を考察していると一度こよいがエプロンを着て包丁を取り出していた。

こよいは昔から包丁を持つときにニッとした笑う癖が付いてしまつてゐる。それは狂氣的な笑みにしか俺は見えない、久しぶりに見たなこれ。この笑みはこよい曰くよーし、がんばるぞーと意氣込んでいるらしい。

トントントンとリズム良く何かを切つている音がする。同時に鍋の水が沸騰している音も聞こえる。沸騰したな、俺がそう思つたときにはこよいはその鍋に何かを入れていた。

慣れてるよなー、そういえば咲月さんの手料理オムライスしか食べたこと無いからふだんの料理が気になる。そういう一人暮らしだつたつけ？

そんな事を考へていると、お兄ちゃんといよいが呼び、俺はびつした？と答えた。

お風呂が用意できるから先に入つてとこよいに言われた。俺は分かつた、とだけ言って風呂場へと向かつた。

風呂場へ行くと服を脱ぎ、体を洗うタオルと体を拭くタオルの一枚を持つて浴室へ。

浴室に入ると後ろに振り返つて鍵を閉める。ガチャ、その音が俺を安心させてくれる。

「なんで鍵閉めるのー？」

「なんでこよいはそこそこいるのー？」

来たぞ、やつぱり来たぞ。」よこから風呂入つて良いよ。つての
はもう夕飯は出来た、つて意味も含まれている。だから「やつて
俺を困らせてこない」とができるんだ。

「……ねえ、お兄ちゃん

急に悲しげな声で「よい」が俺を呼んだ。

「ど、どうした？」

急に寂しそうな声を出すもんだから思わず心配してしまつた。

「あのね、あの人たちが出てきたとき、『引き取りに来た』って言
つた時こよいはす」「く怖かつた」

「……」

俺は何も言つことが出来なかつた。どう言つてやればいいのか分か
らなかつた。

「お兄ちゃん」と一緒に過ごしてもうすぐ半年。おばさんがこんな良
い家をくれるなんて思わなかつたよ

「俺は不動産やつてたんだ、つてビックリした」

それにしてもひとつ家をくれるなんて凄いとしか言えない、実はお
じさんのが相当稼いでいるらしい。だからこんなことが出来たんだと
コレを貰つた後におばさんからそのことを俺は聞いた。

「ねえ……初夜の時覚えてる?」

「初夜とか言つた、勘違い多発だ」

知らない人が聞いたらどう思つだらう。多分良い方向には思つてく
れないとどうな。

「あの時ねこよいすつごい心臓バクバクしてて中々眠れなかつたよ

「何興奮してたんだよ……」

明日は遠足だ……！ああー明日から修学旅行かーって少年でも最近

はアツサツと寝るんだけだな。やけのけんなうだ」。

「ある日タンスの角にお兄ちゃんが小指をぶつけてもがいてたりして」

「あんなことまだ覚えてたのか……」

【なぜタンスに小指をぶつけるのか】って題名で自由研究したつ？結局パソコンで調べたんだけど……。

「カレーは作ったのにご飯炊いてなかつたりした時悔しかったな」「食べよつと思つたら水に浸かつた米を見て笑つちやつたよ」「みよつし…食べるぞー……あれ？」「飯が。つてしまらべポカーンとしてたつけ？」

「でもね、わざわざじゃないんだよ？全部ご飯がお兄ちゃんのため」と想つてやつてるんだよ？」

急にじうじたよ。変なもんでも食つたか？……つてさうひと口かわるか。

「分かつてる、だから俺は怒らなかつた、こつもこよこには感謝してる、ありがとなこよこ」

「……つーグスツ……」

泣き出した……！この事態に俺は慌て始める。

「ちよ、こよい？……泣いて、いるのか？」

「な、泣いてなんかないもん……ズズッ」

泣いてるじやん、鼻水まで出てるのか？それにしても唐突だな……。

「鼻水すするな。ティッシュでなんとかしや……」

「分かった……」「めんね
「何で謝るんだよ」

そう言ひてこよこは居間へと帰つていった。何だつたんだ? 一体
…。

風呂から上がり夕食も食べ終えた俺はさすがに寝よつとびベッドに潜り込む。

「意外と早かつたね」

先客が居た。何十分か前に風呂場で泣いていたこよいだ。

「こよい、せめて自分で寝ろつて」

「ヤダ、こじに動きたくない……」

「じゃあ俺がこよいの」

そう言つて移動しようと思つたそのときこよこが俺の腕を強く掴んだ。

「ダメ! 行かないで! 一緒に寝て? ね、お願ひ……」

徐々にかすれていいくこよこの言葉。俺は後ろのこよいを見た。

そしてこよこの目に溜まった涙を見たとき俺の中で何かが動いた。

その後に思ひ浮かんだ言葉は『シスコン? 何とでも言え』

俺の決意は固まつた『あいつらなんかこよこは渡さない、こよこは俺が守つてやる』
そう決意した。

それから涙田のこよいに腕を掴まれた俺は一つ提案をした。
「なあ、こよこ。ベッドへつ付けるか」
「え?」

「こよには手を離した、そして俺はこよにが使うベッドの横から力強く押した。

初めはギギギ……と嫌な音がしたがしばらく押していくと抵抗感がなくなりスムーズに押せた。

「これで広くなつただろ? じゃ寝るか」

「お、お兄ちゃん!」

そうついつて抱きついてくるこよに、かわいい奴め。でも少し暑いや、まあこよには我慢するとじよ。

「嬉しいからお兄ちゃんの頭撫でてあげる。すぐ寝られるはずだよ」

こよいの細くきれいな手が俺の頭を優しく撫でる。

これはとても気持ち良いかも……すごいこよに、すぐ寝てしまいそうだ。

そんなゴシトハンドを持つ妹により俺は気持ちよく寝るこよが出来た……。

次の朝こよには俺より早く起き、パンを焼いて目玉焼きを作り俺を起こそうとした。

が、俺はそれより少し早く目が覚めた。

イスに座りパンにかじりつく。カリカリとした良い音が鳴った。こよいの焼いた目玉焼きも食べ、カバンを手に取りそして玄関へ。

「明日後日は夏祭りだから覚えておけよ?」

ちなみに咲月さんと同行することになつてゐる。

「うん、覚えてるよ。楽しみだつたもん」

「つたく、良いよな。振り替え休日で

俺も振り替え休日が欲しいわ

「お兄ちゃんが居ないとやりとも楽しくないよ」

嬉しひ事言へてくれるしゃん

「そつか、あれ?」よい、ちょっととせつぺた見せて、はせつこれ二

アーティストのサインを複数枚持つことが出来ます。

「ホント？ 良かつたー 今日学校じゃなくて……って、え！？」

「じゃあな、行ってね」

い 徒 て 些 し 以 い

「お、お兄ちゃん　まつペコキスした」

それからじぎくバーによりせむーハビデアを見つめていた……。

「作者さん作者さん」

「ん? なに? よー」

「どうしてあたしがここに呼ばれてるわけ? ってか今週長くない? 3週間分

ありそ? ……」

「それはね、ただこいつのがやりたかっただけ、ちなみに長させ
気にするな」

「や、そんな理由で俺もここへ来させられたのか?」

「まあまあ有り。 いいじゃないか

「お兄ちゃん大好きーー!」

「うおー! 久々に飛びついてきやがつたなこよー」

「えへへー久々に飛びついてやった」

「あの、一人とも。俺の目の前でイチャつかないでもらえる? すぐ
く嫉妬する」

「そつかー作者さんには15年間、いや今まで彼女できたこと無い
んだっけ?」

「有」……あまつそつこつ事実を叫つな。俺が傷つく

「え? 今までで彼女ゼロ? 」「うーん。」

「こよーー傷口を掘るんじゃなー……もひしに読んで。帰つて良
いからや」

「よこは作者が渡した紙に目を通した。

「えと、感想と評価をお掛けしておつます。お気に入りに入れてな
い方は是非入れてください。」

「はい、良く出来ました」

「あと彼女募集んぐ。」

「んな」と書いてないだろー? 有、「こよこ」を連れて帰つて
あげてやこの鏡とそちらの世界が繋がつてゐるから
「なんとこつ仕様……」

「では感想と評価をお待ちしております。柴わんこでした」

「あたしが読んだ意味無くない?」

「気にするなこよー」

26話（前書き）

えと、感想と評価を心待ちにしております。

そして25話を超えたという事で【第一回人気キャラ投票】を行おうと思います。

詳しく述べは活動報告（8～22）をじっくり見てください。では本編をじっくり

「綾乃ちゃん、どうしてこうなったんだる……？」
「うーん、何でだろ？ 大変だつたね」

少し前にさかのぼる。

善人は綾乃に呼ばれ、指定されたファミレスで「コーヒーにチャレンジして待っていた。

「熱ツ！ 舌が痛いなこれー、よく皆飲めるよな……あつちつち
ふーふーしながら飲み進める善人。毎度毎度顔をしかめては苦い苦
いと愚痴をこぼす。

ついでにコーヒーもこぼした。

「おうわっ！ 危ねえー！」

「賑やかだね、一人で何してるの？」

「ああ、まあコーヒーにチャレンジしようと思つて……とりあえず
座つたら？」

そう言われ綾乃は善人の向側に座つた。

「コーヒーか、あたしはあんまり好きじゃないんだよねー」
それを聞き善人は何故かホツとした。親近感が沸いた、そんな感じ
だ。

「あははー俺もさ、飲んでみたところちよつとキツイかな。やっぱ
オレンジジュースでいいや
オレンジジュースというところにピクッと反応する綾乃。
「オレンジつて、善人かわいいところあるんだねー」

少しからかってみたりして。

「オ、オレンジジュースなめんなよ？！」

意外な一面が発覚した善人。恥ずかしくなり少しの間退場。

しばらくすると帰ってきた。その手にはオレンジジュースが。

「やっぱオレンジジュースかー」

手に持つていてそれを見て綾乃是またからかってみる。

「わ、悪かったな！でも俺ホントにオレンジジュース好きなんだよ」「はいはい、怒らない怒らない。そういうばつちのお姉ちゃん」「

ヒー飲めるんだよね、信じられないよ」

「……そういうや、弟と姉が居るんだつたつけ？」

大好きなオレンジジュースを飲み、善人は少し機嫌が良くなつてい
た。

「うん、お姉ちゃんは大学生で弟は中学生」

「へえ、一回で良いから見てみたいな」

善人はそう呟いた。ただ的好奇心というやつだ。

「うーん……じゃ行こうか」

しばらく考え込んだ綾乃是善人を自宅に招きいれることを決心した
のだった。

「なんか弟君が凄い見てるんだけど……」

「ああ気にしないで良いよ善人」

ファミレスを出る直前に彼氏を自宅へ連れて行くというメールを綾乃は紗希に送った。

そのメールを紗希は早く連れてきてーと返信してきた。

紗希はジッと見ているのだが弟君こと巧に至ってはほぼ睨め付けている状態にある。

「はあ……お姉ちゃんも巧も見つめるだけじゃ 善人が困っちゃうでしょ？」

「うーん、それもそだね。ごめんね善人君」

「ああ、いえいえいいんですよ美人に見つめられるのは男として嬉しいですからね」

あははと笑つて見せる善人。その間に綾乃是巧を部屋から追い出していた。

「よし、邪魔な弟が消えたよー」

「ナイス綾乃」

「良かつたの？追い出して」

気になつてドアを見てみる善人、まあ別に異常は無い。ただ、なんで入っちゃダメなの？という声が聞こえてくるだけだった。

ちなみにそこから紗希による怒涛の質問が善人を待ち受けていたんだとか……。

所変わつて本日もスーパーで買い物をするこよい。だが、いつもと違つて隣には美咲が居た。

「こよいー何か取つてきて欲しいものある？」

「つうん、美咲は何もしなくて良いよー。今日はこよいがおもてなしするんだから」

今日は夕食に美咲を招いていた。

普段のこよいならそんなことは絶対にしない、有二と一人つきりが良いはずだからだ。

しかしこの間の事があり、少し一人つきりが恥ずかしくなってしまったのだった。

美咲つて何が好きなんだろう？まあ無難に豚のしょうが焼きでも作つてみようかなー？

それならお兄ちゃんも喜ぶでしょ。

「とりあえず豚肉だねー」

「確かにあつちのほうにあつたよね」

二人でお話をしながら買い物を済ませていった。

お会計を済ませ店の外へ、寄り道もせずにまっすぐ家へと帰る。

「明日だね、夏祭り。楽しみだよー衛君と一緒に行くんだよねー」
美咲つていつの間に衛君ゲットしたんだろ？あたしキューピッドするつもりだったのに。

「そうだねーあたしは咲月姉ちゃんとお兄ちゃんの3人で行く
うん、3人で仲良くなれば楽しいはずだよ。

「咲月姉ちゃんって？」

「こよいの口から聞こえたお姉ちゃんといつ言葉。姉なんて居たつけて？そう思い美咲は質問した。

「うん。近い未来のあたしの義理のお姉ちゃん

「え？！あれ！？お兄ちゃんはどうしたのよ！」

今までお兄ちゃんがお兄ちゃんがとべッタリだつたこよいだけあって美咲はその返事に驚きを隠せない。

「うーん、咲月姉ちゃんに取られるんだつたら別に良いんだよ、それ以外の人だとどうかこここじやないとこりに行つちゃうし」

「こよい……」

どこか寂しそうな顔をすることよいを見て美咲は掛ける声を見出せなかつた。

「さーそろそろ着くよーー！」よいは腕によりをかけて作つちゃうからねーー！」

「…………」

元気につけてくるこよいを見て美咲は何も言えなかつた。元気な顔よりさつき見た寂しそうな顔を思い出してしまつ……。そしてせめて悲しそうな顔を見せないよとにと心に決めたのだった。

美咲はちよつとこよいの家の前辺りに一人の人物がいることに気づいた。

「こよい？誰か来てるよ？」

そして美咲は家の前に2人のお客さんが居る事をこよいに伝えた。

確かに家の前には2人の客人が居た。

「すみません、誰か居ませんかー？」

女がチャイムを鳴らしてはそう言っていた。

それを見たこよいは居ても経つても居られなくなつた。

「あの人……！ 一体何をしに来たつて 」

こよいは買い物袋を落とし、今にも走り出そうとしていた。でも、バレたらどうしようと心の隅ではそう思つていた。しかし、そんな感情よりもそれに勝る感情に流されていつてしまつ。

こよいの様子なんか変じやない？ そう感じた美咲はこよいの腕を掴んだ。

「どうしたの……？ 買い物袋まで落として……変じやない？ おかしいよ」

「離して、美咲」

そう言われた美咲は思わずこよいを掴んだその手を離してしまつた。そして歩き出すこよい。俯いたまま徐々に距離を縮めていく。やつぱり止めたほうが……。明らかにただ事じやないと薄々美咲は感じ始めていた。

しかし、こよいの背中を見て、美咲は止めるといつ行動には出られなかつた。

ただこの状況を見守る事しか出来なかつた。

こよいが徐々に距離を詰めていく、尚も続くインターフォンと呼びかけ。

もう少しでこよいが一人に接触するかといつその時……それまで開かなかつたドアが開いた。

「「」みんなさー、お風呂入つててへ。でへ~」用件は何ですか?」
「あー? あなたはひちひら様でしょ~う? 」「」平沢さんの家ですよね?」
確かめるように女が尋ねる。

「はー、ここは平沢家ですが……それが何か?」

「あ、あなたのお名前を聞いてもよろしいでしょ~うか?」

もしかして間違えた? そう思い、次に名前を尋ねる。

「え? 名前ですか? あたしの名前は【平沢咲月】ですか?」
中から出てきた彼女はそう叫びついた。

「「んにちは~」」「
「おー咲月ちゃんが来てくれたか」
「おお、この方が作者さん。小さくてかわ
「それ以上言うな……」
「あははっ、そういうえば人気投票が始まるって聞いたんだけどホン
ト?」
「ん? あーホントだよ、予想では咲月さんとこよいで人気争いだね
「え! ? ホント? !」
「あ、あくまで予想だから…… あ、でもわざわざなく紗希さんも来る
かなー?」
「ふーん、やっぱ男性陣は票取りにくいがー」
「まあ、この作品読んでいる人が一体どちらが多いのかさえ分から
ないんだし?」
女性なのか男性なのか?
まあ難しいってことね~ まあアレを渡してくださいな~
「ああ、アレ…… はいこれ

「感想、評価待つてまーす。あと人気投票もお願いします。メツセ
ージボックスの方へ投票する形になっています。詳しい事は活動報
告を読んでください」
「ありがと」
「それじゃ、バイバイ(撫で撫で)」
「くそ…… 身長が少し高いからってこんなことしゃがつて…… あり
がとう! やれこました! (実は嬉しき)」

27話（前書き）

突然の更新です。いつもより短いですが読んでみてください。

感想や評価を待っています。どうかよろしくお願ひします。

では気になる27話は からです。

「え？ 平沢……咲月さん？」

「はい！ 平沢咲月です！」

なんだか嬉しそうにそう答える咲月。対して女は困ったような表情を浮かべ

「おかしいわ、ここ（この地区）で平沢といったらあの子達しかいなかつたんじゃ」

そう呟いた。それを聞いた咲月は間を空けないよ

「誰かを探しているんですか？」

と、聞いた。

「え、ええ。平沢によいさんと平沢有一さんを探していくまして、聞いた話によるところだと聞いたものですから……」

「そうだったんですか、人探しは大変でしょ？ けど頑張ってくださいね？ ジャ少し用があるのであたしはこれで」

咲月はやや強引に話を切り、家へと戻つていった。

でも、用があるのは本当だ。そもそも聞こえてくるころだ有一のやめてー！ いやあああ！ というヘルプホールが。もう何があつたかはご想像に任せておこう。

キーワードはお風呂だ。

咲月が戻つて置き去りにされた一人。一つため息をつくと女は「う

呟いた。

「……はああの子が咲月さんね。結構やり手ですね……

あらあなた？ どうかしたんですか？」

どこか違つ場所を見ていた旦那にそう問いかける。

彼はこよいを見つけていた。こよいが自分の子供だという事も分かっていた。

そして彼はこよいの姿が妻に見えないよう体で遮り、妻の肩に手をやり

「いや、何でもない。まあ帰ろつ、しのぶ

そう言つてその場を去つていつた。

何故彼はこよいを見つけたのにそれを妻に伝えなかつたのか。ましてやこよいが見つからぬようにしていた。一体これははどうこいつことなのだろうか……？

彼は引き取りに来たのではなかつたのだろうか……？

「こよい、大丈夫？」

「うん……」

何で？今、あたしが見えないようには帰つたよね？明らかにあの距離からだから顔が割れちゃうし、でもああしてくれなかつたら今頃どうなつてたんだろ、あたしつたらバカみたい。

「美咲、行こつか。今ちょうど咲月姉ちゃん来てるみたいだし賑やかになるよ～？」

「さつき出てきたのが咲月姉ちゃん？」

「うん、早く行こー咲月姉ちゃんとってもいい人だから。たまに何

考えるか分からぬことあるけど」

ただいまーと咲月姉ちやんが「よこちやんおつかえりーー。」つてすぐに返事してくれた。

その後、この子はこよいちゃんのお友達?つて聞いてきて、こよいは、こよいの親友だよーー!つて答えて、美咲が初めましてと挨拶をしてから靴を脱いだ。今日は楽しくなりそう。

27話（後書き）

Q・何故短いのにあげよつとした？ A・シリアルもビヨと楽しい
場面を混ぜたくなかった。別々に読んでもらおうと思つた。

はい、そういうわけで柴わんこです。

今回の後書きはひょんなメッセージが送られてきたのでそれに答え
ますよー。

ええ、質問が来たんですよ。

といつわけで質問はこれです。

Q・これってなんかのパクリ？

A・オリジナルです。パクっては無いです。つてかパクルんならも
つと面白いでしょうに（笑）

こんな質問が来ちゃいましたよ。なんかキャラ名と性格が似てるつ
て事でしたが思い当たる節が無いんですね。ちよつと怖かつたで
すよ。

まあ少し怖い思いをしたんですが今回の件があつたんでこの作品に
対する質問募集してみよつかと思います。

質問のほうはメッセージボックスにでも放り込んでおいてください。
咲月の靴箱と違つて大量にあるわけじゃないから迅速に対応します
よ。

では感想と評価の方と人気投票の方をよろしくお願ひします。
読んでくださつている読者様に感謝！ではまたいつか。

まさかの連日投稿です。何であげたんでしょう。土曜の分無くな
るつて（笑）

感想を送ってください。あと評価を付けてない方は付けてください。
正直にとことつことで良いです。

では乐しく（^ ^）本編は からです

た、大変な目に遭つた……。（キーワードはお風呂）咲月さん強引すぎだよ。何故かこういうときの力強いし。
……ん？誰か来てるのかな？賑やかだな。

「お密さんでも居る？」

「あつお兄ちゃん！たつだいまー！」

いつもの様にこよいが俺のお腹田掛けて飛んでくる。そんなことお構いなしに

辺りを見渡すと女の子が居た。……たしか善人の妹ちゃんだったかな？記憶が曖昧だけビ。

「今日はね、美咲ちゃんが来ててくれたんだよ？」こよいが呼んだの「俺の背中に腕を回しそのまま顔を上げ、多少上目遣いでこよいはそう言つた。

上目遣い得意だなーこよい、俺が他人だつたら落ちてるよ。

俺には咲月さんつて言う勿体無いくらいの彼女（嫁？）がいるから大丈夫なんだけど。

いや、嘘ですごめんなさい。妹にトキメク時あります、咲月さんゴメンナサイ。

……んでもつてその咲月さんが人差し指を下唇に当ててジッとこちらを見つめている。

何だ？何なんだ？俺は知つていて、ジッと見ているときは大体困らせるような事を考えている事を。この間は耳にふう、と風を送り込んできた。ホントにあれは勘弁して欲しい。

つて美咲ちゃんが空氣だ、イケないイケない。

「やつぱり善人の妹ちゃんだつたか、俺の記憶力も捨てたもんじゃないな」

「あははーーーんばんは、いつももバカでアホで救いようの無い大バカ野郎『お兄ちゃん』がお世話になつています」

二口二口顔でそう言われた。笑うしかないよなこれ。

つてか俺、こよにこんな風に言われたらちょっと数日引きこもるかも。

「あははー、凄い言われようだな善人の奴」

そう言つた後、こよには晩御飯の準備するね、と台所へ向かつ。咲月さんも何か手伝う、と言つて同じく台所へ。

美咲ちゃんもじやああたしも、と言つたがこよに止められた。今日はおもてなしされるんだから何もせずに待つて欲しいとのこと。

美咲ちゃんと高校の事や中学の事を話した。同じ中学だつたから先生の話になるとどうも懐かしかつた。中には結婚した先生も居てちょっと感動した。結婚というキーワードを聞いて咲月さんがなにやら言つていたけど……俺には関係ない。うん、まだ早いと思つんだ。もつひよこ深ことじるまで掘るべきだったか?そんなことを考えてました。

いるとあのうわさが気になつた。

「善人つて彼女で来たつてうわさがあるんだけど……」

「あれですか。ホントです、ナンパされたんだぜー?つて血運げに言つてきましたよ」

マジか、どんな子なんだろ?善人の彼女つて。

それにしても以外だな、アイツをナンパするなんて。

「そんな」と思つていたらあちらから質問が来た。

「咲月さんつて有二さんの彼女さんなんですか?」

「ああ、えつとね」

「つうん、有ちゃんはあたしの嫁!じゃなくてあたしの旦那さん!」
何を急いで言つてみたんだ、しかも嫁つて。俺、女じやねーか【
は俺の嫁!】つてのを意識してないか?気のせいか。いや気のせ
いじやないな、うん。

「お嫁さんだつたんですねー」

「おう、そう……なんだよ、あれ? 大体ここじや『はあ! つ嫁! ?
つて帰つてくるんだけど』

「ああ、いえ、うちのバカが魚みたいな目をして『姫川咲月は有二
の嫁、平沢有二は咲月さんの嫁……』つて帰つてきたときがあつて、
まあ相当のショックを受けないとそとはならないんですけど、そう
いうわけであまり驚きませんでした」

ああ、そういうわけね、つて善人は重症だつたんだなあの時。懐か
しいな、あれ以来咲月さんの靴箱は平和になつたんだよね。いつも
あふれてたみたいだけど、あれ一体どうやつて入れてるんだろう?手
で押さえながら閉めようとしても閉める寸前になれば落ちてしまつ。
今世紀最大の謎かも、……そりやないか。

「お兄ちゃん出来たよーーーお皿に盛つてあるから運ぶのだけ手伝つてーー！」

「おう！分かつた。じゃ、ちょっと行つて来るね」

俺は席を立ち台所へ、そこに着くと豚の焼いたものがあった。多分しうが焼きか何かだな。

それにしても今日は野菜すげーなあい。見栄えが凄い、もしかして咲月さんがやつた？

だとしたら凄いな、こんな奥さんもられるなんて嬉しいにも程がある。

少し感動しながらテーブルの方にお皿を運ぶ、美咲ちゃんもそれを見た瞬間、おお……！と

小さく感激していた。ちなみに俺が運んでいる間にこよいまほぼ全ての片付けをしていた。

もう後は食べ終わった食器を洗うだけ。そしてこよいまほぼからへ来た、俺は適当に座つた。

何処でも良いんだから、座つた瞬間。そう瞬間、隣に咲月さんが漫画でシユツ、とでも音が付け加えられそうな速度で俺の隣に座つた。仕方なくあははと笑つている間にこよいまは美咲ちゃんの隣に座つた。テーブルは正方形をグッと横に引き伸ばしたような長方形型のテーブルだ。

ちなみにそれなりに縦の長さもある程だ。

俺は美咲ちゃんの向かい側に座つていた。そこまで適当というわけでもなかつたかな？

んで隣に咲月さん、その向かい側にこよいが位置を陣取り、3人で

手を合わせる

それを見て美咲ちゃんも合掌し首で、セーのヒタイングを取り

「いただき」

「

「「「あつ水！」」

「いただきますちゃうんかい！」

と忘れていた水の存在を思い出す。美咲ちゃん、いいツツコウだ。ほら咲月さんがグッジョブと親指を立てている。

水から一番近かった咲月さんがそれを取り出し、俺と一緒に2つずつコップを持ってきた。

「騙された！まんまと引っかかったー悔しいなあこれ

「あははっおつかしー！引っかかった引っかかった！」

こよいがとても楽しそうに笑い始める。ついこの間涙を流していたとは思えないほどこよいは笑っていた。

「いやや、実はあたしもこの一人に初めて夕食に招かれたとき引っ掛けられたんだよ？」

そう、咲月さんも引っかかった。あの時は俺が笑いすぎて後で恥ずかしいセリフを言わされた。

それから隣に引っ掛けで「ごめんねと誤ってから楽しく夕食を楽しんだ。

さあ、明日は祭りだ、もつと楽しくなるに違いない……浴衣の咲月さん、いいわあー楽しみじやん？

夕食も食べ終えた俺たちは解散という事で玄関に集合。まあ解散つ

ても人数半分になるだけなんだけビ。

「今日は誘つていただきありがとうございました。出来ればまたこうしてお呼ばれになりたいです」
うわあ、礼儀正しいな美咲ちゃん。善人兄がんばれよ、お前の妹すげえぞ。

「じゃあねーまたね」

「え……咲月さん?」

え?咲月さんは見送られる側であつてじゃあねを美咲ちゃんに言つては状況からしておかしい。

「ん?どうしたの有りません」

どうしたも何もおかしいでしょ咲月さん。

「いや、帰らないの?自宅?」

まだ残るつもり?結構夜遅いからもう帰つたほうが良いこと思つんだけど。

そう質問した俺に対してもない返答が帰つてきた。

「うん、帰らないの。ここに居るの、つてか家売つちゃつた」
えへつと笑つて見せる咲月さん。結構凄い事言つちゃつてますけど

……。

いつてまさかの同居生活が始つた……。

是非とも、評価を付けてください、感想を送つてください。
ではまた今度……。

29話（前書き）

今回でこの話はラストです。ここまで読んでくださった方、どうもありがとうございました。評価をされていない方は評価をしてから去ることを願います。

「有ちゃん早くーー！」

そう言われ俺は急いで靴を履き、ドアを開ける。

後ろからサンダルを履く咲月さんとこよいが続く。
二人とも浴衣を着ている、今田は夏祭りの田だ。

咲月さんは黒をベースとした紫の花を散りばめた感じの浴衣でこよいは白をベースとした水の流れを感じさせるような青が彩られている感じだ。

これはレンタルしたもので、選んだのは咲月さん。

近所の「デパート」で入手したらしい。

「じゃ、出発しようか」

「うんーー！」

こよいで夏祭りは始まりを告げた。

賑わう会場、漂う匂い、声を張り上げてお客を呼ぶ店員さん。

これぞ祭りって感じに盛り上がっている参加者を横目に俺たちはひたすら歩く。

こよいが前で俺と咲月さんは後ろ。こよいの行きたいところと一緒に一緒に行くということにしている。ちなみに俺の左手は密かに咲月さんの右手を握っている。

正直にそこを見られたらいつもかわいがっておいて

射的してみようよー」と「よいが言った。俺はやつてみるかー」と言い
お金を払って銃口にコルクを詰めて狙いを定める。こよーいが狙つて
いるのは熊のぬいぐるみ。正直ビクともしなさそうだ。
なので撃つた後に撃つて熊に2連撃を与える予定。後ろでは咲月さ
んががんばれーとはしゃいでいる。はしゃぐ咲月さんは中々見られ
ない、そしてはしゃぐ姿が目に留まりあのかわいい子誰?と口々に
呴いているのが俺の耳まで聞こえてきた。

パン！ どこよりが撃つ、俺もすかさずパン！ と撃つてみる。結果は残念だった。

ああー後もう一回か。まあもう一回同じようこやつてみるか。そう思つていふときだつた。

「ねえ、お願ひ。あの熊さん取るの手伝ってくれない?」

それを言われた男たちは手伝わせてください！とそれぞれに銃を持

そしてこよいがパーン！ 続けて俺、それから男達が順番に撃つた。
なんといふことでしょう。熊さんノックダウン！ そしてそれを受け
取ることよ。

こよには嬉しそうにこちらに熊わんを見せてくる。俺は銃を置き、よかつたなこよ、と一言。

役目を終えた男たちは特別欲しいものはないし、でも後一発あるし……でも結局商品はいらないからと横で座っていたおじさんの輝く

頭部へと発砲。するとあらまノックダウン、良かつたね、大物じゃないか。

やれやれ一通り回り終えてしまった。熊を手に入れて急に田代が無くなつたのか「よい」はもう疲れ果てていた。

カキ氷を食べつつ花火の時間まで待つ。

俺とこよいはメロンで咲月さんはイチゴだった。

「有ちゃんはいあーん、これ食べ比べだから勘違いしないでよ?」「分かつてゐつて……イチゴも美味しい」
にしてもイチゴつて買つにくいんだよなー。そここの所女子つて得していると思う。

……ん。口を開けてスタンバイしてゐる……やれと言つ事か。

「ほら、俺のも食べてみな

「ん……メロンいい感じだね、あたしメロン食べた事なかつたらなー」

そうなんだ。ああ、例の如くこよいがじーつと見ている、残念だつたな、こよい。

「お兄ちゃん、こよいともやつて、食べ比べ

「こよいと俺同じじやん、お兄ちゃんと一緒にいって言つたのはこよだぞ?」

「う、と悔しがる」。熊さんの手を操りパンチを繰り出していく。
る。

「「よ、ちゃんとちょっと失敗だつたね」

咲円さんがそう励ましていた。

所々に設置してあるスピーカーからお知らせが入る。

『ええー只今から打ち上げ花火を行いますので上空に注意ください
尚、只今射の方ですが事情がありまして一時的に営業しておりま
せんので』「～承ぐだわ～』

ああ、おじさん……。

「ねえ有ちゃん、ちよつと良い?」

咲円さんがそう言つてきた。何?と返すと咲円さんは立上がりつて
俺の手を引っ張る。

「「よい、少し咲円さんと話があるから」」待つて。後で膝
枕してやるから」

「おおおー膝枕ーーうふーー」」待つて

咲円さんに連れ出された俺は質問する。

「どうしたの?」

それに対しても咲円さんは重要な話がある、と返事をした。

何だろ?と思つてみると咲円さんは口元を俺の耳に近づけつつ語つ
た。

「あれや、あたしと結婚してくれる?」

やつぱり咲月さんは口元を耳から離した。そして恥ずかしそうに下を向いた。

やつぱり恥ずかしがる事あるんだね、可愛いかも。

そして俺は返事をした。

「…………う、うん!改めてこれからもよろしくね有ちゃん!」

「当たり前だ、ってか昔から結婚する事になつてたんじやなかつたっけ?」

「えへへ、まあね……つー」

咲月さんは言葉を失つた。俺は咲月さんを抱きしめた、何故だか分からぬが抱きしめたくなつた。

「ゆ、有ちゃん……」

「つたぐ、先にプロポーズする奴がいるかよ」

「『めんね。へへっ、有ちゃんが他の女に取られたくないから…』

…

抱きしめ寄せ合つ一人の体を優しく照らす光は夜空を彩り夢く散つていつた。

第一部終わり。

第2部はいつになるか分かりません長期にわたって連載を休止する
と思います。

次の作品が来週から投稿するつもりなのでそちらへ移つて頂けると
うれしいです。

まあこれを越す作品は当分書けないでしょうね……。

「J愛読ありがとうございます。またこの作品で会いたいことを願つ
ています。

それまで自分の間次の作品で会いましょう」ということで失礼します。

30話（前書き）

はあー、長い休みを取りましたね～。

鈍つてしまふがない。どんな世界観だったか勘が戻らない。
それでも頑張るんで見捨てないでください。

では少し成長した彼らのストーリーは本編からです。

「有ちゃん起きて、朝だよ」
そう言われ、俺は目が覚めた。俺を起こすのは長くあれいでくせの
ない黒髪の少女だった。

……まあ咲月さんなんだけど。わ、咲月さんが直接俺にモーニン
グ「ホールをしてくれた。

隣では、んんっ……とじょじょが寝返りをうつていた。

ひそひそと咲月さんは朝一にはん出来たから食べて、と囁いた。

階段を降り、テーブルに着く。良い匂いがする、味噌汁かな?
まだボーッとする頭を冷水を飲みながら覚ましていく。

「はいどうも、」はんに玉玉焼きに味噌汁の二つだよ
「あ、ありがと……は、箸が無いんですけどこにあるんだっけ?」
「はいあーん

うん。久々に恥ずかしい事になつたよ、途中まで最高だつたんだけど
どなあ。

でもまあこれが俺の嫁です。この間決まりました。
こよいの事ですが、とりあえず一緒に住むことに話はまとまりまし
た。

咲月さんのお金はとてもなく大きかった。家売っちゃつただけはあるわ。

ホントやる事たまに凄いよね。

今俺は高校2年で「じょい」が高校1年。咲月さんと樂しく生活を送っている。
んでもつて新しい後輩が入つてきたりして今よつやく落ち着いてきたところだ。

あ、「じょい」が起きて來た。

「おせよひじょい」

「あーおせよひお兄ちゃん……お姉ちゃんもつ作ったのか、ふあーあ」

そつそつ、「じょい」はこの一年で咲月さんの事を咲月姉ちゃんつて呼んだりお姉ちゃんつて呼んだりつて呼び方のレパートリーが増えた。

「じょいちゃんもはいこれ」

「ありがと」

「じょい」で一つ今の現状を伝えておこうかと思ひ。

まず卒業式と入学式があつたので俺の周りの人人が変わつた。

まず善人、あいつは「じの」一年で大きく変わつた。

彼女だつた綾乃さんが県外の大学へ行つてしまつた。

彼女から別れようか、と言われ善人はショックを受け数日不登校になつた。

彼女なりの愛だったのかな？俺はそう考えている。

そして善人はようやく登校してきたと思つたら大きくイメチェンをして来やがつた。

ムカつくほどかっこよくなりやがつた。髪型変えるだけでこんなに変わるかよ……でもこの変化を簡単に言うとヘタレからイケメンつて所なんだよね。

でも、中身が変わらなかつたからこいつは残念なイケメンとなつてしまつたのだつた……。

んでその妹の美咲ちゃんは俺たちとは違つ高校へ進学、少し良いところへ行つたらしい。

そのため詳細は不明。

ちなみに詩織ちゃんも同じ高校に行つたらしい。

他は……よく分からない。白川の3人については情報不足。綾乃さんが県外に行つた事以外まったく分からない。

次にこよい。こよいは親友と離れ、少し寂しそうだつた。しかし、時間がそれを解決していつた。

高校入りたては今まで仲が良かつたやつが居たり居なかつたり正直不安ばかりだらう。

でもなんとかこよいは乗り切つたようで、安心した。

最後に咲月さん。咲月さんは家を売つて大金を手に家へやつて來た。

そして夏祭りの夜、咲月さんは俺にプロポーズをした。

俺の答えはYES、俺がその日から俺と咲月さんは結婚を約束した仲となりそれから咲月さんは俺の嫁となつた。まさかあつちからプロポーズされるとは思わなかつた。

入学式後、咲月さんは後輩からモテモテで、毎日のように告白を受けていたりどこかに呼び出されている。毎度の如く、あたし婚約者いるからといづ言葉を残してその場を去るらしい。

そしてフラれた生徒は『姫川親衛隊』という怪しげなグループに勧誘され入隊するらしく、その後毎度の如くイベントには現れ咲月さんの言うとおりに動くといつわゆる【奴隸】となつてしまつ。ちなみにリレーで咲月さんと競つてゐる者あらば3秒後にはダイナミックに転んでゐる。ちなみに俺は標的にはならいらしい。ありがたいことだ、ちなみに理由は【そんなことしたら姫に殺される】との事。ここで言う姫とは咲月さんの事、そう姫川の姫だ。

さてもうこれ以上言つ事はないだらう。あ、俺の紹介がまだだつたな。

サクサク説明しようか、あれから俺は変わつたかといわれると思うでもない。あの頃の俺と一緒に。大きく違うのは嫁がいる事くらいだな、うん。あ！そりそり！身長伸びたんだよ！少しだけど……。

それにして……2年生になつたところに一年の頃となんら変わりが無いとはどつこつことだよ。

30話（後書き）

調子が戻らない柴わんこです。どんな感じで書いてたんだっけ？つて別ブラウザでコレを読みながら「あーなるほど」とか呟きつつ書き溜めてきました。

とはいっても溜めたところには少ないですがねー（笑）

ではまた近いうちに。出来れば来週に。

感想、評価ワクワクしながら待っています。それでは失礼します。

31話（前書き）

だんだん長期連載になつてきましたね。初めはどうなる事やらと思つていましたねー。いや、元々この話はこよいが主人公で兄の有二が受けのラブコメでそこに咲月という第3者が割り込んできて……って設定だったんですよ。

秘話としてここに記しますね。では続きを……。

「起きてお兄ちやん、朝だよ？ 遅刻するよー？……でもじょんじょんはまほまほと隣で寝てたいんだけどなあ……」

「……そんな」と俺が許さない、ひやんと学校は行つておけ

「うわーヶチ、お兄ちやん大好き」

「…………」

まだボーッとしている顔をビビリか覚まわせようと洗面所に行き水を流し顔を洗う。

「はっくしょんー」

ちゅうとやり過ぎたか……。冷たい冷たい、そつ脱つてこよひいが横からタオルを差し出してくれた。

ありがと、とそれを受け取るといよいよえへへ、と微笑んだ。

「朝食出来るから早く姉ちやんとこ行つてね、こよには学校の支度をしてくるから」

りょーかい、と顔を拭きながら答え、タオルをかごに投げ入れた俺は今言われたとおり、テーブルに足を運ぶ、味噌汁のいい匂いがす

る。具は何だろ?豆腐とか?ワカメとか、大根なんかも好きだな。

色々な予想をしつつ俺はテーブルに座った。そしてまあまあ気になつていた具を覗き込んでみる。

「おおー流石咲月さん、俺の好きなもの分かつてるだけあるわ

」そう彼女に言つた。

すると彼女は

「だつて有ちゃんのお嫁さんだもん、コレくらい当たり前だよ」と、お玉片手に最近大きくなつたらしいその胸を張つてそう答えた。咲月さんもエプロンを外し、いつもの場所に仕舞うと机からへ戻つてきて座つている俺の頭をポンと叩いて隣に座つた。

「「」よいちゃんまだかな?」

「学校の支度だつてさ、つたく高校1年にもなつて朝用意するかよ」

「まあまあそんなこと言わずにさあ、おとなしく待つていよ」
そう言つと咲月さんは俺の肩に頭を預け、疲れたよと呟いた。
3人分作るのは大変だらう、そしてその分早く起きないといけない
から更に大変だらうな。
しかも弁当も3人分作つてる訳だし。

いつも「へりつさん」と寄りかかる頭をやさしく撫でてやると、咲月

さんは「ううん、いいんだよ。あたしが選んだ道なんだし。と田を開いて小さく答えた。

少しだけとても静かで心地の良い時間を感じた2人は、「うせなうこのまま時間が止まってくれたらどんなに嬉しいかとそう思っていた。

しかし良い時間といつものすぐ終わってしまう。ダッシュと階段をおつるこよこの足音で咲月はその田を開いた。

「はあ、起きなきやだねー……」

「妻は大変だ、頑張つて咲月さん」

「うん、頑張るよ……だから、さ……キ、キス」

「うひーー！そこの2人！」よいの前でイチャイチャしないージョラシー感じちゃうつー！」

「うぬせこやつだなあ」

「お兄ちゃんがいけないんだもんー……！」よいといつものがありながらお兄ちゃんは

「いただきまーす」

「ふふつ、あたしもいただきまーす」

「無視するなーーもひーーいただきまーす」

「の1年で少しこよいに対する態度が変わったような気がする。多分、咲月さんを意識しているからだと思つ。

まあ、早いとこの兄離れをしてもらい所なんだけど……。

午前中のだるい授業が終わった。それにしても鬱だ、午後も授業があるなんて……。

「有ちゃん！弁当食べよー！」

朝とは違つてすっかり回復した咲月さん。そんな咲月さんを見るとこつちまで元気になつてしまつ、不思議なものだ。

「いつも弁当ありがとな、じゃ……」

2人で手を合わせて。

「「いただきまーす」」

敷き詰められたレタスの上に卵焼きやたこさんウインナー、そしてハンバーグにサラダがついてお値段プライスレスな俺にとって世界一の弁当を食べ進めていく。

「あーんする？」

「え、しないよ」

「そつかーじゃあ、あーんしようつか

「日本語通じてる?……ングッ」

ハンバーグを口に入れられた俺は嬉し恥ずかしながらよく噛んで飲み込む。

「おいしい？」

首を少し傾げて咲月さんが質問する。

「うん、おいしい。流石俺の嫁ーははつ……あ」

それを言つた瞬間、この空間に存在する男の嫉妬のオーラがその空間を包み込むのが分かつた。よつた気がした。ちょっと調子に乗つたかな……？

そんな緊迫している空氣の中、咲月さんはそれをもうともせず、次のおかげをスタンバイさせている。俺はそれを見て、あはは、とどうしたものかなあと困つていた。

そんな時、一人の男が堂々とこちらへ近づき俺に声を掛けってきた。この空氣の中なのに、だ。

「おーい有り、いい所邪魔して悪いけど宿題をさせてくれねえか？」

300円やるから

俺がその声に振り向いてみると善人が俺に手を合わせていた。

宿題をさせ代わりに300円か、即決価格だな。

「おう、いいぞ。しかし前払いな、こういうところじゃんと取り立てるからな」

「あいあい、ほら300円。金はたくさんあるからな、助かるぜ」

100円玉を確かに3つ貰い受けたと俺は机からノートを取り出した。そのノートには

宿題となつた問題とそれに対する俺の回答が書き綴られてる。それを渡すとあざあーすとひとこと言って自分の席へと善人は帰つて行つた。

綾乃さんが大学へ行つてしまつたときは分かりやすく落ち込んでいた。

ちなみにコイツは綾乃さんとたくさんデートをするためにがんばつてバイトをしていた。

さつき言つていた、金はたくさんあるからな。といつのはそれで手に入れた給料の事だろつ。

用を済ますと食べていらない弁当を食べてしまおうと箸を片手に弁当箱をもう片手に持ち咲月さんのほうを向く……すると待つてましたといわんばかりの笑顔で、あーんが待つていた。

31話（後書き）

調子が戻ってきたあー！こんなカンジでしたよね、いつもいつも。

それではこの調子を保ちつつ連載していくつもり思います。

毎回毎回、ほとんど進展も無い日常を繰り返す彼らですがどうか温かく見守り合ってください。

感想、評価、受け付けています。それではこの辺で失礼します。

32話（前書き）

えと、次回から【咲月過去編】やります。今思いつきました（笑）

主人公はもちろん咲月です。

咲月がまだこの地へ引っ越していく前、咲月の過去に何があったのか。

咲月がこの地へ引っ越してきた理由が明らかに……。

今思いついたのでどんなラストになるんでしょうか。
笑い事じゃないのに笑えてきちゃいますね。参った参った。

ではいつもの本編をどうぞ。

夕方のまだ明るい時間に、2人で手を繋ぎ帰つて いたある日の帰り道に、俺はその瞬間を見た。

2人の男女が曲がり角のあたりで何かをして いるのを見た。やけに見覚えがあるあのシルエットは……まさか？いや、そんな……あ、そのまさかだ。

「こよいちゃん、あのさ。もし良かつたら俺と」

「こめんなさいっ！」

「即答！？」

女が告白を受け、男が速攻でフランched。少し声がこちらまで届いており、少し吹き出してしまつた。しかし、聞き捨てならぬ召前、そしてシルエット。そしてなによりこの声。

頭の中でヒントが重なり合ひ、やがてひとつ 答えが出てきた。あの2人だな。俺は確信した。

おそらく女のほうはこよいだ、なんかそう思つて いるところにしか見えなくなつてきた。……こちらから見た限り、愛の告白を受け ていたのだろう。そして、速攻で断つたと。なぜ断つたかは……は あ。

それにしても仕方ないよな、告白を受けていても。俺は驚かないぞ、こよいかわいいもん、世界で一番かわいい妹だし。誰がなんと言あうとこよいは世界で一番かわいい妹だ。

そんな妹に誰かが告白するのはとても良い事だ、出来れば引き取つて欲しいくらいだ。

でもなー ブラコンなんだよ、すまないな。とは言わないぞ……

【善人】 よ。

お前以外の男なら俺は許す。でもお前となると俺は許さない。綾乃さんの気持ちも知らないでこいつは……！

「こら善人！ あたしのこよこちゃんに何したのー？…… あたしのこよこちゃんに何したの？」

何したの？ と怪しむかのよう、咲月さんは善人に近づいていった。ちなみに尚もその手は繋いだままだった。

一方、善人の隣にいるこよいは俺を見つけて、機嫌になつた。

よつ、こよい。今帰りか？ そう聞くとこよいはうふ、今帰宅途中。と答えた。

「でね、美咲のお兄ちやんから告白受けやったーー もうやん断つたけどーー！」

天使のスマイルでそう言こかけて來た。相手からするとどんなに辛いことか……。

俺はそつか、と言しながらこよいの頭を撫でてやつた。わしゃわしゃと撫でるとえへへーとこよいは頬を赤く染めた。

しかし、それはそれはとてもいい選択をしたな、こよい。善人なん

かと付き合つてたら俺が承知しない。

でもな少し気になることがあるんだ。

……そもそも、お前の脳内の選択肢には、『『めんなさい』の一択しか用意されてないんじゃないか？

【強制的に『めんなさい』が出てくるつてわけじゃないよな？】 R P
Gじゃプレイヤーがびっくりだぜ？
無限ループよりタチが悪いもんな。

帰りに俺を見つけたことがそんなに嬉しかったのかといつぽじこよ
いはニコニコしていた。
そして頬を赤くして腕にまで抱きついてきて、じーーーっとこちらを見
ては微笑みかけてきた。

正直なところ、俺を見ずに前を見て欲しかつた。ゴツンと電柱ぶつ
かってたし……。しかもそのあと鼻から血を流しながらでもこっち
を見て、それでもえへへと微笑む始末。新手のホラーですか。

一方咲月さんは善人に帰るよう、いや、帰れと説得。

そして善人は無理だつたかーとか愚痴りながらも血色へ帰つていつた。

それから少し不機嫌な咲月さんが「さうへ来て

「つたぐ、こよなちゃんはあたしの嫁なんだから……」

と、凄いことを言つた。しかし、この『あたしの嫁』発言は既に聞き慣れた気がしないでもない。

オレンジ色に照らされる坂をよいしょよいしょで登つていく。

そのよいしょが聞こえてしまつたのか、老けたねー。と咲月さんは笑われてしまつた。これでもまだ16歳……のはずだ。

そんな時だつた。

「有ちゃん、あたし最近思つことがあるんだよね~」

急に咲月さんが話してきた。こよなもいつのまにか咲月さんに耳を傾けている。

ん? 何? と聞き出すかのように聞いてみた、すると

「もし、去年も、有ちゃんが親御さんと一緒に暮らすことになつたとしたらあたしどうしてたかな? つて。ほら、家だつて売つちやつたわけだし?」

なぜか昨日の事みたいに覚えているあの一件についての話が出てき

た。

「ホント、咲月さんと離れたくない一心だつたなあ……」「

この話、笑い話……なのだがちょっと、もしも、ifの」とを考えると咲月さん相当のピンチだったことが分かり始めたりして少し胸が苦しくなる事がある。

「ホント、有りちゃんが遠くに行かなくて良かった」

そう言うと咲月さんは隣にいる俺のほうへにキスをした。

俺は当然の「」とく、かあああつと顔が赤くなつた。不意打ちで「」ひじやない、これヤバイ。

せりに俺の隣では姉ちゃんたなにせりひぬのへーーといりがビックツ
していた。

そして、『よいだつて！』と咳き始めて俺は『よいの頭を掴み、ホーラドした。うううううう、と『よい』が唸つていい、でも前を見て歩いてもらわないとな、』『ちが困っちゃうからな。つたく、電柱が怖いっての。

坂を登りきり、はあーとため息を付いた俺を横目にへへへと笑つた。咲月さんは思い出を振り返るかのようにこう言った。

「あいつと……あたしの話でもしゃべるか」

ああー何といつか。前書きであんなこと言つただけにただいまものすく反省しております（笑）でもがんばります！なのでこの作品を見捨てないでやってください。では、来週をお楽しみに。

過去編突入です、3回にわたって完結させます。ちなみに土曜（今回）、火曜、金曜の3つで終わらせます。なぜこんなに急ぐのかといつと、先が気にならないからです。また来週って言って、同じ内容の続きをを見せられても新鮮さは落ちるし、ましてや内容が酷いと更にマイナス効果だからです。

だから一気に出します。初めて闘う事になる短編ですがどうかよろしくおねがいします。出来れば『必ず』感想が欲しいです。いつもとは違う事をするので余計に面白かったか、ダメではないかが気になっています。どうかよろしくお願いします。

「咲月、今度の日曜映画でも見に行くか?」

お父さんがあたしに新聞を読みながらソリソリと来て来た。

「ホント? なに見に行くの?」

「何でもいいが。今度は咲月の卒業記念だ、あでも女の子向けの劇場版アニメは」

「ふふ、そういうのもあたしは卒業したから大丈夫だよ」

あたしは久しぶりのお出かけにワクワクしていた。

映画なんてとても久しぶり、去年の……確か中学2年になつた頃以来だと思う。

進級おめでとーつでお母さんとお父さんが祝つてくれた際に映画を見ようつてなつた気がする。

だからほんとに久しぶり。ちょうどテレビで宣伝してある感動モノの映画が気になるからそれを見ようかな。多分見たいって言つたら見よつて言ってくれるはず。お父さんってあたしの言つことはあまり反対しないから……それもやっぱりあたしの学校生活の事を知つているからなのかな。

「おー、姫川。」」の掃除やつとけ、俺ひょとひみけと用事あるか？

「うふ、分かった。やつとおへな

あたしはよく押し付けられ役になつていた。

だからいつもて掃除をあたし一人にやらせることもたべてんあつた。

それに授業終わりの黒板消しなんかホントは田直の仕事なのにほとんどあたしがやつていた（やつとれていた）

そんなんある田直だつた。

「姫川、少し話があるから職員室に来ててくれ、少し先生と話をしよう」

担任の先生から呼び出しを受けたあたしは昼休みに職員室に入った。

職員室はいつも「コーヒーの匂い」がする、あたしはこの匂いは好きだけどここに来るほかの生徒は「コーヒー臭い」と言つてこいるのを耳にしたことがある。

でも最初はあたしも臭いと思つていて、でも慣れた、しかも嫌な臭いを良い匂いと感じるほどだ。

それからあたしは先生の席まで行つて先生、来ました。と告げた。

「おお、来たか。早速なんだが姫川、お前いじめに受けているとかあるか？」

そのときあたしはびっくりした。先生に気づかれたのかと心配した。なぜ心配するのか。先生に助けてもらえるのではないか。そうじゃない。

もし、先生が注意したとすればあたしが先生に告げた、とそこからまたからかわれてしまう。

だからあたしは心配した。またいじめられるかもしれない。そう思うと昔傷付けられた背中の患部が疼く。あたしの背中には小さな縫い跡が残っている。至近距離だとすぐにばれる程度の跡。

そのケガはあたしを押し倒してその際にガラスが衝撃に耐えられず割れ、そしてあたしの背中に突き刺さり押し倒され更に深く突き刺さった時に付いたもので、跡が残ったと知るとショックだった、でもそれより先週まで仲が良かつた友達になんてこんなことをされるの、というほうがあたしにとつて大きなショックだった。

先生に呼ばれ、問い合わせられ。それでもあたしはそんなことないですつてばーと笑顔を作り続けた。すると先生はそうか、なら良いんだ。どうやら俺の勘違いだつたみたいだ、悪かつたな貴重な昼休みを潰してしまつて。と、あたしに言つた。

「いいえ、良いんですよ先生だつて人の子なんだから間違いだつてすることもあるけど勘違いだつてすることもあり得ない話じゃないんですから」

とあたしは返した。

でも勘違いじゃないんですよ。『めんなさい、嘘ついて。同時にそ
うあたしは先生に心の中で謝つた。

それに、呼ばれて良かつたのかもしれない、だつてあたしの居場所
なんて無いんだから。

教室に帰つても誰もあたしの相手なんてしてくれない。だからあた
しはいつも本を読んでいた。

恋愛モノの小説が好きでよくその類の本を読んでいた。

そこには様々なシチュエーションがあつて、いつかこんなことして
みたいとも思つていた。

「ねえ、咲月。あんた先生に何言われてたの？」

少し棘のある口調で彼女は言つてきた。彼女の名前は沙耶、あたしを目の敵にしてみんなを味方にして攻撃してくる主犯者。だからあたしはコイツが大嫌い。カッターナイフでもあればすぐにその顔を傷付けてやるのに。でもそんなことしたら先生に呼ばれてあたしの両親に迷惑を掛けてしまう。だからあたしは何もしない。何も出来ない、ただただやられるだけ。

「なに言われてって、あたし宿題やつてなかつたからちやんと出せよ？つて」

「ふーん、そなんだ。じゃ別にいつか

そう言つと沙耶は自分が中心のグループの輪に戻つていった。願わくばあたしに近寄つてきて欲しくない。

小説を読んでいると掃除の開始のチャイムが鳴り、それぞれ愚痴りながらも掃除場所へと急ぐ。

あたしも袴を挟んで掃除場所へと向かつた。でもそこにはあたし以外誰もいなかつた。

事の始まりはあたしが2年生になつてしまひへのことだった。

あたしが友達とこの間見に行つてきた映画の話をしているとあたしたちの教室に3年の男子が入ってきた。

ちなみにこのとき話していた友達つてこいつのは紛れも無く沙耶のこと。

その沙耶に用があつたらしく男子が沙耶に声を掛け、そして告げる。

「沙耶ちゃん、」めん。俺他に好きな子が出来たんだ

「え？」

沙耶はじしまりへ固まり、そしてよつやへ口を開く。

「那人つて誰？」

その声はとても力弱く、まるで生氣を抜かれているかのようだつた。

その問い合わせて男子はそれは秘密、とだけ言つた。でもあたしは気づいてしまつた。

そのとき彼があたしを見てニヤニヤしてくる」と。

好きな人を見ると嬉しくなつて頬が緩むつていうことはよくある。だつてこの間まで沙耶がそつたから。そして好きな人が出来た。あたしを見て頬が緩んだ。この一つから推測されることはとても簡

単なことだった。彼はあたしに惚れてしまつた、ただそれだけのこと。

あたしはそれに気がついてからこの人とは距離を置いていた。

でも強引にあたしはこの人に呼び出され、告白された。

「姫川咲月ちゃんだったよね、あのさ。もし良かつたらなんだけど『ごめんなさい、そういう話ならお断りをせいでいただきます。だって親友の彼氏だし、気が引けます』

そうこうで十寧に告白を断りせりふもつだつた。でも

「はあ？ そんなの関係ないね、なにそれ女の友情？ そんなつまらなものにしがみ付かないで俺と付き合つてくださいよ、ね？」

彼はそう言つてきた。でもあたしは断り続けた。

「あたしは付き合いません、だから諦めてください」

やつ言つて何度も断つていたときだった。

「ふーん、じゃその大切な沙耶ちゃんに怪我させちゃおうかなーあいつ俺に惚れてるし、多少傷付けても何にも言わないだろ」

「そんな……止めてくださいーーそんなの酷い

「……やつぱねうこのめ良くないよな、じゃあそれを止める代わりに付き合つてくれよ、それなら文句無いだろ？友情だもんな」

「え……？」

結局、彼に乗せられてあたしは彼の彼女になった……。

その翌日から『浮氣泥棒』として沙耶はあたしを田の敵にし始めた。

「あら、『めんなさい姫川さん。わざとじゃないんだよー？』

あからさまに肩をぶつけってきた沙耶はあえてわざとらしく言つてきた。

そのことに對し、感じ悪いよ。と沙耶はクラスのみんなに言われた、でもその度に

ふーん、あんたもいじめてほしいのね。分かった。と言い、皆を怖がらせていった。

しかも沙耶が彼氏と別れたなんて事はあたしと本人以外誰も知らず、沙耶に脅されるたびに

『沙耶には3年の彼氏がいるからたてつかないほうが良い』と陰で注意する生徒もいた。

そして皆それが怖くて沙耶の言つこと口齒向かうことなんてしなかつた。

おかげであたしはいつの間にか一人ぼっちになってしまった。

次回、完結です。

これで終わりです。始まりにも書きましたが出来れば『必ず』コメントをください。自分じゃアリなのかナシなのかすら判断できませんし、実際、これが面白いのかどうかという事についても分かりません。なので感想をよろしくお願ひしますといつにも増して真剣な僕が画面越しに頭を下げます。

「咲月先輩、先輩つてもしかしていじめられてるんですか？」

ある日あたしはひとつ年下で後輩の男の子にそう質問された。

あたしはこの子とは出会えば挨拶を交わす程度だつた。

でもそんな子がいつそんな情報を手に入れたんだろ？ あたしはそれが気になつた。

でもここで、はいそうです。と言えば彼は何をするんだろ？ あたしを助けるのだろうか。

それともあたしの相談に乗るのだろうか。でも、そんなことしたら彼の居場所も無くなるかもしれない。馬鹿馬鹿しいけどいじめはふとした拍子に始まる。ここで彼に對して沙耶があいつのことは無視しなさい、いいわね？ とでも言えばそれはひとつ火となりその日が徐々に広がり彼を苦しめていく。だからあたしはその火を決して灯させないよう嘘をついた。

「んー？ 何であたしがいじめられなきやならないの？ 巧^{たくみ}は心配性だねえ」

そつあたしが笑いながら言つと驚くことに彼は急に怒り出した。

「止めてくださいよそういう態度！ 何で嘘つくんですか？ ！ 僕だって最初は違うって思つてました。でもこの間のあれはないでしょ！ なんであるなことされないといけないんですか！ ？」

いきなりの大声に驚きつつ彼を見る、気づけば彼の瞳には涙が浮かんでいた。それを見てあたしはハッとした。

「この気遣いが逆に相手を傷付けるのだと。そして彼は今現在あたしがとつた態度によつて悲しんでいる。

「咲月さんがいじめを受ける必要は無いです、だつて何も悪いことしてないでしょ? それに姉ちゃんも知つてましたよ。僕が、もしかしたらつて話したら『やっぱり巧もそう思つ?』って言つてました。僕はまだ1年生だから中学つていう雰囲気が良くわからないけど、沙耶さん、いや。あんのカズがやつていることは小学生以下だつて事はよく分かつています。3年生の姉に聞いても『あの子のやることは幼稚だよ』とも言つてました」

「そつか……」

あたしはそれ以上言葉が出なかつた。なんて話せば良いのか分からなかつた。

でも巧は言つてくれた。

「その……僕はいつでも咲月さんの味方ですから、もううん姉、いや、綾姉も味方です。」

「ありがと……巧」

あたしは家に帰つてそのこと言葉を思い出すだけでしきりに涙が出た。

家に帰るとお母さんがこつもあたしを温かく迎えてくれた。

だからあたしは家では何一つ不安なことがないな態度でいたなかつた。

「おかえりー咲月ー今日はオムライスよーお母さん頑張ったのよーだから早くテーブルにこりつしゃー」

玄関のドアを開けるだけでお母さんすぐに出迎えてくれた。

あたしはつと、すぐ行く。と言つて素早く自分の部屋に戻つてカバンを置いて部屋着に着替えてからテーブルへと急いだ。

「おひお父さんじやないかーもひ帰つてたの?おかえり」

「ただいま……咲月ーお前まだ彼氏なんて作つてないだらうなあ?」
あたしをからかうかのよひにお父さんはこつもそんなこと言つてくれる。

でもあたしはそれを迷惑だとは思つてない。あたしはそんなお父さんのが好きだから。

まあ、好きとは言つてもLOVEMEじゃなくてLOKEの方だけどね。

「か、彼氏なんているわけないじゃん。うんいないない」
ワザと動搖して見せるとお父さんはさつきまで読んでいた新聞を閉じて、いやまさか。いやこやまさか……な。と動搖していた。あた

しほの反応が少し面白かった。これからお父さんは好きだ。

「馬鹿ねーあなた、咲月に彼氏なんているわけ無いじゃない」

「ちよつとー失礼じゃない?」

お母さんがオムライスを人数分お盆に載せてテーブルに次々と置いていった。

それを見たあたしは一応それを手伝った。

でもやつきの発言は聞き捨てならない。

「やつかーそりだよな母さん、咲月に彼氏なんて出来ないよな」

「お父さんも失礼だぞー、そんなこと言つてると彼氏ぶりの嫁さん作つちやうからね~」

「またまたそんな事言つちやつてーあんたにはまだまだ早いわよ

やつお母さんが言つとお父さんもそれにつづき、と頷いていた。

「いいもん、高校になつたら一人で生活して田那さんと共同生活するもん」

こうなつたら意地になつてしまつ。絶対作つてやる。

「なー咲月、それはお父さんが許さないぞー!」

お父さんが過剰反応してきた。やっぱ愛する娘を手放したくないのね。

「まあまあ、あなた。いいじゃない、一人暮らしなんだ。それに高校のときから一人で生活できるようになつておけば何処の大学に行つても安心じゃないの」

「……まあ、まあやうか」

「だからこの際咲用の家買つちゃいましょうよ」

お母さんが思いついたかのよつて言つた。初耳……いや、お父さんの収入も凄いけど。

でも家を『えるだなんて行き過ぎた親だと思つ……。

「えええ！？ 馬鹿か！？ それはいくらなんでも、お父さんが反発した。やっぱお父さんはちやんとしてる。

「やうだよ？ お母さん家なんてプレゼントあたしには、事が事なのであたしもお父さんの意見に便乗する。

「それは高校生になつたら言つて約束だつたじゃないか…俺だつて言いたくてたまらなかつたんだぞ？ それをお母さんは……」

お父さんは前々からそのつもりだつたらしき……さつきの発言取り消しする。

もつ、このときのお父さんはあたしに關於じじめのこととを知つていたらしい。

そしてそのいじめの事を聞いたとき、あたしに一人暮らしをさせ、この地から離れる決意をしたんだと後で知つた。

それからもいじめは続いた。でもあたしはそれに負けなかつた。

負けなかつたのには理由がある、それはお母さんとお父さんの存在だ。

この一人がいつもあたしを優しく包み込んでくれるからあたしは負けなかつた。確かに辛いけどその辛さは家に帰るといつもお母さんが癒してくれる。

お父さんも可能な限り自慢の愛車を運転してあたしをいろんな場所へと連れて行つてくれた。

他にも巧が休日になつたら遊びに来てくれてあたしを一生懸命笑わせてくれた。

お母さんは巧が来るたびにあたしをからかつた。でもあたしはそれが楽しかつた。

それから無事とは言えないけどあたしは中学を卒業した。

それから数日後のある日、いつも忙しくていつも家に帰つてこれるか分からぬお父さんが珍しく家で新聞を読んでくつろいでいる時に、そのお父さんがこう言つてきた。

「咲月、今度の日曜映画でも見に行くか？」

前書きに書いたとおり、感想をよろしくお願ひします。

もし「これで感想」になかったら……ああ、いや。何でもないです。

兎に角、僕はよろしくお願ひしますと頭を下げます。

「……そんな」とあつたのかよ

「お姉ちゃんかわいがつ……」

「ちょ、一人とも悲しそうな顔しないでよーいやだなあ[冗談に決まつてゐるじやん、[冗談だよ]冗談。ちよつとリアルすぎたかな~?」

「え……[冗談?]

うん、[冗談。]と言いながら咲月は脱ぎ脱ぎとその白い背中をチラッと見せた。その内にかけて沿っている背筋のラインは凄く綺麗で思わずうわあ綺麗、とこよいが呟く。対して有一は何してんの?!.とその嫁の白い肌を自分以外の野郎共に見られないよう皿うの体を張つて壁を作つている。

「ほら、傷なんてどこにもないじやん?あれも嘘だよーあははつあたしお話作るのつまいまいね」

服をちゃんと着た咲月はあははーと笑つて有一を見る……それはどこか悲しそうな表情で。しかしそんな表情をしたのもほんの一瞬、一人とも咲月のその表情に気づかなかつた。更に有一は咲月に背を向けていたのでなおひらの]と[ほりくはずもなかつた。

「先、お風呂入らせてもううねーー」

そう咲月が一人に呟つと一人とも声を揃えて、いいよー。と返した。

咲月が風呂場へ行つた事を耳で確認するじょい。その口元は妙に怪しげな微笑を作り出している。へへ、と思わず悪役ながらの笑いをこぼした。

「な、何？」

有二は新聞の番組表から目を逸らし「よー」を見る。

「ねえーお兄ちゃん……今一人きりでしょ？」

「お、おつ……ちよつと」よい怖いぞ

「だからね、力ずくでキスしようと思つて……」

そう言つてこよいが床に膝をついてこぢらへ寄つてきて、見るからに全力で俺の肩に両手を乗せて押し倒そうとしている。最近のこよいは妙に積極的だ。でも俺にはこれがある。

「やつはさせないつー！」

俺はさつき読んでいた新聞紙でこよいの顔面を薦撲む。くしゃくしゃと収まつたこよいの顔面を新聞から浮き出た丸みで確認しつつ、後ろに回りこみお腹部分からギュッと抱きかかえ、胡坐を搔いた中に入れる、これでこいつは大人しくなる。

「……えへへつ」

そんなに嬉しかったのか、とにかくこれで「よこは落ち着いたが
これじゃもう新聞もテレビを見れない。

「よこが俺の視線を後頭部でブロックしてくるからだ。俺が右に頭
をずらすと同じようにも右にずらす。左にずらせば同じよう
に左へずらす。一瞬だけ見えたテレビには草原でチーターが取材陣
に向かって走り出すのがチラッと見えた、次の瞬間とつものがと
ても氣になる。

取材陣は逃げ切れるのか、それとも襲われるのか……。最悪の場合
殉職というのも考えられる……だからすぐ一氣になるんですがそこ
んどじるじりでしょうか「よこさん? 退いてくれませんかねー?

「ちゅうと「よこ、テレビが気になるんだけど」

「じゃあ音量だけでお楽しみくださいって事で」

「俺は映像がないと満足しないんだよ」

「じゃあこいつがそれよりもいい」としてあげる。きっと満足する
とゆづみお兄ちゃん」とゆづみお兄ちゃん

満足するとゆづみお兄ちゃんは俺の束縛をもひともとしな
いかのようになりその体を180度回転させ、重いの体重を俺にすべて
乗せてきた。

後ろに倒れそうになり慌ててその拘束を解いて、手を床につかって
倒れそうになるのを防いだ。

しかし甘かった。

「痛つてーー！」

こよいはピンと張った腕の関節部分に手刀を入れた。腕にもカックンつてあるんだな……。

つてそんな場合じやないつて、早くこいつをどうにかしないと！

「んー……」

田を閉じ俺の手首を自らの手で押さえつけそして俺のお腹にまたがるこよい。そして迫つてくる。

俺は必死に足をバタバタした。しかしそんな努力も虚しかつた。ただその空間にドンドンドン！という大きな音が響くだけだつたのだつた……。

服を脱ぎ、タオル片手に浴室へ入る咲月。そして真っ先に鏡を前に座り込こんだ。どうやら背中を気にしている様子だつた。

「あ、あははー【冗談つて言つちやつた……】

咲月が見つめる鏡は咲月自身の背中を映し出し、そして小さくはあるが過去に残つた傷跡をも映し出していた。

じつちで一人暮らしするよつになつてから咲月のいじめはすっかり消えた。

しかし咲月が受けた心の傷は消えそうにない。背中には消えなく

なった傷までついてしまっている。

よほどのことが無ければ見られることはないがそれでも咲月は気にしてしまつ。有一が風呂に入ったとき、自分もホントは入ろうと思つていたがこの傷のせいで仕方なく服は着たまま、背中を流しに突入した事がある。とにかくこの傷だけは見られたくないのだ。咲月にとつてこの傷は少ないコンプレックスの一つなのだ。

頭を洗つて次にリヌス。流して体を洗つた後、湯舟に入る。片足ずつそーっと入れていく。ちなみに今日は有一が風呂の準備をしていた。

「お、丁度いいかも」

そう言つてもう勢い良くもう片方の足も湯船に浸けてしまつ、そして肩まで浸かれるよう足をまっすぐ伸ばす。そして流石あたしの旦那だねと思いつきり背伸びをして体の芯まで温まる。そして15分くらいこじつしていよつと咲月は思つていた……のだが。

『痛つてーー!』

という大きな声が聞こえてきた。

「何事?……げ、有ちゃん?」

次に『ドンドンドン!』と、壁でも叩いているかのよつなそんな音が有一たちのいる居間から聞こえてきた。

「いやいや何してんの……？！めっちゃ気になるんですけどー。」

ただ事じやないと女の勘がそう言つてゐる、恐るべしよこちやんの仕業だな、早く何とかしないと。

そう思つてゐるときだつた。

『キスはまざいだらーー！』

「うわっ……止めなれやーー！」

そのセリフが聞こえた次の瞬間には湯船から出て咲月は大きなバスタオルを身に纏い居間へと向かつた。

「有ちゃん大丈夫？ー」よこちゃんに何かされ

その瞬間あたしは言葉が出なかつた。目の前の光景を見て啞然とした。ただひたすら驚いた。旦那が自分の妹にキスを迫られている。手首をガツチリと掴まれ、オマケにお腹の部分には妹が乗つかつてゐる。いつたいここで何がどうなつたとこだ……。

「咲月さんヘルプッ！」

そうだ。助けなきや、妹なんかに負けてたまるか。こつちは嫁なんだ、妹じときに負けるはずが無いんだ。早く妹ちゃんを退けて上げなきや。

有ちゃんの声がした瞬間、あたしはよこちゃんを脇から抱え引

を離した。

するといよこちゃんは後もう少しだったのこーと落ち込んでいた。こーにだつて負けられないものがあるんだ、だから許してね、と心で謝罪しつつこいよこちゃんをソファーに座らせ、有りちゃんの安否を確認した。

た、大変な田に遭つた。こよこからの襲撃を咲月さんに助けてもらつたのはいいけどこれ、いわゆる第一派つてやつだよな。血が出そうだぜ、主に鼻から。とにかく咲月さんが助けてくれたが今現在咲月さんはその体をもつてして無意識のうちに俺に大ダメージをくえ続け、出血を誘つているんだ、主に鼻から。

そしてこれが男と言つやつで……見るんじやない…と頭で思つても中々田を逸らすことができない。

そして咲月さんがこいからを向いた瞬間、俺はとくどくの血を流した…

…主に鼻から。

「大丈夫? でも一応ファーストはあたしだつたからこいは気にしなくてもいいよ……つてあり?」

「嘘…? 姉ちゃんもうキスしちやつてたの? こよこはてつきりお兄ちゃんの事だからまだやつてないだろ? からこれでファースト奪えるかもしけないつて興奮してたのになー……て、あれ? お兄ちゃん? 血が……鼻から出で」

「ち、違ひー! これはわつせ! ゆこが俺を押し倒したから出でましたんだよ!」

全力で一人の想像している事とは違つといつ事を主張する。でも悲しいかな、この一人全然信じてくれる気配が無い。こよいは落ち込んでるし咲月さん有限つてはニヤニヤしながら両膝を折り曲げて座つていたところをわざわざ四つん這いに変更し始め俺をからかい始めた。止めるチラリズム、止めてチラリズム……。そのバスタオル急いで来たせいなのか少し巻きが緩い……。

「さあ、それはどうかなあー？有ぢやん興奮したんでしょ？ほらあたし今バスタオルしかつけてないんだよ？だから、これさえ払いのければ生まれてきた姿つてわけだ、どうする？脱がす？脱がしちゃう？むしろあたしは脱がしてほしいんだけどなー」

じりじりと近寄つてくるこの同棲中の妻。とはいっても高校生なんだが……高校生なんだが……その威力、悔れない。

「ば、馬鹿言つなよ？！？脱がすわけ無いだらうが！」

全力で否定する、肯定したらまづいでしょー？俺はようやく視線をこよにに向ける事によつて咲月さんから逸らすことができた……。しかしその瞳は更なる問題を映し出していた。

「そしてこよいはなぜ落ち込んでる？…わつとまでの威勢はどうした？！」

見るからに落ち込んでいる、体育座りになつて膝に顔を埋めている。なにせり啖つてゐるようだがいつたい何を啖つてゐるんだか。

「有ぢやん全力で話逸らし始めたあ。くふふつ続きは部屋に行つてからにしようか……」

「くつ～つ、続き? 何の……続き?」

「まあまあ、ちょっと付いてくるがいいわ」

もう言つてさりげなく力が強い咲月さんは俺の腕を引っ張つて部屋へと入り込んでいった。い、嫌な予感が……ってか先の味方は今 の敵か?!

くふふふふ、さつきのセリフ明らかに卑猥な方に意味取っちゃうよね。でもやつぱ言つておかないといけないからね。こよにちゃんとだけは秘密にしておくけど。これって夫婦の秘密つてやつ?

咲月はとりあえずベッドに有二を座らせた。そしてティッシュ箱から何枚かティッシュを取り出しそれを有二に渡した。

「あーでもティッシュもつといるかな~?」

咲月はそれだけを言つと有二に背を向けてゆっくりバスタオルを腰まで下げた。

露わになる健康的な白い肌、そこに残る過去の傷、咲月は唇を噛みながらそれを有二に見せた。

あれ? おかしいな、覚悟したはずなのに目からは涙が少しづつ流

れ落ちてきた。やっぱり見せたくなかつたのかかもしれない。

でも嘘はいざれバレてしまつ、バレてしまつたその時、有ちゃんは嘘ついていたのかと言つてくれるかもしない。そう想つと見せなあやと思つてしまつ咲月だつた……。

「「あんね……あれ冗談じやないんだよ、だから……傷、残つてゐんだ……」

「え……？」

感想待つてます、ではまた来週。

「有ちゃん全力で話逸らし始めた。くふふつ続ければ部屋に行つてからこじよつか……」

「くつ? つ、続きを? 何の続か? ……?」

「まあまあ、ちよつと付いてくるがいい」

くふふふふふ、ちつきのセリフ明らかに卑猥な方に意味取っちゃうよね。でもやつぱ言つておかないといけないからね。によこちやんにだけは秘密にしておくけど。これつて夫婦の秘密つてやつ?

咲月はとりあえずベッドに有一を座らせた。そしてティッシュ箱から何枚かティッシュを取り出しそれを有一に渡した。

「あーでもティッシュもつとこるかな~?」

そして咲月はそれだけを言つと有一に背を向けてバスタオルをそつと腰まで下げた。

露わになる白い肌、そしてそこに残る過去の傷、咲月は唇を噛みながらそれを有一に見せた。

覚悟したばずなのにいつのまにか彼女の目からは涙が流れ落ちてきた。自分でもびっくりしているのか顔が驚きの表情のまま固まってしまつてこる。やっぱり見せたくなかつたのかも知れない。

しかし、嘘はいはずれバレてしまつ、その時有一は『嘘ついていたのか』と黙つてくるかもしない。そう思つと見せなきやと思つてしまつ咲月なのだった。信用を失うことが彼女にとって最大の恐怖でしかないのだ。

「『めんね……あれ冗談じゃないんだよ、だから……傷、残つてゐんだ……』

背中越しにそう言い、『めんなさい』と付け足した。するとそつとバスタオルを肩まで上げられた。

そして……小さく泣き声が聞こえてきた。

有一が泣いていた、今自分のすぐ後ろで有一が泣いている。咲月は泣くのを忘れ、何で有ちゃんが泣いてるの?と問いかけた。

その問いかけに有一はゆっくりと口を開いた。

「咲月さんが、そんな……目に遭つてゐなんて、知らなくて……まさかはじめに遭つていただなんて考えられなくて。さつき聞いたときまさかとは思つたけど……何も残るような傷をつけられたんだんて……悔しくて」

「悔しい?」

「俺、昔『咲月さんは……俺が護る』って言つたのに、護られてない……護るつて言つたの?」

「それは過去のことだから仕方ないって……ほら、泣かないで、血と涙でぐつしょりだよ」

ティッシュで鼻血と涙を拭き取つてやる咲月。いつの間にか彼女は笑っていた。

「はあーつたぐ、まだ言つべきじゃなかつたかもね」

そう言つて彼女はいつ見ないでよーと告げ、着替え始めた。

「いつもあんなに明るい咲月さんにそんな暗い過去があつただなんて……。俺にとって咲月さんは……こんなこと言つて馬鹿みたいだけどホント太陽のように俺の辺りを明るく照らしてくれるような人だ、そんな人がこんな目に遭つていただなんて……。

俺は知つたがぶりをしていたのかもしれない、知つてゐつもりで知らなかつた。最悪だ、最悪の彼氏だ、いや、夫か。

それにして、だ。こんなことなんで言つたんだろうか。泣いてまで告げるにじだつたんだらうつか。

そんな過去があつたとしても今の咲月さんが今の咲月さんなのだから、昔はどうだつただなんて俺には関係ない。

……俺も秘密を、いつか打ち明ける時が来るんだろうか、打ち明

けたとしてこよいはどうするだろう、咲月さんはどう思うだろうか
……そしていつ打ち明けるべきなのか。あるいは打ち明けないほう
がいいのだろうか。正直、俺自身知らないほうが良かつたのかもし
れない……。

377話（後書き）

次の話から1話1話が短くなります。そして週2～3回の投稿に切り替わります。

予定としては月曜、水曜、金曜。のどれかにしようと思っています。いつも午前9～10時くらいに予約投稿しますのでこれからもうろしくお願いします。

有二と咲月が一人で出て行つたため、残つたこよいは一人で何やら愚痴つていた。

「……こよこのせぢりやべつたん」だもん、咲月姉ちゃんくらいもな
いもん」

今、こよには体育座りになり、両膝の間に顔を埋めるように俯いていた。

「咲月姉ちゃん卑怯だよ、こよいに無いものあるんだもん、こよい
だつて昔は大きくなるつて思つてたよ？でもだんだん分かつてき
よ……こよいはぺつたんこなんだよ……」

そう呴いた次の瞬間、テレビから『うつせーべつたん』と芸人の声がこよいの耳に聞こえてきた。

それにピクッと反応するや頃も

「貧乳で悪かつたな」のやうなのはおーーー。」

と、叫んだ、テレビに。隣近所の事なんか知つたことか、とにかくムカついたから叫んだんだ、怒らなくていられようかこれが。

そして叫んだ後、何とも言えぬ脱力感がこよいを襲つた。もう何もやる気が出ない。極端だが生きることにもやる気をなくした、もうお兄ちゃんなんてどうでも良いやとすら思つこよいだった。しかし次にテレビから聞こえてきたコメントがその時のこよいを救つた。

締め切つたカーテンからぼんやりと光が部屋を弱弱しく照らす。

その部屋にはベッドの上に仰向けになつてケータイとにらめっこをする男が居た。

『善人元気？私は元気だよー大学で楽しくやつてまーすw』

そんなメールが彼の元に届いていた。ちなみに差出人は白川綾乃と表示されていた。

「あれ、一人称変わつてる……」

それだけ呟くと彼は階段を降り、食器棚の下からコップをひとつ取り出し、冷蔵庫を空け、中にあるお茶を注いだ。口いっぱいに冷たい液体が含まれ、それから勢い良く喉を通り越していく、その際の喉をひんやりさせる感覚にもう一度、もう一度とその冷たさを求める結果、一気にコップ一杯飲み干した。

くはーとビールを飲み干したそれと似たような唸りを上げ、また階段を上がり、部屋に籠つては過去の記憶に浸つていた。

綾乃是今や県外にいる人物、そう簡単に会えるわけでもない。しかも卒業の日にフランクされたのだ。

メールを送れば帰つてはくるが何か素つ氣無いものばかり。そんな返信にいつの間にか飽きてしまい、善人は新しく彼女を作ることも無く綾乃とのことを引きずるばっかりだった。

有二に、こんなことを言われた。

『善人お前さあ、綾乃さんのこと引きずりすぎだと思つよ~。そもそも切り替えなつて。でないと後輩からアプローチ受けてたとしても気づかなかつたりするかもよ? お前髪形変えてから大分かっこよくなつたんだぞ?』

俺はそう言われ、その時何故か有二に苛立ちを覚えた、もしかすると有二にうらやましい等といつ感情を抱いてしまつたのだろうか。良く分からぬ、でも、凄く腹が立つた。

それにしても美咲が安アパートで暮らすことになつたおかげでこの家も寂しくなつた。

たまに、いないことをつい忘れて『おーい、美咲そろそろ起きないと遅刻するぞ』なんて言つてしまつたりしてな……。悲しくなつたもんだぜ、またあの声が聞きたい。アドレスくらい交換させりよな。

別に泣くほどじゃないが、それでもいつも賑やかだつたからか美咲がいなくなつてから何か大きな穴が開いてしまつたかのような感覚に心が苦しくなる。

いつも物足りない気分になつてしまつ、こんなこといつたら変だ

が、美咲に蹴られたい。んで『中々やるではないか我が弟よ……』とか言つてやりたい。また昔みたいなやり取りがしたい。

くそ、急に俺の周りから人が消えていきやがつて……。

置いていくなよな俺を。

寂しいじゃねーかよ。

お願いだから俺を一人にしないでくれよ……。

一人になつたら俺は……俺は……。

……くそ、あん時のこと思い出しきやがつた。止める、思い出すな。思い出すんじゃない。

止めてくれお願いだ止めてくれ……思い出したくないんだよッ……！

あのときの俺とはもうお別れをしたんだ、もう振り返ることなんてしないって決めたんだ……。

それから俺は必死に話題を探した、でないと思い出してしまうから。思い出すなと意識すると何を思い出してもいけないのか、それを確認する時点でもれ自体を思い出してしまう。だから俺は必死に何か違うものを連想させた……。

38話（後書き）

感想待っています。あと比較とか嬉しいかもです。初期の頃と現在で何か変わったことがあれば感想に書いてください^-^

あ、とこつ間に終わる小説ってタグつけようか迷つてしまふ（笑）

「はっくしょん！ くそッ！ 誰よあたしの「わざをしたのは?！」

「ち、ちょっと美咲、口悪いよーもつとお・ん・な・の・」・らしくあるべきだと思つんだけどなーー！」

「うわいわね、詩織」

一人、美咲と詩織は同じ高校へ進学し、その高校から近いところにある安いアパートで共同生活をしていた。3食とも自分たちで作つたりしている。決して、とある容器の蓋を開けて粉末、かやくを中に入れ、更にお湯を注いで3分待つなどといふことはしていない。意外とすごい事だつたりする。

ちなみに美咲は今でも衛との交際が続いている、対して詩織は相手を作つとしている。

そんな詩織に対しても美咲は何度か彼氏作りなよと言つたことがあるのだが詩織はそれに対し有ーさん以外興味が無いの、だから今は作る気が無い、としか彼女は答えない。

そんな一人も高校に入学してある程度月日が経ち、そして今度学園祭という大きなイベントを迎えるようとしていた。しかしそこで問題が起つていた。

「はーー。んで、さつきの話だけじゃ」

くしゃみをして鼻がムズムズしたのかティッシュで鼻をかんで美

咲が戻つてくる。

「あー出し物の」とね

「そそ」

一人はこの件についてイライラしていた。愚痴をこぼさないと気が済まない程に。

「一体、どうしてメイド喫茶なのよー? あたしはお化け屋敷が良いくつて言つたじゃん!」

「やうよね、私もメイドは嫌だなーそれにしても美咲のお化け屋敷すぐ」却下されたよね

右手を口に近づけてくすくすと詩織が笑い、何よ、と美咲がいじけた。

「だいたいどうしてメイド喫茶なのよ、普通に焼きそばとかそれこそ普通に喫茶店やれば良いのにー どーしてメイドが絡んでくるのよーー」

そう美咲が言つたのに対し、詩織はあははと笑いながら

「メイドはある種のロマンだからねーそれを考えると仕方ないようにも思えてきちゃうわよね

と言い返す。やつは氣なく世間体（同世代）の事が分かっている詩織だった。

「ロマンとか糞でしょうが！　ああーもうつー。」

「だから口悪いって美咲、もはや男子を通過して野郎になつてゐるよ」

39話（後書き）

これが今からのスタイルです。いつの間にか終わるよつな話を展開し続けます、たまに開きっぱなしのことがあると思いますが、目を伏せてください、でないといつもが決りにやつてきますよ？（嘘です）ではまた次回

学校が終わって家へと急ぐ、別に何があるから急ぐといつわけじやない。ただ早くゆつくりしたかったんだ。そんな理由で俺は急いで自宅へと向かう。

最近、咲月さんは学園祭のクラス実行委員だとか何とかで放課後も何やら忙しそうだ。毎日のよつに委員だか何かのメンバーは残つてまで作業を行つてゐる、まったくもつてご苦労なことだ。

一緒に帰れないのは寂しいけどなんだか同居する前のことが思い出せてこれはこれで懐かしくて面白くとも思えた。でもやっぱり寂しいかな、いつも隣にいたからなんだか違和感を感じてしまう。

ともあれ家へと着いた俺は肩からカバンを下ろしながらドアを開ける。

「ただいま」

「うわー」とデータと二つが出迎えてくれた。

そして二つは微笑みながら

「ポテチにする? クッキーにする? それとも? よ・

「水」

「ちよつとー? 」よこ全部壊つてないじゃん! しかもそれ選択肢に無いやつだし!」

「いいから水をくれ……膝枕してやつても良いくから

「了解つすよお兄様あ、早くそれを言わなきやー。」

そう言つてコップを取り冷蔵庫を開けてと水を持って行こうとしているのを横目に俺は床にカバンを置き、ソファーベッド腰掛ける。今日も一日疲れた……特に何にもしないけど。けど何にもしないでも疲れることはあるよな?」

冷蔵庫を閉めたのがバタンという音がした、すると

「はーい! お兄様」

「ああ、ありがと妹様」

と、ソファーに腰掛けている俺の元に水を持ったこよーがやつてきた。

「うう、と受け取った水を飲もうと口を近づけると、じよーがわー」とか言いながら膝に頭を置いてきた。

「妹様、それだと水飲めないんですね」

「ふあいとーーいつぱあーー。」

ダメだ話通じねーよ。

「膝枕ー へへひざまくらー」

頭を何度も何度も置き換える「よい」、膝の上でせりこつ風に動かされるとくすぐつたくなってきた。

手に持つコップが小刻みに震えている、頑張つて目の前のテープルにコップを置こうとしているのだがこよいのおかげでくすぐつたいのをこらえるのが精一杯だ、ここから逃げ出したい、膝枕してやるなんてこづべきじやなかつた。

俺の膝の上に腕を組んでこよこの後頭部をみてこるとやのこよいが何かを思い出したかのよつ

「あつそうだつた！」

「あがつつーーー！」

と、血らの頭を俺の顎へクリティカルヒットさせ俺に起き上がつた。そして俺の頑張りもむなしくコップの水は床にぶちまけられてしまつた。

「フーん…………氣のせいか」

「ちよ、待て、おい！ 顎だぞ顎！ 少しほ心配じりつてのー しかしも氣のせいかよ？！」

「あ！」めんお兄ちゃん、痛かつた？

「痛いに決まつてゐだらうが……」

「「「めんー、せめてものお詫びにてあげんー」

「や、やめつ、くは、はははつ止め、くははつや、やめ……」

猫の喉元を指先で弄ぶかのようにこよいは指先を転がしていくすぐつてきやがる。不幸なことに俺は大抵のくすぐりには弱い、ヤバい。ヘルプ咲月さん……。漫画やアニメみたいに良いタイミングで助けてください、膝枕してあげますから……！」

「「「よつー、くすぐつた、はははははー、あああはははは、もう止めつくなはははー」

もつダメ、ほっぺが痛い。笑いすぎだよな……仕方ないこつなつたら最後の手段だ……。

あつといつ間に終わる小説と化したこれ。

面白ければ評価してやってください、このサイトを使っている友人がいらっしゃったらみなしければ宣伝してやってください。

ではまた近いうちに！

高垣衛、中学でこよいたちの同級生だった男子生徒。

彼の明るく、誰にでも優しい態度が美咲に好かれ、それから告白を受け、晴れて美咲とカップルとなつた。

そんな一人は高校に入学した現在でも交際は続いている。しかしそんな衛に新たに好きな相手が出来てしまつた……。

その相手の名前は椎名さくら。

最近駅前に出来たカフェのケーキがおいしそうで皆ひわさする様になつてきた。

どうもそここのチーズケーキがおいしそうで今日のお昼に私は聞いた。だから私はこれを利用して衛君とデートをしようと思つてたりして……。

そして私の目の前には帰りの支度をしている衛君が居ちやつたりして！だからさつそく誘つてみちやつたりして！きやー大丈夫かな？！上手くいくかな？！上手くいつたらキスしちやつたりして？！きやーワクワクして来ちゃう！ そんな支度なんて放つておいて早く行こうよ！

「まーもーぬーくんっ！」

やう言つて彼女が俺に抱きついてきた。高校生になつてこんなことされたるとすぐ恥ずかしい。

さくらさんはいつもこうだ、周りの視線なんて気にせずこんなことをしてくる。

「や、さくらんー？ び、びついたの？」

思わず俺は声が裏返りそうになつた。ホント困っちゃうよ、俺には美咲が居るつていうのに……。でも今好きなのは……。

「えへへーなあに動搖してんだか、もしかしてードキッとした？」

あは

「そ、そんなこと無いよ！ ってかなんか用？」

そんなこと……無いわけ無いじゃん、好きな人にこんなことされでドキッとしないわけが無い。俺には美咲が居るつてのに、はあ、情けない男だ。彼女を差し置いて他に好きな人が出来るなんて最悪な人間だ。でも、俺はさくらさんが好き、好きになつてしまつた。彼女に惹かれてしまつたんだ……だから……「ごめん、美咲。自分に正直になれつて言ってくれたのはお前だつたよな、だから俺、正直になる。ははつ馬鹿だよな俺、なに逃げ道作つてんだか……。

俺つてホント馬鹿な男だ……。

41話（後書き）

お気に入り登録していない読者様は是非！

感想と評価を今か今かと待っています！もし、このサイトを利用しているお知り合いがいらしたら是非勧めてください！

ではこの辺で失礼させていただきます！

42話（前書き）

登場キャラの容姿についてあまり補足が無いのはショレーティングガーネの猫的な意味があつたり……。よつは読者様から見て自分だけの世界で読み進められるかと思った次第です。椎名さくらの髪の色は桜色だとか、いやいや青でもいいじゃんとか自由に想像力働かせてくださいというわけですね（笑）

でもこれだけは言います、自分の中ではこの作品の中にツインテールはいません。

「そ、う……少しまずいわね」

とある安アパートの一室でそつ然と彼女はパタンと携帯を閉じ、彼女は視線を前に向ける。

コレはまずいことになるかもしね。でも私には何も手出しありえない、か。

そして次に、田の前に居る彼女を見ると思わずはあ、とため息が出了。その田の前に居る彼女は椅子の背のたれの頂上部分にお尻を座らせ悩める像さながらのポーズをとっている。少しでも彼女を見る角度を変えればサービスショットに Nicola いかねないのである。全く、この子はもつと女の子らしくあるべきだ思うんだけどな、いつになつても野生つてか男らしつてか「痛つ……」……え？

「聞こえてるわよ……？」ポンチクショウ

「あらら、口に出口ちやつてたのねーカツ」笑い

バカにするかのような口調で詩織は美咲をくふふとからかった。からかつてもこれしきの事で美咲と喧嘩にならないことを承知の上での事だった。

それにしても美咲はいつたい何をそつ悩んでいたのだろう、そう考えるよりも先にさつきの発言に対するシツコミの処理をするのが先決かな、そう詩織は思った。

「ほんと口に出てたわよ、つてかカツ」笑いとかもつ馬鹿にしてるよね？ ねえ？

「あ、バレちゃいました？　えへっ」

えへっ、と可愛い子ぶつて見せる詩織、そしてその姿を通して「これが女の子つてものよ」というメッセージが直接美咲の頭に流れ込んだとき、彼女はほんの、【ほんの少し】イライラとした。

「絵になるところがウザいわ、ああウザい。多額の保険金掛けてあげるから死んでくださいよ。とにかくそろそろお買い物行かないと夕飯ないからね！？」だから早いうちに行こうつてさつきから言つてんだけさあ！　つて言つてる？！」

「はいはい聞いてるわよ、んじゃ今日私カートを押すわ、だからメニューは勝手に決めちゃつていいよ、何でもいいわ」

何でも良いと言わると困つてしまつのは恐らく美咲だけではなはず。相手のリクエストによつて夕飯を決めるのだからそこで何でも良いと言わると結局自分で献立を考えないといけなくなるのだ。

なので美咲は少しイラついた様子で詩織にリクエストを聞いた。
「それすぐ困るんですけど。何でもいいつてのが一番悩まされるんだよ？　だから詩織、何カリクエストしなさい」
呆れた様子で美咲は詩織に言つた。すると詩織はしばらく考え込み、そして彼女は何か閃いた表情で言葉を返した。

「ふふ、じゃあ【何でもいいわよ！】美咲の自由にしなさい！」

それはいたずら心満載の返事だった。

「それが一番困るんじゃコラアア！？」

「あ、男になつた」

これこそ彼女が美咲をいじるにあたつての醍醐味と言えるのだ。

「レが楽しいからいじるのを止められない。

「あたしは立派な女よ！… しかも男になつたつてそれ何処の男の娘よ？！」

「分かつてゐるわよ、あんたは女よ。胸だつて私より大きいもの… チツ」

自分の胸の膨らみを手のひらで確認する詩織、確かに膨らみはあるが美咲と比べるとその大きさは劣つていた、美咲に負ける部分があるとすればそれは胸の大きさだろう。こんな子に胸なんて必要なんですか？神様、私の胸が大きくなるようどうか、どうかお願ひします。そう心の中で祈る詩織であった。

「何でそう淡々と真面目に返すの……心にグサッと来るわ、あと小さく打つた舌打ちも……」

そう軽く落ち込みながら少女はエコバッグを用意し、既に靴を履き始めた同居人に遅れをとらないよう外へと急ぐのであった。

読みやすい文章が分からぬ。以前アドバイスを下さった【改行後の一行空け】は結局やつて……しかもアドバイスのコメントを勘違いして（国語力実は皆無なんです）改行して1行空けたそこからなぜかまた1行空けた第40話を携帯で確認してみたらなんといいますかゆつたりとして読みやすかつたんですね、そこでこれからどうしようかと。間隔を空ける際、それは1行か、それとも2行か。

何かこれについてコメントくだされば助かります。読者様の目線の意見があると作者からして貴重な参考になりますからね。

思いつきり修正しました。（11月4日 午前3時）

放課後の教室、外でサッカー部と野球部がそれぞれ練習に打ち込んでいる姿を見守る生徒が居た、この生徒はもう間近に迫った文化祭の出し物の準備をするメンバーのうちの一員だった。

「あ、顔面からズサーって行つたよ……ありやあ痛つたそりだなーははっ、まあ頑張れや神崎先輩」

直後、そう呟くこの少年の背後から2人の少女が現れた。なにやら怒つている様子だ。

「篠崎い、あんたまたサボるの？ははっ命知らずねーいてこましたろううか？」

「そつよー篠崎君、美咲にまたアレ喰らわされたいの？ 結構悶絶してたよね？だからそんなどこりでサボつていないで早くみんなの輪に戻りましょうよ」

一人は落ち着いた様子で腕を組みながら、もう一人はスカートのポツケに手を突っ込み、いかにもイライラしてんだけど？と言わんばかりの口調で少年を注意、警告した。

「ああ、ごめん。すぐ行くよ、少しだけ校庭を眺めていたかっただけなんだ」

「何あんた清清しくつまらない事言つてんのよ、結局サボつてたんじゃない、ほら早く行くぞ篠崎」

男口調になつてある美咲が篠崎と呼ぶ少年の腕を掴み教室の外へと連れて行く、一方詩織は篠崎を拉致する美咲に気を遣つてあらかじめ進路方向にあるドアを開けておき、一人が出て行くや否や自分も外へ、そしてドアを閉め一人の後ろに付いて行った。

階段を上がり、長い廊下を歩きその突き当たりにある部屋に3人は入つていった。そこが美咲たちの出し物をする場所なのだ。

入るや否や連れてきたと美咲が一言。続いて拉致された、解放してくれと篠崎、最後にはいはい、皆ただいまーと詩織が。

そしてそれを聞いた部屋の中央に居る男子生徒が皆に始めようかと告げた。

「おかえり詩織さん、じゃ早速準備に取り掛かるから、篠崎お前も手伝えよ?」

「ああ、分かつてゐよ。くそ、じやんけんでチヨキを出していれば「こんな」とには……」

「篠崎」

そう注意され篠崎は機嫌を損ねた、何が悲しくて放課後残されないといけないんだ、そんな事だけ考えている篠崎だった。

「はいはいすんませんでしたよ、やるよやつやあいいんだろ?」

そう篠崎から返事を聞いた生徒は

「よつしや今日も頑張るぞ!」

とその場に居た皆に呟いた、が正直なところ彼を除くみんなはダルイとしか思っていないので弱弱しく「「おーーー」と一応彼に返しておいた。

「つたぐ、メイド喫茶なんてやつてらんないのよ、ねえ詩織？」

この期に及んでも美咲はやつてらんない発言、一応あそこで張り切つて準備してる男子には聞こえないよう声のボリュームは下げていた。

「まあ、私も正直なところ恥ずかしいし、女子からしたらあんまり面白くないのよね、つてコレなんて羞恥プレイ？」

と、詩織は近くに居た男子こと篠崎に聞いてみた。

「セヒで俺に振るのかよ、つてかアレだらアレだら前らのメイド服姿見たさにメイド喫茶やろりつて事になつたんじゃね？まあ俺はメイド服より巫女服だけどな！」

「なんだと？！巫女服よりメイド服がいいに決まつている！いいから俺がメイドのよさを教えてやろうではないか！主人様！！」

「はあ？！あんなもんより巫女の方が良いに決まつてんだろうが！清楚で清潔で！メイドなんて密に媚びうるだけじゃねーの！主人様！」

刹那、この男子に美咲が背後からハイキックをお見舞い、メイドを語る男はげふつと一言の後膝から床に倒れた。

「ぱ、パンツ見え」

「ふんっ！！」

「がはつ！？」「

不幸なのか、はたまたラッキーなのか。篠崎は美咲の上段蹴りを目の前の男越しに正面から見ることが出来た、しかしスカートから覗くそれは体操服だつた……。

43話（後書き）

やつぱし短いですね、しかも前回の話とは繋がらないところ。
まあいいや。

高校でも文化祭の準備が忙しく行われている。ちなみにこの高校での出し物はメイド喫茶一色だ。しかし中にはハズレも存在している……ハズレということに対する説明はナシとする。

咲月は役目を終え、急いで旦那の所に帰ろうとしていた。しかしそんな彼女に対し申し訳なさそうに声をかける男が居た。

「姫川さん」

「あ、善人だ……ん？ 何か用？」

そう言われ後ろを振り向くと善人が壁に背をもたれて自分に対し話しかけていた。

「ああいや、帰り道途中まで一緒にだから付いていいかな？ 何なら家まで送るよ？ だからその了承を貰わないとまるで俺、ストーカーしてるみたいで気が引けちゃうんだ」

つまりは一緒に帰りたいだけ……でもまあいいか、そう思つた咲月は別に良いよと返事をした。

それにしても有りそうで無かつたツーショットである。善人と咲月、二人が並ぶと妙に新鮮さがあり、そして一人を照らすオレンジ色の夕陽が加わって外から見ていてとても絵になつてゐる。

「ねえ、最近綾乃ちゃんとはどうなの？」

特に会話もなく氣まずいなと感じた咲月が話を切り出してきた。
対して善人は綾乃という言葉にピクッと反応するや否やその質問を
笑い混じりにすばやく答えた。

「フ、ラ、れ、ち、や、つ、た、わ、あ、あ、ー、あ、ホ、ント、悲、し、い、つ、ち、や、あ、り、や、し、ない
ぜ」

「え？！ 別れちゃってたの！？ 知らなかつた……ごめん、聞い
ちゃダメだつたかも」

咲月がごめんと謝ると善人は反射的に彼女の頭に手を置いた。する
と咲月はえ？ と拍子抜けした声を上げた。

「ごめんなんていうんじやね……つて、うう、ごめん！ 何やつて
んだよ俺？！」

もはや無意識で行つていた行動に対し必死に謝罪する善人。いつ
も綾乃是善人に対し、ごめんなのです、や、ごめん善人。等と謝る
ことが多かつた。そしてその度に善人は綾乃の頭に手を置いて「ご
めんなんて言うんじやねーよ」と言い返していた。そしてさつきの
咲月の「ごめん」というのが綾乃の「ごめん」と重なつていたのだ
ろう、だから無意識に彼女の頭に手が伸びてしまった……というこ
とだらう。

「あついや！ 別にあたしは大丈夫だから！ だからさ、そんな
謝らないで、善人は何も悪いことなんかしてないんだからね？」

善人に非はないよ！ と説得する咲月、彼女はしまつた、聞かな

ければ良かつたと心の隅で反省した。そして善人はさつきのショックで多少目が泳ぎながらも咲月の言葉をその胸に受け止めた。自分は悪くないんだ。そう自分に言い聞かせるために。

そしてそれつきり、善人は黙りこんでしまった。

また気まずくなつた、しかし気づけば既に咲月と善人は家の前まで来ていた。ふと立ち止まり、善人は咲月に笑顔でじゃあね、また明日。と後ろに振り返りながら背中越しに小さく手を振りながらそう言った。しかし咲月はその笑顔の裏を知つている。過去の自分と同じなのだ、他人に気を遣うその笑顔を他の誰でもない咲月は生憎にもよく知つていた。だから咲月は呼び止めることにした。独りにさせちゃダメ、心でそう強く思ったのだ。

「待つて善人！ 行かないで！」

その声を聞き善人は踏み出したその足を止める。もう用はないはず……だとしたらなんだ？

「行かないで善人！」

「はあ？ どうしたんだ？ そのセリフ、まるで恋人同士だぞ？ 泣を誘うお別れのシーンですか」

肩で笑いつつ善人は咲月にツッコミを入れた。対して彼女は目の前で笑つている彼を見てほんの少し胸が痛くなつた、そして意を決して口を開く。

「いいから行かないで！今日はうちに泊まつていってよ」

「泊まる……？ 僕が？」

「善人以外に誰が居るの？ さ、早く上がつてよ、さあ早く早く！」

半場強引な咲月に自分の腕を掴む咲月を見て、あつ……！と驚いたような声を上げた、一瞬、ほんの一瞬、目の前に居る彼女が善人の目には綾乃に見えたのだつた……。

「善人、さあ上がつて」

そう優しく言い掛ける咲月は玄関のドアを開け、さあどうぞと言わんばかりに善人を手招きした。

善人は頭の中で必死に物事を整理していた。目の前に居るのが綾乃に見えているからだ。目の前に居るのは姫川咲月なのに、彼女と白川綾乃が脳内でシンクロしている、もうここには居ない綾乃が目の前に居る、メールを送つてもろくな返事しかしなくなつた彼女が目の前に居る、あんなに大好きだった彼女が……目の前に居るのだ。目を擦つて確認したかった、でもそうすると彼女が見えなくなりそうな気がしてそれが出来なかつた。しかし分かつていた。最初から目の前に居るのは姫川咲月であつて白川綾乃ではないということが。そう頭で考え、もう一度目の前を見た。

「どうしたの善人？」

するとそこには斜めに首を傾げた姫川咲月が居た。そう、白川綾乃はここにはいない。心の中でそう断定付けると急に悲しみに襲われた、なんだコレ……悲しいのか？ 何故悲しい？ どうして俺はこんなに切ない気持ちになつている？ 涙が……くそ、涙がこみ上げてきやがる……！

善人は今にも溢れそうな涙を堪えた。

「ちよつごめん。俺着替えとか持つてきていいかな……？ 必ず戻つてくるからや」

全てを言い終わる前に彼は俯いて後ろを振り返った。咲月は一瞬、有ちゃんのを借りればいいんだよ、と言おうとしたが善人の肩が小刻みに震えているのに気づき言葉を飲み込み、いいよ。行つてきな、ちゃんと帰つておいでよ？ と、そう彼の背中に声を送つた。きっと何か事情があるんだろう、でもそれはあたしが関わつて良いような物じやないかもしない。そう咲月は感じ取つたのだった。

ありがと、そう呟くと善人は自宅へ向け走り去つていった。

44話（後書き）

ん、！？長いのか？！まあいいか……。

感想ください。頼みます。

45話（前書き）

今度、感想を送りたいと思つてください。たな、是非この作品におこしてお気に入りのキャラクタを添えていただけと楽しいです。

「はあっ、あつぐあ、ぐすっ……はあああつぐすっ……」

必死に足を前へ前へと踏み出し、荒い息を立て、田からは涙を流しながら、そして絶えず鼻から出でてくる鼻水をすすりながら彼は自宅へと走る。とにかく全力で道を走つた、無我夢中で早くあの家に戻りたい一心で上り坂も地中で歩くことなく駆け上がつた。

上つたり、曲がつたりを数回繰り返すとようやく自宅が田に見えてきた。

玄関の前に立つとティッシュユ配りのお姉さんから貰つたそれを乱暴に取り出し鼻水を取り、それから涙を拭き、大きく深呼吸してから自宅へと踏み込んだ。

ただいまなんて言わなくともいいよな、それだけ思つとすぐに二階へ駆け上がる、母親に声を掛けられる前にさつさと家を出てやうと思つていた。

ドタドタドターーと慌しく階段を駆け上がる音が、そして既に家に帰宅していた母親は何やら騒々しいなどだけ思つて、のん気にせんべい片手に居間で時代劇を見ていた。

ドアノブを回し、自室へと駆け込む彼、少しづつその乱れた呼吸を整えながら何を準備すべきかを考えた。

「い、これくらいでいいだろ……」

通学用のかばんの中に入っているものを床にぶちまけるとその空になつたかばんの中へ着替えを綺麗にもたたんで入れていつた。まだ空間がある、どうせならお菓子でも持つていこうかと机の一番目の引き出しからまだ未開封のお菓子を取り出しその空いた空間にそれを詰めていつた。

着替えにお菓子をかばんに詰め込み、そして乱雑に床にぶちまけられたその中からケータイを見つけ出し、慌てて上着ポケットへと入れ込んだ彼はよし、と息を吐きドアノブを回した。不思議と楽しそうに顔がにやけてるよつに見えるのはまるで遠足前日の小学生のよつであった。

部屋へ入つて行く際と同じよつに、出て行く際も慌しく駆け下りていつた、ダダダダッダン！荒々しく階段を駆け降り、フイニッシュには豪快にもジャンプ、そして着地と共に床を蹴りジエットスタート、一瞬たりとも彼の体は立ち止まることを知らなかつた。

少しだけ自分がどこぞの少年漫画の主人公になつたかのような気分に彼はどこか楽しそうだつた。さつきまで泣いていた彼はどこへ行つたのやら、泣いていた証拠に彼の部屋にはぐっしょりと濡れたティッシュが置かれているといつた。

「こつてきます！！」

「ちよつと善人！あんたどこに行くかぐらいい教えなさいよー？！」

「ううせーー北斗に行こうが俺の勝手だ！今日帰らねーからーー！」

吐き捨てるよつに彼はテレビを見る母親にそつまご放つとそつをと外へ飛び出していった。

外へ出るや否や彼はダッシュで平沢家を目指す、ハアハアと荒く呼吸をする彼はもうじき彼らに暖かく迎えられることだろう。そう、彼の心の傷はあの3人が少しづつ癒していくはずだ。

一方、彼が家を飛び出した直後のことだった。

「善人……」

慌ただしく、家を飛び出していく彼の背中を見てそう呟く少女がそこに居た。どうやら彼女は善人に用事があるらしい、しかし、たった今善人は家を飛び出していくので彼女は何事もなかつたかのように後ろを振り向いてそのまま去つていった。一体彼女は何の目的でここに来たのだろう。

45話（後書き）

ちなみに作者の一番のお気に入りはこよいです（笑）なんの迷いもなく兄に甘える姿がとてもかわいらしいです。

善人を見送り、さて家事でもやりますかと中に入る、かばんを置いて居間へ行つて見るとまたか……と呆れる光景を田のあたりにした。

「何やつてんの姉ちゃん、それどこよこわざんも……」

「えへへー姉ちゃんが居ないうちに兄弟の垣根を超えて、いたつ！ 何するのー咲月姉ちゃん？！」

咲月はこよいを羽交い絞めにし近くのソファーへと運んだ。だめじゃない、こよこちやん。そうこよいの耳元でささやく彼女はとてもない恐怖をこよにに『えた。目が笑つてないのだ。

「何するのー？ はいっちのセリフだこよい、咲月さんありがとうー！ 助かったよ！」

「あはは……結構やられてるね

それにしてもひどい有様である。カッターシャツは胸元がはだけており、ズボンに関してはベルトがどこにも見あたらな……あ、あつた。ベルトに関しては有一の手首を縛るのに使われており、コレは行き過ぎな愛情だと咲月はため息をついた。

まあ、とにかく大事には至らなかつたようで咲月は安心した。

そしてそんな場合じやなかつたと氣づくと有一の拘束を解きながら一人に笑顔で

「あ、せつそう、今日金曜だから善人泊まりに来せるよ、いいよね？」

と訊いた、こよいに關してはすこしふてくされていた。数秒前までガクガクしていたのになんだこの切り替えの速さは……。そしてそのふてくされた少女がこいつ言った。

「えー？ 泊まりに来るの……こよこのおもてなしとか出来ないよ？」

遠まわしに嫌だといっている様子だった。

「いいの、こよのはあたしがやるから、有りやんはどう？ 許可してくれる？」

有一を見ながら訊いてみると彼は首を縦に振った。

「うふ、もちろん。ちなみに今日はこよいで布団を敷いて寝ることにするよ」

そう返され少し咲月は落ち込んだ、つまりは夜は一緒に寝られなってわけなのだ。

「…………分かった、仕方ないね」

仕方ないと諦める咲月に対し、もう片方の少女はその言葉に躊躇付いてきた。

「えー…お兄ちゃん一緒に寝てくれないの？ そんなこよこのこと嫌い？」

甘えた声で兄を誘惑する妹、兄は田を逸らしながら答える。

「嫌いじゃないけど、せっかく泊まりに来てるのに俺がこよいと寝てたらあいつ一人ぼっちじゃん」

「そりゃあそうだけじゃあ……」

まだ何か言こそつだ、そう思つた咲月はこよいに釘を刺すかのようになつた。

「はいはい、こよいかわん、明日からまた一緒に寝ればいいだけのことでしょう、ふふ、今日はとことん可愛がつてあげるわ……」

「こよいは一瞬恐怖を感じましたお兄様！ 一体明日を無事迎えることが出来るのでしょうか？…」

先ほどの恐怖が上乗りした様子、もつ咲月に迷ひつつこよいだらうつ……。

とにかく話が落ち着いたところですかと準備をしなくてはいけない、そこで咲月は一人にそれぞれ役割の指示を出す。

「話はその辺にしておいて、夕食の準備とお風呂を沸かしてください。有ちゃんはお風呂…こよいちゃんはあたしと一緒に夕食作るよ！ おつかー？」

やう訊くと兄妹は口を揃えて

「「まつかせんーー」」

と答えた。ふふつそれじや早速取り掛かるつか、そつまつと有一は立ち上がり風呂場へ、こよいはソファーから腰を上げて思いっきり背伸びをした。その姿を見てまたスイッチ切り替えたか、まよいいやと咲月は心でため息をついた。そしてエプロン取つてこよひ。と弦き早速仕事に取り掛かった。

善人、早く来ないかな。と一人楽しそうな咲月なのであつた……。

46話（後書き）

クスッと笑える瞬間的に終わる小説？

ちょっと一週間休載しますね。話を整理しないと今の通りグダグダなので（笑）

よければ評価してください、お知り合いにこのサイトを使用している方がいらっしゃったら紹介してみてください。

それでは失礼します。

P.S. あれ、予約掲載になつてないじゃん……こんな深夜に投稿して読者増えるかよ……。orz

テスト終わった！別な意味で終わった気がするけど・・・思い込みだと信じて連載を再開します！つてか残念なことに文章力衰えました。あとキャラの崩壊があるかもしれませんので注意して読んでいってください。

なお、今回は約一週間分の文章量でお送りしますゆえ、瞬間的に終わってクスッと笑える小説にはなっておりませんのでつてどうでも良いですよね。では、作者も久しぶりすぎて自身で書いたのに内容が把握できていない本編の続きをどうぞ！

ピンポーン、その音を聞き、3人は玄関に集まつた。

そう、今日は善人があ泊りに来ることになつてゐる。なのでさつきまでそれぞれ役割を分担して家事をしてゐたのだった。

しかし、集まつて早々こよいが嫌そうに、「やつぱり今日はお兄ちゃんと眠れないんだねー」と嫌そうに言つた。それを聞いた有二は、「まだ言つかこよい」とこよいの頭をわしゃわしゃと撫で回した。

「怖い人だつたらどうしよ?」
次にそうこよいが言つと、「善人は怖い人じやないから大丈夫だよこよいちゃん」と、咲月は補足した。そんなやり取りをしてると有二があることに気づいた。

「つでかさ、いつまで開けないつもり?放置プレイがお好きなの?」

そう有二が言つと咲月はあ。と思い出したかのように「どうせ!入つて!ヒドアの向!」といふ人物に言つた。

ガチャと音がし、通学鞄を肩に下げた、それはもう有二と咲月のよく知る人物が現れた。そう、今日はこの少年の為に『牛肉』を焼

いたんだと咲月は改めて意氣込んだ。

彼が3人の前に姿を現すと、

「こんばんは、今日はお世話になります、よろしくお願ひします」と、とても礼儀正しく挨拶をした。

それはいつも彼からはありえない礼儀正しさだった、思わずあれ？この人誰だ？と苦笑しつつ有一は、

「おう、善人今日はよろしくな、早速だけどこっち来て」と居間へと善人を案内した。とは言つてもすぐ近くなので手招きといつたほうが正しいかもしねない。

対して善人はどうぞ、と言われたが、どうしてもこよいが目に留まってしまう、ちょっと不機嫌だな、もしかして俺が来たからかな、と申し訳なさそうにこよいに、

「こよいちゃん嫌そうな顔してるな、『めんな、こよーちゃん』と言つてから中に入った。

靴を脱ぎ、手招きされるまま居間へと行く。そこへ入った瞬間、目に映つた豪華な夕食に善人はうわ、すげえな、と声を漏らした。

善人がソファへ荷物を置くとそれを見て咲月が、
「んじや早速夕食にしようか、ほら善人はここに座りな」とイスを引き、善人の背中を押してそこに座らせ、自分は善人の隣に座つた旦那の目の前に座る。……つもりだった。

「こよいの先取りつ！お兄ちゃんの正面はこよいが貰つたあ！」
と、嬉しそうに笑顔を咲月に向けるこよい、咲月は旦那を見た、
その旦那もあははと仕方ないよと笑っていた、なので咲月も一緒に
笑つた。

「まあいつか、この間キスしたからね。正面に座れなくつたつて別
にだいじょーぶ」

そう咲月が言い放つと、

「「キ、キスう！？」」

と、こよいと善人がキスという単語に反応し、そして二人は咲月
をじつと見つめた。

一方、一人にじつと見つめられている咲月はニヤリと笑い、

「ねー有ちゃん」

と旦那に言い掛けた。同意を求められた旦那はあはは、と笑うし
か他ならなかつた。

（あれ？キスしたっけか……？記憶にないんだけど？え？この間つ
て何時？）

まあ、それもそのはず、さつきの言葉は咲月の見栄を張った言葉
であり実際のところ最近はキスなどしていないのだから。

とにかくこちらを見つめてくる男女二人を無視し、善人の正面に
座り、手を合わせた。

咲月が手を合わせるのを見ると有二こよいも慌てるように手を

合わせた、それを見て普段そんなことをしない善人は懐かしいな、とそれをしていた頃を懐かしみつつ同じように手を合わせた。

「せーの、『いただき』」「「あつ！水つ！…」「わざとらしく慌てて席を立ち有」と咲月はそれぞれコップと水を。それを見る善人は少しの間をおいて
「引っかかったああああくそー！お前らああー！」
と善人は自分の太ももをパンパン叩いた。

そんな善人を見て、
「美咲もね、同じようなリアクションだったよー！あはは、これ楽しい！『あれ？違う？ってかこれ恥ずかしーつ…』って表情にこよいは笑っちゃつた」
と、こよいが笑い始めた。

「ふはは、見たか善人、これが平沢家のおもてなしだぜ、まんまと
引っかかったな」

「ああ、引っかかったぜ。はあーお前ら楽しそうで良いよなあ」

少し寂しげな顔でそう呟く善人を見て意外なことにこよいがぽつりと、

「やっぱり、ずっと一緒にいた人が急に居なくなるのは寂しい？」
と訊いた。ずっといた人というのは恐らく綾乃ではなく、美咲のかなかつたのかねー俺にとつてどれだけ大切な存在だったのかが

ことだらう。

「ああ、すつごく寂しい、当たり前が当たり前じゃなくなるんだ、不安になることもあるしつまらなくなることもある。近すぎて気づかなかつたのかねー俺にとつてどれだけ大切な存在だったのかが」

そつか、そう呟くこよいは有一が居ない家庭を想像していた、こ

の家に一人で住むことになる、炊事洗濯、家事全般を自分一人でしないといけなくなる。しかし不思議なことに兄が居ない家庭を想像できない、そう、居ること自体が当たり前なのだから。そんなこと想像できるはずがない、想像したとしてもきっとそれは実際のものとは何か違っているのだろう。

急に一人が静かに考え方をし始め、それを見た有一と咲月は慌てて、

「よつしゃ食べようよ！咲月さん、今日は豪華だねー」

「そうだよー！今日は腕によりをかけたつてやつだもんねー…わざ、お一方食べようじやないか！」

と目の前の夕食に注目させた。

んじや今度こそいただきます、と呟く善人は咲月とじよこの手料理を口に頬張った。

善人がそれを口に頬張るのを見てこよは、

「多分善兄のお母さんには負けるけどこれでもじよこも結構長い主婦だからね。で、お味はどうつすか？」

と、タメ口なのか敬語なのかそこはスルーする。

ともかく、お味は？と訊かれた善人は間髪入れず、
「うんウマいよー。正直毎日こんな美味しいもの食べられる有一が羨ましいぜ」

と二二二二しながら答えた。その顔を見て咲月はさつきまでの悲しそうな人は何処へいったのやら。と正直ホツとした。

その後もどんどん箸が進み、3杯もおかわりした善人は今ソファに腰を据わらせ、ふー。とお腹を落ち着かせている、そんな彼の表情を見る限り満足したようだった。そしてこよいと一人、食器洗いをしている咲月はどこか嬉しそうだった。

「良かつたね、善兄満足してゐみたいだよ」

そうこよいが咲月に言つ。

「うん、そうみたい。良かつた、安心した」

それからも善人のお泊りはまだまだ続くのであった。

今回とある文庫本を参考に文章を書いてみました。表現技法を真似たのではなく、あくまで文章を参考にしましたので、表現技法が上手くなつたとかはありません。むしろ見栄えが悪くなつたり、よくなつたりするのかな?とにかく、また自身で確認します。ではまた月曜に。お相手は投稿日を決めたのに待ちきれずに投稿した柴わんこでした!

48話（前書き）

もう一回だけ少しだけ長い文章量でお送りします。これでオーバーした2週間分は取り戻せた…のか？

ではサービスが混じっている48話をどうぞ

「よいと善人で何やらおしゃべりをしている様子だった。

「善兄は、妹に何かされてみたい」とつてある?」

「やつぱお兄ちゃんつて抱きつかれたいよなーあと抱きついて離さないからねとか言われたらやばそつ」

そんな二人を、つたぐ、せつせから一体何の話しをしているんだとテーブルの備えイスに座り、咲月がじーっと眺めていた。

それにしても意外なことに善人とこみーの話が進むことにちょっとびり驚いた。この間は善人にきつい事言つちやつたけどもういつその事こよいちゃん貰つてくれないかなー。そしたら有りちゃんと一人つきりなのに……つてなに考えてんのよあたしは。

はあ、と、ひとりため息をつき咲月はどこかへ行ってしまった。

ほぼ入れ替わるかのように、浴室から戻つた有一が、お風呂の存在に気づいた。

とりあえずお風呂に入らなきや、でも今日は先に善人を入れるべきだよな。そう思い、有一は先にお風呂入つてこいよ。と善人に言つた。

「それじゃお先にー悪いな、一番風呂だぜ」

少しにやけた善人がそう言ひ、嬉しいのだろうか、そんな彼に対しても「有」は、

「おう、行つてこい、もちろん着替えは持つてきたよな？」と、少しからかい口調でそう言つた。すると、善人はふふん、と鼻を鳴らし、

「なめてんのか？ああ？フハハ、ちゃんと持つてきたぜ！俺のパンダは『パンダさん』なんだ！」

と、もう見たまんまパンダという感じのフードつきのパジャマを有の目の前に掲げた。白と黒の2色で彩られ、フードの部分にはそれの特徴とも言える耳が、そして、それをかぶるとちょうど頭頂部に耳が来るよになつていた。とにかく、『かわいい』のだった。

しかし、そのパンダを見るや否や有が、

「おま、その趣味どうなんだ！？」

と善人に喰らい付く。ちよつと黙つてはいられなかつたようだ。

しばらく、二人の口論が続く……。

「うつせーー白黒の、いや、『パンダさん』の一体何処が悪いんだよ？！」

「白黒じゃなくて高校生になつて『パンダさん』つて！小学生かお前は！」

「くつー『パンダさん』は良いんだよー良いじゃねーか『パンダさんー』！」

「だからー俺が言つてるのはパンダ以前にその子供っぽい趣味止めよーつて遠まわしにだな……」

「残念だつたな！俺はもつ、かれこれ5年はこのシリーズを愛用してんだ！」

「5年！…つてかシリーズかよ…！」

「ああそれ『フード付きアーマルパジャマ』このパンダさんは

その一部なのさ…」

「他にもあるのか……つてか普通の、いやもうそれ以外にパジャマはないのか？」

「ない」

「ねーのかよ…」

その口論は突如終わりを告げる、終止符を打つたのは、

「ふたりともうつせこ、こよいが蹴つ飛ばしてあげようか？ああん？お兄ちゃんは特に強く蹴つてあげるよ、気絶でもしてくれたら……へへ、まずシャツから脱がそつか……」

「こよいだつた。そしてこよいはソファーから起き上がりつた。それを見て一人は『こんなことしている場合じやない』と直感した。

「よ、よーし善人！ふ、風呂行つてこい！そ、それから『パンダさん』になつて戻つて来い！」

「よ、よつしゃ行つてくるぜ！……なんだかこよいちゃんの裏側を見た氣分……」

少し動搖する有二を置いて善人は、とはいえた自分も動搖しているわけなのだが……まあとりあえず風呂場へ向かうことに。過去に一度雨に濡れて使わせてもらつたことのある善人に案内など必要なかつた。

懐かしいな、いつ以来だつけ？そんなことを思いながら善人は服を脱いでいった。

そして、浴室のドアを開けた。すると、

「つてつおおおおおおああああああ！」

「よつ善人！？……きやああああ！」

「という風に一人は遭遇してしまつた。コレはまずい。

「じ、ごめん！悪気はないしそれに見てませんつて…といつ、とにかくスマセンでしたつ！」

言い訳うんぬんは程ほどにして早くここから立ち去ることに善人は必死になつた。

「…バスタオル巻いておいて良かつた…」

そんな善人の判断が良かつたのか、自体は小さいまま收拾した。

まあとにかく、大事には至らなかつたようだ、しかし咲月は何故タオルを巻いていたのだろうか……その辺は謎である。もしかしたら有二の待ち伏せでもしていたのだろうか……しかし、やはり謎である。

一方、その声を聞いた者が少し不安がつっていた。

「一体何事？善人つてあんな声高いつけ？ちょっと様子伺つてこようかな」

その声の主は有二だつた。するとこよいが、

「それよりお兄ちゃん、こよいと一緒にランデブーしない？」

と、風呂場へ行こうとする有二を引き止める、あいにくな事に、また『二人つきり』になつてしまつた。前回は咲月に助けられたが一体その咲月はどこへ行つたんだろうか。ともあれ、そんな妹に対し兄は、

「しねーよーつてかお前、客が居るの何で普段よつ増して積極的なんだよ」

と、全力で俗に言つ『フラグ』とこつもの回避しようと見ていく

た。

「ふふ、お兄ちゃん大好きだよ」

「俺、お前のお兄ちゃん辞めて良いですか？」

「ふふ、ダメに決まってるじゃなー」

「ですよねー」

その後、怪しく光ったように見えたこよこの皿を見て有一は慌ててその場を出て行った。

48話（後書き）

サービスって一瞬じゃねーか！そんな方居ると思います。

でも、いつもまだ15歳、そんな上手いこと書けませんて（汗

では失礼します。

妹から逃げ出す兄」と有一はさつき甲高い声が聞こえてきたお風呂場へと向かった。

脱衣所のドアを開けながら有一は、

「おーい、甲高い悲鳴あげてどうしたんだ、よしひ…………と
？ え、あれ？」

と、目の前の人間に語りかける。脱衣所で服を着た誰かがいる、髪が濡れているという事はもう風呂から出た後なのだろうか。

「何？ 有ちゃん、お風呂場まで来てあたしの事襲いに来たの？ あたしとしては嬉しいなー」

「え？ よしひ……」

「つて違う違う… つたくなんで男と嫁の区別が付いてないのかな 有ちゃん？」

「だ、だよね、咲月さんだよね。で、あれ？ 善人は？」

ともあれ、自分の嫁と遭遇したようだ。それを認識した彼は、目の前のナイスバディな嫁から田を逸らし、さらに理性を保ちつつ、そういうえば善人のことが気になっていたので、と、善人の居場所を聞いてみた。

「あー、あの子なら多分有ちゃんの部屋に行つたよ、階段上がつて いつたからね、多分そうだよ」

「ああ、何でまた俺の部屋に……ちょっと行ってくる、多分ここで なんかあつたんでしょう？ 大体そうだ、絶対そうだね。ってかなん で一番風呂に入っちゃうかなあ？ そこは善人に譲ろうつよ……」

「あたしには譲れないものがあるのだ…」

「はこはい、分かったよ、見た感じちょっと着替えて脱衣所から出るところだね、それじゃ今度こそ大丈夫だね、ちょっと善人呼んでくれるよ」

「わん、違う違う

と、咲月は首を横に振る、そして続けて、「見た感じ、『ああ一緒にお風呂入ろうよ』ってことなんだよ…？ ねえねえ、善人のことは良いからさ、あたしと風呂入ろうよ…。背中洗つてあげるよ？ 頭だつて洗つてあげるよ？ きれいでつぱりにしてあげるよ？」

と、有二に急接近した。驚く有二の「などお構いなしに咲月はビビン一緒に風呂に入る口実を並べていった。

「え、いいよ」

「良いの…？」

「ちょ、違つ！ 否定的な意味だつて！ NOだつて！」

「んだよーーーかよ、ちえ、つまんないよー、あたしとしてはもつといつ……刺激が欲しい…！」

「……咲月さん、そういう事はあんまり言わないで、俺だつて理性というのがあるの、OK？」

「ふふつかわいいな、有ちゃん」

「なつ…んじやもう呼んでくるからね……だめだ疲れるよ」の

家庭

妹に困られ、嫁にも困られた旦那なのだった……。

49話（後書き）

なんだか落ち着かない毎日を過いでおります。いや、……リアルとの両立が難しくなつていています。

まあ、いつはいつでも楽しいですよ、もうじき一ヶ月になるかの、……はあーやめとこ、なんか自分で少しこですねと感じたところで失礼します。

予定では水曜もあげられると思こますので読んでやってください。

出来ればズバリ「面白かった」のかどうか分かる感想をくだせると作者は喜びます。

50話（前書き）

いい加減善人のお泊りはいつたん停止です（笑）

と、ここであの人の話を入れますね。では本編をどうぞ。

「まーもるつ！衛！」

「ん？ あくらじゅん、どうした？」

ここに、衛に對して積極的にコロコロニケーションをとる少女がいた。その少女の名は、椎名あくら。彼女は入学してから一日一回は必ずと言って良いほど衛に話を掛けていた。

そしてその少女を監視するかのように一人の男子生徒が一人に対して少し距離を置いてそのやり取りを見守っていた。

（つたく、衛の奴、あいつ彼女いるらしいじゃん。詩織による情報が正しけりやこれつて浮気なんじゃねーの？大丈夫じゃないだろどうすんだよ詩織よ……俺はいつやって伝えるだけだけどさあ、つておい！）

さつきまでボーッと見つめていたその目が突然大きく開かれた、彼のその表情からして、どうやら驚いているようだった。

「帰ろー衛、さあさに行こうー」

「うん、帰ろうか」

と、帰ろうと誘うのやはりあくらで、そしてその誘いを嬉しそうに答えたのは紛れもなく高垣衛本人だった。見たところ一人は一緒に下校をするようだ。しかし今までそんなことはなかった。そもそも衛はそんなことをしていいのだろうか。

ちなみにこの一人、クラスの一部から『付き合っているんじゃな

いか?』という噂が立つており、彼のように監視などしなくとも『人がどんなに仲が良いのかはそれなりにクラスの連中はうわさして知っている。

椎名さくらは今ここで一人を監視している彼と水橋詩織の中学からの友達だった。そもそも彼が詩織に嬉しそうに彼氏が出来たっぽいぞ!と伝えたときからこの事件はその重大性を現していった。

中学の頃、美咲とさくらが同じクラスではないのがイケなかつたのか、それとも衛と美咲、この二人の交際をさくらが知らなかつたことがイケなかつたのか、また、衛が彼女がいることをさくらに教えないでこのようなことをしているのがイケないのか。そのようなことを詩織と二人で考えたが結局そんなことを考えていても仕がないと気づき、とにかく衛を信じて見守つていようという結論に至つた。が、詩織としては彼女がいるのに他の女と仲良くやっていることが腹立たしく見守るというより監視せよ。と彼にその使命を授けたのだった。

「よつと……」

その彼がそう言いながら席を立つた。

「ん、静也今帰るのか? それなら俺も一緒に

そう声をかけられ彼は用事があるからな、わりい。と首を横に振り、たつた今出て行つた二人のあとを追つた。

(頼むから何も起こらないでくれ、でも俺はあまり衛の事を知らない、むしろさくらの友達だからさくらの恋を応援する立場なんだけどな……詩織の奴が衛の彼女の味方だから仕方ないか。ってか俺、

俺だよ、なんでこんなこと引き受けひつてんだよ、思いついた
くらかひしてみれば邪魔じやねーか……はあ追つかないとい

50話（後書き）

グダグダな文章でいいません！神視点を多用するのが久々なので
ちょっとリズム狂いました、ってかまた新キャラかよ……。この作
品何人名前を持つ人がいるんでしょうな……結構多い気がしていけ
ません。なんだかこうしてみると東方みたいな感じになってしま
たね。組にはあいつどこいつがいて、みたいな……。

感想待つてます、感想を貰つたときの嬉しさは半端じゃないですよ
！

「ねえねえ、今日さつちらの体育でさ……」
(はあー！衛君と一緒に帰つてよ私！さつきからしゃべりっぱなし
しだつたりして！ドキドキしつぱなしだつたりして！)

楽しそうに二人の男女が日が暮れかけている商店街の真ん中を歩いていた。周りから見ればもうカップルにしか見えないそれを、後ろから追いかける高校生が居た。彼はとある少女に頬まろ子の一人を監視、いや、彼からしてこの一人を見守つていた。そして今日もその最中だつたわけなのだ。それからもう十分だつと判断した彼は、

「まあ問題なさそうだし、帰るとすつか

と、言いながら、彼はぐるりと身を翻した、すると目の先に一人の少女が立つていた。一瞬彼女が居ることに驚きながらも彼はその子に声をかける、

「こんなところに居るなんて珍しいな、詩織」

「ひやつほーい！」
「おふうつ！」
「あはは『おふうつ』だつてーー！」
「兄をなめんなよ、こよこいー！」
「やああ大人の階段上つちゃうよーー！」

「ふつつ……どいでそんな言葉を覚えてきたんだよ……」

「つて、汚ねーぞ有ー！ たく睡飛ばすんじゃねえよ」

「仕方ないだろ、お前もさつきの聞いただろ？！ 嘘くわ！」

とまあ、とても楽しそうに「ココ一ケーションをとる高校生一同。そんな彼らを一人の女子が楽しそうに見つめていた。

（善人ホントに楽しそうだねえ、でもちょっととこよこちやん調子に乗つてるかもね、つてかあたしも混ざりたいなあー）

彼女は混ざりたいなーと思い、そして次の瞬間、よし。と心の中で何かを決めて席を立ち旦那の下へ近寄つていった。

そんな彼女を見て彼は声をかける、

「お、ちょうど良いところに咲月さん……よこをちょっとビビりにかけてくれる？」

そんな旦那の頼みを二つ返事で返し旦那にまとわり付く少女を引き剥がす、その少女は頑張つて抵抗する。

「やだよー」よこお兄ちゃんから離れたくない

「お兄さんは、あなたが離れてくれることを切実に願つてますよ？」

「よこさん」

そう言って彼女は旦那の妹を引き剥がす作業に取り掛かる。そんな彼女のセリフに違和感を感じた本日のゲストは、

「咲月さんのキャラ変わつてる……何キャラだ」

と、苦笑していた。そしてそんな彼を見て目の前で行われている作業を田の当たりにしながら、

「ああ、咲月さん演じる人だからね、気にしてる暇なんてないかも

よ」

「ふーん、なんだ」

と、有二が補足した。とかなんとかそういう言つてこりつちことりあえず彼の一難は去つた。のだが、その後。

「有ちゃん大好きだよーーあたしもこれやりたかったーーー」

「え……ええええーー？」

と、さつきまで我慢というか自重していた妻が旦那に直接攻撃し、旦那はそのままかの行動に驚きながらもその手はしっかりと抱きしめに動いている。そんな兄を見て妹はジエラシーを感じ声を張つて、

「ちよつとーー咲月姉ちゃんだけずるこよーー」

と、兄の妻に指を指す、とにかく離れてよと引き剥がそうとしたがさつきの力の差はもう田に見えて分かっているのでどうしても行動に移せなかつた。無駄だと分かつたからだ、そんな彼女がくそーと心の中で悔しがつていると隣のゲストがいつの間にか立ち上がりつまでなにやら言つていた。

「有二テメー、お前なに見せ付けてんの? こよにちゃんとだけならまだ許したがコレは許せなくなつてきたぜ、ふざけてんのか? なあ、ちよつくり俺がぶつ飛ばそうか? ああ?」

「 せいつー」

「 わやふつー」

そのセリフが聞き捨てならなかつたこよいはいつの日か兄の指を踏むおばさんを蹴つ飛ばすよつにけりをお見舞いした。

「ふふふ、お兄ちゃんをぶつ飛ばそつだなんていのいよこひやんを倒してから言つんだね！」

「しまつた……これは口が滑つたようだ、そしてこの蹴り、つひの妹のそれに勝つてゐるかも知れないな」

この楽しそうな4人、今の彼らには後に悲しき運命を辿ることなど誰にも想像できなかつただろう。

5-1話（後書き）

高校で誰かが呟いた一言。「石原都知事ばつかじやねーの、薄いのはあんの言葉の内容じゃなくてあんの髪の毛だけにしどけよ」つたくな言いてんでしょうなってかまづいですよね青少年健全育成条例……でしたつけ?なんか話し合いますぐに終わつたみたいですよ、ええ。それこそ

「今日『ノンベ』行く?」「うん、いこひか」みたいに。

え?なんですか?「そいつ都知事馬鹿にしてんのか?」ですって?

あはは、ばれてますね、だつて「僕」の将来についてつぶすようなことするんですよ?一体腹立てなくてどうしろって言つんですか(誰か=柴わんこ説浮上)大体中学の14歳あたりから高校の18歳辺りまで結構な数の生徒(人間)が好き好んでラノベを買うつてのにそれを規制する気かよ。ただでさえ低いかもしれない収入を削るんですねーはいはい。とにかく全国区に広がらないことを祈りましょうか。僕の予想だと広がりそうな気もしますがね、しかも『あそこもやつてるんだからこちらもやつておこひ』ってノリで。(ちなみにうちの中学の図書館にはラノベが置いてありました)

つてか收拾が付かなくなるので失礼します。感想下さいね、原動力になりますよ!ではでは次回もお楽しみに。

(最終回みたいな雰囲気になつてているのは気にしないでください、ラストで無理やりその雰囲気を無くして置きました)

日が暮れかけた商店街に一つの影があった。

その影の主である一人は小学校からの友達で、それなりに仲も良い。中学の頃はクラスが違ったのでそこまで交流はなかつたがそれでもメールのやり取りをしていたので結局は小学校から仲が良いということになるのだろうか。それはともあれ、そんな一人の久しぶりの会話が始まった。

「なんだよ、こんなところに居るなんて珍しいじゃん」

「私だって自分の目で確かめたいことがあるの、だから遠いけどここまで来たの……」

「……なんで? どうすんだ? あれ」

そう言つて彼はまた振り返つて例の一人の居た方向に視線を向ける、同じように彼女もその方向に視線を向けると残念そうに、

「はあ、やっぱりホントなのね……つたぐ、さくらもどうして高垣君を狙つたのかしら」

と、ため息混じりに感想を述べた。

「つてかさ……」

彼が急に話の腰を折つた。それに対し、何よ。と彼女が訊くと彼は彼女の姿をじっと見て、

「詩織つてば背は高くなつたけど相変わらず胸の大きさは変わらな

「ふんつ!!」

何かを言いかけた彼は地面に膝を付け声にならない悲鳴を上げたのだった……。

（実は手繋ぎたかったりして……でもその勇気が出なかつたりして……）

二人は肩を並べて下校していた。一人は高垣衛。もう一人は椎名さくら。彼らはカップルに間違われるほど仲が良い。でも衛には既に彼女が居る。そう、美咲のことだ。

椎名さくらは衛に積極的にアピールをしている。彼が好きだから。振り向いて欲しいから。そんな彼女だが実は衛に彼女が居るだなんて事は前から知っている。彼と同じクラスだった子から聞いていたのだ。彼女が居る事を知つていてこんな事しているだなんて知られたくないで衛に彼女が居るということについては知らないフリをしている。

（今はこんな調子だけど絶対に振り向かせちゃつたりするんだからね、私頑張るんだから……ふう、もうこんなところまで来ちゃつたよ、今日はここでお別れだね、仕方ないよね）

とある一件の家の前まで来るとさくらは別れを告げる、
「衛、一緒に帰つてくれてありがとう、迷惑だつたらごめんね」
「いいよ、迷惑じゃないし」
「え？ ホント？」

迷惑でないことに嬉さを感じたさくらは心底喜んだ。

「おう、俺嘘つかないよ？」
そう衛が言つとさくらはあえて、
「ふふ、衛のそういうところ私は『大好き』だよ」
と、『大好き』というワードを加えて、ばいばい、と手を振りながら家へと入つていった。その背中を見守りながら衛は、
「…………お、おう。ん、んじやまた明日」
と、なにやら慌てながら帰路へついた。

52話（後書き）

……あんま面白くない。ちなみに詩織は久しぶりに会う静也にたいして少しだけドキドキしていたりします。でも彼のセクハラな発言によりその感情はどこかへ行ってしまいます。恐るべき伏線破壊者^{フラグブレイカー}

面白いことが浮かばないのでここで失礼します。感想ください。

「ただいま」

とある一人の少女が自分の自宅へと帰宅した。彼女が自宅に帰るのは久しぶりのことだった。

昔は、家に帰るといつも先に帰つてゐる姉と弟の一人が出迎えてくれたのだが、今回は少し急だったためか誰も出迎えてはくれなかつた。そんないつもと違う感じに納得のいく違和感を感じつつ入つてきたドアを閉めた。

それから彼女は靴を脱ぎ、それからスリッパに履き替え恐らく誰かが居るであろう居間へと向かつた。するとそこには向かう途中の廊下で、

「やめろよ紗希姉！^{さきなべ}！弟を誘惑とかいじるのとかホント止めてくれよーっ！」

と、彼女の弟が少し田の先にあるドアを勢い良く開け放つて彼女の方へと何やら声を張り、そして慌てながら向かつてきた。その慌てぶりを田にして彼女は少しホッと安心感を覚えた。

居間から飛び出た彼は危険な姉から逃れるために慌しくその足を働かせていた。が、ドアを開け田の前に突然帰つてきた姉を見て彼はえ！？と驚きその足を急に止め、そして何故ここに居るのかと言葉を並べる、

「うそ、綾姉！^{あやねえ}？何でここに居るの……？大学は？つてか寮はどうしたの？」

そう訊かれた彼女は少しの間を置いて、ただいま、巧^{たくみ}。とはにかみながら言葉を返した。

いくつか弟に質問されているがその質問を彼女は気にも留めずスルーした。しかしそんな姉のその笑顔混じりの表情を見て弟は何かを感じたのか、

「綾姉……あつちでなんかあつた？」

と、訊いた。しかし返ってきたその返事は彼にとつて満足のいくようなものではなかつた。

「…………」「…………」「…………」

それから少しの間、お互に言葉に詰まつた。綾乃は、なにやら勘織つている巧に対し一体何を言えばいいんだろうと。そしてその巧はなんと言えば綾乃のその表情に隠れた気持ちを聞きだすことが出来るのだろうか、と。そんな一人の間に微妙な空気が漂つてゐるその時、

「お、綾乃じやん！ おつひむーどうだい？ いろいろ成長したかい？」
と、さつきまで弟こと巧を自分の色気を使って遊んでいた姉が現れた。

「ちょ、紗希姉、それどこのセクハラ親父だよ……つてか雰囲気がぶち壊しだよ、今さあ少しこう、シリアルスな感じに……」

と、ホントならばその後にも言葉を続けようと思った巧だったのだが、目の前にいる綾乃を見てその気が失せてしまった。彼の見た彼女はあははと笑つていたのだ。なんだ、『ちゃんと』笑えるのか、そう思った彼はその彼女を横目に、

「つて、綾姉も笑つてんじやねーよ」
と、苦笑しながら付け加えた。

「ふふふ、ごめん。なんか緊張が解けちゃつたよ」

そんな妹の発言に、姉が何やら反応する。彼女は妹から見て羨ましがられるその胸の下の辺りで腕を組み、左腕を支えに右腕を立て、その先の人差し指を自らの唇に当て、

「え、綾乃つてば緊張してたの？ 何で？ あ、もしこの家があたしたちでないほかの人気が移り住んでたらどうしよう……。とか？」

と、彼女なりの考えを言つた。が、どうやらそうではないらしい。目の前の妹が違うよー そうじゃないつてば、と、苦笑している。

そんな二人を見ながら、それにしても紗希姉はなんと的外れなことを言つんだ、そもそも移り住んでたら連絡するだろに、つてか綾姉はどうして急に帰つてきたんだろう……と巧は真剣に悩んでいた。とりあえず何かが上手く行つてないと考えるのが妥当だろう。今はそれで納得することにした巧だつた。そんな真剣に物事を考えている彼の目の前でまた悩みの種が爆発する。

「つてかさ、さつきは成長したかい？ つて聞いたけど普通に成長してるよねーうん、服の上からでも分かるよ」

そう言いながら紗希は綾乃の胸をじっと見つめる。どうやら彼女なりに成長を確かめているようだ。そんな姉に対して妹こと綾乃は、「ちょ、やめてよお姉ちゃん！ そんなに……じろじろ見ないで……」

と、恥ずかしそうに両腕で胸を隠すようにして姉に背を向ける。

しかしそんな態度が姉にはたまらなかつたらしく、「た、たた、たつくみーつ！ あなたの綾姉がまた一步大人になつたよー！」

と、弟にその喜びを分かち合おうとした。が、そんなハイテンションな姉とは違い、話し掛けられた弟は、はーーと深くため息をつき、「いの姉ホント疲れる……」

と、一人呟くのであった。

あれ、少し長いwつて感じの今回でしたw（（実は当初たつたの789文字だつたりして！ 椎名もへり風に

えと、何故か大学に居るはずの綾乃が帰ってきた回ですねー。一体彼女はどうして急に帰ってきたのでしょうか。ちなみに彼女はここに来る前に何処かの誰かさんに会いに行っています……が、残念ながら会えませんでした。そしてその残念さもあり彼女は少しだけ落ち込んでいます。（第45回のラストを参照）

あの、えと、感想を下さー、お願ひします。

面白かつたです、とか、　の場面に笑いました。」ウケましたと少し親切にも具体的に言つてくださいとかいうとしてはめちゃくちゃ助かったりしますよー！

あ、それ以外にもキャラに対するツッコミでもこいですょりりバンバン盛り上げていきましょー！

あと、本当に欲張りでしかありませんがどなたか百花繚乱様に統べ一つのレビューを書いてくださいなでしょーか？その気はあるけどやっぱり文章にして宣伝するのは面倒だ、という事であればこのサイトを使っている知人に「俺と彼女と妹と。つて作品あるんだけど、15歳のクソガキが書いてるみたいなんだよねwちょっとお前も読んでみなw」って感じで良いので紹介してみてください（URLを送ると完璧です）

なるべく多くに人に読んでもらってたくさんの意見が欲しいな、そう思つ柴わんこでした。ではでは、また近いうちにお会いしまし

商店街の真ん中を歩く一人の学生が居た。そして彼らと距離を置きながらずっとその様子を観察している人物がここにいた……。

「今のところ、現段階では問題ないよなーってかさくらのやつ、あいつ衛のこと見つめっぱなしだし……」

彼はとある女子生徒の命令により、この一人を監視していた。そしてその監視対象となっている椎名さくらは命令を下した生徒について「友達の恋敵」という位置づけとなっている。まあ、冷静に考えれば勝手に首をつつこんでいるだけなのかもしれないが。が、しかしそんなことを言つていると「じゃああんたは親友の彼氏彼女が取られる危機を目の当たりにしても何にも思わないの？！」とかなんとか言われそうだ。

この、何とかしようとする彼女だが、結局のところ彼を通じてもただその様子を見ているだけで何の接触も行つてはいない。なので、周りから見ると今、監視対象の一人を見ている彼はただのストーカーとなつていて。任意同行やら事情聴取やら、そんな大事だいじには至っていないのが幸いか。

平沢家、善人お泊まり生活一日目。

この日は、4人で買い物に行くか。ということになつていたのだが……何故か一手に分かれて別行動になつた。

【お兄ちゃん大好き！チームA】平沢有一&平沢こよい

【え、言つことなんてないよ？チームB】平沢咲月&有川善人

チームAはお菓子を担当する」と、そしてチームBは夕飯の食材を担当。チームAは今お菓子売り場にいた、有」といのだ。

「お兄ちゃんの腕を口シク……」

「「よい、痛い、痛いよ、」「よい」

「「これがこよいの愛なんだ……分かってくれお兄ちゃんよ」

「……なあ、ポッキービニだつけ?」

「ス、スルーされたつ！」

「つかつか自分のこよこは大好きな兄の腕にしがみついて離れよう」としない。当の兄はそんなこと一手に分かれた瞬間に悟っていたので「ああもう好きにしろつてんだ」と覚悟していた。

……にしてもやばい、俺の腕にしがみつく「よいがだんだん可愛く思えてきた、ダメだつて、こよに。いや、あえて冷たく接しているんだけど……出来ればそのまままで、つて咲月さんのが居ながら俺はなんてことを。

俺の腕にしがみつき、ほぼ等間隔でこちらを見ては、えへへと微笑む妹を横目に俺はフリーの腕に掛けたカゴにどんどんお菓子を入れていった、それにしても「よい……上目遣いす」こな。同じくらいの身長の咲月さんには「レが出来ないから悲しい」といひだつたりするんだよなあ。

そんな事を思つてこよとまた「よいがじこつと上目で、

「お兄ちゃん大好き」

なんてことを言つてくる。だけじゃつぱり俺は、

「つ、つむせえよ」

としが返事できない。昔はこよこのこと好きだったんだだけじゃつぱり咲月さんが現れてからはそういう顔では見ていない、と思つ。正直それは言葉だけかもしない、やはり自分のどこかではまだ口イツのことが好きなのかも知れない。でもやっぱ来年になつたら大学進学とか進路について考えたり目指したり、いつかはこよいと離れ離れになる日が……ってなんだこよい？

そんな真面目なことを考へていると何やらこよいがぐごぐいと俺の腕を引っ張つてゐる、そしてあれを見ててくれと言わんばかりに指を指してくる、が、どうもその指がビクビク震えている。まるで怖いものを見るかのように。俺は一つと嫌な汗が出てくるのを感じた、そして嫌な予感がするのを感じた、こよいの顔をみてその不安は更に勢いを増す。そう、事態は急変したのだ。

「な、なんだよおい……何だつて言つたんだよ」

最後にこよこの弓をついた顔を見て俺はこよこの指指す方へと田を向けた、

「つそだろ……おじおい、なんだよありやあ

そこには2人の男女がいた、男は30代前半といふところか、そしての方男に比べてとても若い、俺たちと同じくらこの子だらうか……それにもどかで見たような顔、こよこの距離が遠いのもあって一体誰なのかよく思い出せない。近づけばよく顔が見えてこのモヤモヤが晴れるのだろうが、しかしこの状況を見て果たして近づく何なんてことが出来るだらうか。

事態は決して生易しいものではなかつた。

男は自らの右腕を女の首へとぐつと押し込み、左手に持つたナイ

フを女の首に突きつけた。勘弁してくれよと、それを見た俺は背中に冷やりとする何かが流れいくのを境に意識をしっかりと持ち、そしてすぐさまカゴを置いて更に強く腕にしがみつくこよいを一旦引き離し、直後こよいの腕を強く掴みその場を離れようとした。しかし、

「待つて……待つて！」

一度も、待てとこよいは言った。一体何を考えているんだ、思わず俺は、声を荒げて言い放つ。

「馬鹿か！？早く逃げないと危ねーだろうがーー！」

他の誰でもなくコイツのために俺は早くこの場を離れたい、でも何でコイツは踏みとどまるんだ。もしかしたら巻き添えを食らつかもしれないってのに。

乱れる息を整えながらも切羽詰つた様子で睡を飲み込み、こよいはこう言った。

「あっ、あそこへ、居るの【美咲】だよ……ー何とかしないと、早く何とかしないと……！」

54話（後書き）

明けましておめでとー！（（全くもってシリアルスプレイカーなー言。

今年も始まりました【俺と彼女と妹と】年も明けたとこりとで
ね、特に、特別なことはないんですけど。（（ないのかよ

まあ前話と時間が空いたとこりとでほんの少し長めにしてあります。

ってか急展開ですいません、でもトラブルはいつも突然だと思つん
ですね、もし仮に伏線なんであつたら、予期した事態になつてしまつた……！なーんて……どこのギャグですか「！」。

ところがで今年も頑張りますよー！なので感想よろしくお願ひします！評価も待つてます！では失礼します！！

何故か俺はいつの間にか友人の嫁と一緒にお買い物をすることになった。その友人は今彼の妹と二人でお買い物をしている、と思う。俺の考えが正しければ妹に襲われてたりしてるともしない。彼の妹はいわゆるブラコンというやつで正直そんな妹が羨ましい、俺にも妹はいるが顔を合わせると少々棘の含まれた会話をしがちだ、まるでそれはドッヂボールのようなものだ。ちなみにその妹は今俺とは違う高校に通い、アパート暮らしをしているんだとか……噂に聞けばなんかもう一人同居人がいるらしいが、もしかして男か、いやいやあいつに限つて男と二人屋根の下だなんてありえねーよ、俺としてはそうでないことを祈る。

咲月は、今日の夕飯を何にしようかと悩みながら善人Withカードを引き連れて食品売り場をぐるぐると回っていた、ちなみにカレーを作るか、簡単にチャーハンでも作るか、それとも久々にオムライスでも作つてみようかと悩んでいた。ちなみにオムライスを想像すると有二を学校から引きずり、自宅へ連れ込んだ事を自然と連想してしまい少し彼女の頬が緩む。

「いやあ平和つすねー善人君ー」
「え?ああ、平和だ……つすねー」
「くふふ、だつすねーてなによ~面白いなあ善人」
「そりやどうも」

こんな普通の楽しそうな会話をしている二人は今現在同じ空間にて事件が起こっているのをまだ知らなかつた。ましてや、どこのアパートで住んでいるのかも知らない妹が関わっているだなんてカート

の持ち手部分にだらーんと全体重を預けている兄の善人は想像するていなかつただろう、いや、そもそも事件が起こるだなんてことすら、想像していなかつたに違いない。

「今頃有ちゃんたち何してんだろ」

「さあね、俺の考えることには、こよいぢやんが有一に抱きついて

たりするんぢやないのー？ ってかいいの、そんな事をせて」

「まあ、嫌だけどねー。でもこよいぢやんに悲しい思いをさせてく

無いんだよね、だからたまにはいいやとか思つてる」

「ふーん、そんなんだ。てつきりこよいぢやんは姫川さんにとって少しお邪魔な存在だと思つてたよ」

「お邪魔だなんて、そんなことはないよ。こよいぢやんもあたしの家族の一員なんだから」

こんな話をしながらの二人が一通り回つて今から必要な食材を取りに行こうかと思っていた頃、咲月の耳に変な話が入つてきた。そ
う、あの話だ。

それは営業員から営業員へ話が伝わる際に聞こえたものだった、そ
してその内容は咲月にとつて有一とこよいの安否が気になつて仕方
なくなるような内容だった。

「山崎さんー」

と、一人の若い男性店員が彼より少し年上に見える店員さんに声を掛ける、その声のおかしな雰囲気から一体なんだ、と山崎と呼ばれた店員はその男性店員を、つるさないぞ、お客様に迷惑だらうが。と叱り付け、とりあえず話を聞こうと、で、どうしたんだ森岡、と付け加えた。

すると叱られたことに対するすみません、と初めに謝罪を入れ、森岡と呼ばれた男性は目の前の山崎という男性に事情を説明した。しかしどうやらこの男性も誰かから伝えられているようで具体的なことは何一つとして知らなかつた。

「実は、お菓子売り場付近にてどうやら事件が起つたそうで……」

「なつ、事件だと……！一体それでどうなつたんだ？」

「山崎さん、声が大きいですって、だから今静かにお客様の避難を進めているところです、なのであなたにも手伝つてもらおうかと思つたんです」

「あ、ああ、分かつた……とりあえず、そこにいる一人の男女は俺に任せておけ」

と、いう話を咲月は聞いてしまつた。そしてお菓子売り場付近というワードが彼女の心拍数を跳ね上げる。そう、お菓子売り場には大切な家族となつたあの一人がいるのだ、無理もない。そして彼女は自分達を避難させると言つた山崎という男性から素早く離れた。もしかすると咲月自身が二人を見つけ出しその二人を避難させようと いう気なのかもしれない。ここで山崎という男性の指示に従い一旦外へ出てしまうと恐らく中へはもう戻れないだろう。それはつまり咲月のやろうとしている行動に大きく妨害してくることになる、だから自分達を避難させようとしている山崎という男性からの意を外れるために離れたのだろう。

そして突然の早歩きに焦りながらついて来た善人は咲月にどうしたの？と訊いた。

彼女は焦つていた。

ちょっと待つてよ、お菓子売り場つて有ちゃんがいるところじゃな

いの……！なんでそんなところで事件だなんて起こってるのよ、だ
いたい事件だなんて一生に一度遭遇するかしないかでしょ？！なん
であたし達がそれに遭遇しないといけないのよ……！有ちゃん大丈
夫かなあ、ケータイ掛けてみようか、出てくれるかなあ、とにかく
どうか無事で居ますように。

55話（後書き）

【次回予告】（来週末までテスト期間のため）

平凡な、いやそうでもないような、でも至つて普通の暮らしをしてきた彼らは突然事件に巻き込まれる、その事件の真っ只中にいる有二はこよいを連れ、離れようとするがそれをこよいが許さず有二とこよいは更に事件に巻き込まれ……！？そして二人の元に鳴り響くケータイの着信音、兄と代わりこよいが善人に言つた言葉とは？そしてそれを聞いた善人の取つた行動とは？ナイフを突きつけられ首から血を流しぐつたりとしている美咲の運命や、いかに。乞うご期待……はしないでください。

突然の事件に巻き込まれた二人、二人のずっと田の先にはナイフを人質に突きつけている男が居た。距離にしてみると近くはない、逃げようと思えば余裕で逃げられる距離だ。だからここにいる兄は妹を連れて逃げようとした、が妹はそれを拒んだ、なぜならその人質は彼女の中学時代の親友なのだったからだ……。

「美咲を助けなきや！お兄ちゃん！」

「こよいが何かに急かされるようにそう言つた、

「つて言つても、お前……どうするんだよ」

「それは……」

次の言葉に詰まるこいつのことを真剣に思つて自分の思つていることを並べていく、

「いいか、確かに友達が目の前で危険にむかされていて助けたいと思う、その気持ちは良いと思うけどな、俺たちみたいな奴らが下手にあの男を刺激したら美咲ちゃんはどうなると思う」

「・・・・・」

「あんなにナイフを喉に突きつけていてるんだから逆に刺さらないよう注意しているはずなんだ、だから俺が考えるには、そのまま気をつけてくれないと逆に首から血が流れる事になるつーかあの位置は防犯カメラに丸映りじゃないか？はつ、バッカじやねーの、そして誰も店員が来ねーのはどういうことだ？お密置いて逃げてんのか？」

「どうもさつきからおかしい、少し俺もイライラしてきた。あの男は何がしたいんだ？人質を取つて金が欲しいのか？だつたらなんで

そんな場所にいるんだ？レジに行けば良いだろ？

そんな事を思つていると一人の男性が男に何かを言つた、
「おいお前！ 一体なにがしたいんだ！ その子を離しなさい！」

すると男は、

「う、うるせえ！」これは復讐だ！ ここは店長へのな…」
と言つた、復讐？ 一体何があつたんだ、誰か聞きだせ、話で解決
するならさつさとそうしろ。

「一体店長に何をされたんだ？」

その男性は俺の気持ちを代弁するかのように男に近づきそう尋ね
た。

しかし、近づいて来た事に対しても男は、

「おい！ 近づくなっ！ こつこいつの喉が切り裂かれるぞ……！」
なんてことを言つたもんだから男性は一步後ずがりをした。

それから男はこう続ける、

「おい！ 警察なんて呼んだら殺すまでは行かなくともこの子の首に
切り傷を入れるからな…！」

それは防犯カメラに對して発した言葉だった、なるほどだからそ
こにいたんだな、俺は少し納得した。が、さつき言つていた復讐と
は何なのか、俺はそれが気になり始めた。

そんな時俺の携帯が鳴つた、この着信音は電話だ、俺は携帯を開
き、相手の名前を見てハッとして、急いで通話ボタンを押してそれ
を耳に当てた。すると、

「有ちゃん大丈夫？！ 今どこ…？ つてかホントに大丈夫？！」

と俺のよく知る大好きな人からそんな言葉をかけられた。一度も大丈夫?と聞いてくる辺り、本当に心配してくれているんだと少し嬉しくなった。

「うん、別に大丈夫だよ、それから今お菓子売り場にいる、あと、こよいもここに」

そう答えると、

「今ね、そこで事件が起つてるのでだから有むぢやんは早くそこから避難して!」

と、言われた。しかしそれが出来ない、その理由も付け加えてこういった。

「いや、こよいのやつが離れたがらないんだ……少し咲月さんからも言ってやつてくれないかな?」

「わ、分かった!だから早く代わつて」

それから俺はこよいに代わるよつて言つて、電話口にこよこを出した。

「こよいちゃん、いいから早くそこから離れて」

「やだ、こよいは友達を見捨てられないよ」

「……それって一体どういうこと?」

「咲月姉少し、善兄に代わつてくれる?これは言わない」といけないつてのがこよいにあるの」

そう言つて少しの間があり、こよいは今起きている事件について話し出した、恐らく今話している相手は善人だらつ、そして電話を切る寸前にこよいはこいつ言い残した、

「その人質、美咲なの……お願い、助けてあげて」

それからこよいは電話を切り、俺にそれを渡す、そして俺は一瞬、しまつた迂闊だったと自分を一喝し、素早く犯人の男の方を見た、するとそこに映っていたのは……。

ぐつたりとしている美咲ちゃん、違う！俺はそんなつもりじゃなかつた！と、大声を張つて音を立てナイフを床に捨てる男、そしてそのナイフを遠くに蹴つ飛びだし、救急車を呼べと叫ぶ男性だった。

そしてその次の瞬間、俺はうそだろ……と思わず声を漏らした。

男性が蹴つたそのナイフはこぢりへと滑り込んできた、そのナイフがどんな形状なのか細かく分かるほどにまで。そしてそれを見て俺は声を漏らしたのだった、なぜならそのナイフの先端に赤い血が付いていたのだから……。

56話（後書き）

感想ください、お願ひします。

また深夜から書いてるのでクオリティが保障できません（現在2
6時43分）

では、眠いのでこれにて失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7679k/>

俺と彼女と妹と。

2011年2月15日06時07分発行